

軽々しい御有様を工合悪くお思ひになる。法師は此のやうに籠もつてゐる間の物語などを申し上げられて、「同じ柴の庵ではございますが、少しは涼しい水の流れもお目に懸けたうございます」と懇ろに申し上げるので、君は僧都の、まだ見たことのない人々に、仰々しく言ひ聞せたのを、恥づかしくお思ひになるが、身に沁みてゐる稚兒の有様が訝しく思はれるので、お越しになつた。成る程心持が格別で、趣のあるやうに、同じ本草でも植ゑなしてある。月の無い頃なので、遣水に篝火をともし、燈籠にも火を入れてある。南面を清らかに取締つて、名香のほひを満たしてあるが、君の衣の追風の香がひどく格別なものなので、家の人々は、不似合ではないやうにと心づかひをすることであらう。僧都は世間の無常なものであるお話、後世の事などお話し申上げる。君は御自分の罪の程が怖ろしく、よくもない事に心を染ませて、生きてゐる限りは此事の爲に思ひ悩むことであらう。まして後の世の罪はひどい物であらうと思ひ續けて、かうした住まひもしたものだと思ひになるものの、晝間見た面影が心に懸つてゐて戀しいので、「ここにお住ひになつてゐるは何方ですか。訪ねたいといふ夢を見たことがあります

した。今見てそれと思ひ合せたことです」と申されると、僧都は笑つて、「率爾な御夢語でございます。お訪ねになりましたも、御心劣りがなさいませう。故按察大納言は、亡くなつて久しいことでございますから、御存じのほすがありません。その北の方は某の妹でございます。その按察が亡くなりました後、世を捨てましたが、此頃病氣を致してをりまして、手前が此のやうに京にも出ずにをりますので、頼もし所にして籠もつてゐられるのでございます」と申上げる。「その大納言にお娘があると伺つてゐましたが、その方は、好色好色しい心からではなく、眞實で伺ふのです」と推量で仰せになると、「娘がただ一人でございました。亡くなつて十年になりませうか。故大納言は内裏に奉りたいなど申して、大切に育ててをりましたが、本意のやうにも致せずに亡くなりましたので、ただ此の尼君が一人で扱つてをります中に、何ういふ人の媒ですか、兵部卿の宮が内々にお通ひになるやうになりましたのに、御本臺の北の方が貴い方で、辛い事が長くて、明け暮れに嘆いて亡くなつてしまひました。嘆きから病氣になるものだといふ事を目に近く見ましてございます」など申される。それならばその子だと君はお思ひ

合せになつた。宮のお血筋で、あの方にもお似通ひしてゐるのであらうと思ふと、いよいよ身に沁みて我が物としたくなつて、身分も貴くて美しくて、生中の賢こ立てもなく、一しよにゐて我が心のままに育てて見たいとお思ひになる。「ひどくあはれであられた事です。その方は世に残された形見ありませんか」と、あの幼かつた人の身の上を、もつと確かに知りたくてお尋ねになると、「亡くなりませう頃にございました。それも女でして。それにつけて又、物思ひの種になりました。齡の末に嘆いてゐるやうでございます」と申上げる。それだからだと君はお思ひになる。「變な事です、若い人の御後見にお思ひ下さるやうにお話し下さいませんか。思ふ所があります。まして、行き拘づらふ方もございますが、心の染まぬとでも申すのでせうか、獨住みばかりをります。まださういふ年では無いとして、世間並の者にお准へになつて、不都合な事をお思ひになりませうか」と仰せになると、「ひどく嬉しい仰せではありませんが、まだ全きり子供のやうでございますから、戯れとして御覽になる訣にも行きますまい。そもそも女は、人にもてなされて大人にもなる物ですから、委しい事は取次げません。あの祖母の北の方に話を致しまして、御

返事を申させませう」ときつぱりと云つて、しやんとした様子をされるので、君は若いお心に恥づかしく、よくは話はお出来にならない。「阿彌陀佛の入れられる堂に、する事がございます時刻です。初夜をまだ勤めてをりません。しまつて伺ひませう」といつて、其方へ昇つて行かれた。

君は心持もいたく惱ましいのに、雨が少し濺いで、山風が冷やかに吹いてゐるに、瀧の音も勝つて来て高く聞える。少し眠さうな讀經の聲が絶え絶えに凄く聞えて来るなど、そぞろな心の人でも所柄ものあはれである。まして君はお思ひめぐらしになる事が多くて、微睡さへも出来にならない。初夜だといつたけれど、夜もひどく更けてゐる。内でも人の寝ない様子がつきりして、數珠の脇息に觸れて鳴る音がほのかに聞えて、なつかしい衣摺の音も上品だとお聞きになつて、其方との程もなく近いので、外に立て續けてある屏風の中程を少し引き開けて扇を鳴らしてお召になると、覺えのない心持がするやうではあるが、聞き知らないやうにも出来なと思つて、るざつて来る人があるやうである。少し身を退かせて、「變ですこと。聞き損ひか知ら」と迷つてゐるのをお聞きになつて、「佛の御知道は、冥い所へ入つても少しも間違はない

ものですよに」と仰せになる君の御聲の、ひどく若く上品なので、女房は御返事をする聲こゝろづかひも恥づかしいけれど、「何ういふ方かたへの御知おんしるべ道をするのでせうか、分りかねまして」と申上げる。「成る程せつじ爾しなことだと、お分りになりかねるのも尤もですが、

初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞかわかぬ

〔歌意〕 初草の若葉を見た時から、我が旅寝の袖にも、その葉に置く露に似た涙が乾かないことです。「初草」は女の子の譬。「露」は、旅の侘びしさの涙の譬。すべて尼君の歌の詞。

と申上げて下さらないか」と仰せになる。「更にこのやうな御消息みせうそくを承り分けるやうな方かたの入らせられせん事は、御承知のやうに存じられますに、何方どなたにでせうか」と申上げる。「自然このやうにする訣があつて申すのだらうと、汲み取つて下さい」と申されるので、女房は入つて尼君に申す。「まあ當世風な、この兒が年頃でゐられるのだと思召すのであらう。それにしてはあの若草のことを何うしてお聞きになつたのだらう」と、色々いろく不思議なので、心も亂れて、久しくなるので、お返歌かへしをしないのは情なさけが無いと思つて、

枕結まくらむすふ今宵ばかりの露けさをみ山の苔にくらべざらなむ

〔歌意〕 草枕を結ばれる今夜だけの御露けさを、山籠りをする手前の苔の衣の露けさにはお較べにならずにいただきましたうございます。

乾ひ難がたうございますものを」と申上げられる。「このやうに人傳ひとつたでにする御消息みせうそくは、まだ更に存じもせず、習ひも致しません。恐れ多くともかうした序ついでに、眞實に申上げたい事がございます」と申されると、尼君は、「何うして僻事ひがごとをお聞きになつたのだらう」といはれ、ひどく心恥づかしく思はれる君の御様子に、「何と御返事の申さうやうもない」と云はれるので、「工合くわい悪く思召しませう」と女房どもはいふ。「如何にも若い人だつたら極りも悪からう。眞實に仰しやるので忝かたじけなくい」といつてゐざり寄せられた。「卒爾ついでで、淺はかだと御覽になりさうな序ついでですが、心ではさうは思つてをりませんので、佛は自然にも」といつて、尼君の大人々おとなしくして極り悪く思はれるのに遠慮えんりょされて、直ぐには云ひ出せずついでにゐられる。「いかにも思ひ懸けもない序ついでに、此れ程までに仰せ下さるのも、淺くは何で思ひませう」と尼君がいはれる。「あはれに承るお有様です

が、お亡くなりになりました方の代りに私をお思ひ做し下さいませんか。私も何も分らない程の年で、睦ましい人に死に別れましたので、變に取り止めのないやうで年月を重ねたこととございませぬ。同じ様で入らせられるので、同類にして戴きたいと本當に申し上げたいのを、かういふ折も得難いのです、思召も憚らずに申出る次第でございます」と仰せになると、「ひどく嬉しくお思ひ申すべき御事でございますが、お聞き違ひがおありになつたのではなからうかと、御遠慮申されます。つまりないこの身一つを、頼もし人としてをります人がございますが、ほんのまだ何も分らない者で、お見許しを願ふといふ程にも行かない者でございますので、承り置く事も出来なかつたのでございます」と云はれる。「すべてすつかり承つてをりますので、窮屈にお思ひ憚りをなさいませぬ、思ひ寄ります様の異つてをります私の心持の程を御覽下さいまし」と申されるけれど、いかにも似氣ない事を、さうとも知らずに仰しやるのだとお思ひになつて、心の解けた御返事も無い。僧都が來られたので、「ままよ、此のやうにお話を始めたので、ひどく頼もしいことです」といつて、屏風を引き立てになつた。

曉方になつたので、法華三昧を行ふ堂の織法の聲が山おろしの風に附いて聞えて來るのが、ひどく尊く瀧の音と響き合つてゐる。君、

吹き迷ふ山おろしに夢さめて涙催す瀧の音かな

〔歌意〕 吹き廻る山おろしの風に夜の眠が覺めて、涙を催させる瀧の音ではある。「夢」に煩惱を譬へ、「涙」に感涙の意を持たせてゐる。

僧都は、

さしぐみに袖濡らしける山水に澄める心は騒ぎやはする

〔歌意〕 さしぐむ涙に袖を濡らされたといふその山水に、ここに住んでゐます身は、心が驚かすとも致しませぬ。「すめる心」は、佛法の爲に澄んでゐる心の意を掛けてあつて、僧都の自負。「さしぐみ」、水、「すめる」は縁語。

耳が馴れてをりますせうか」と申し上げられる。明けて行く空は深く霞んで、山の鳥どもは何所ともなく囀り合つてゐる。名も知らない木や草の花が色々に散りまじつて、錦を敷いたやうに見えるのに、鹿の佇んだり歩いたりするのも珍しく御覽になるにつけ、惱ましさは紛れ

盡した。聖は動くことも出来ないけれど、とやかくして加持をして上げる。嘔がれた聲の齒を漏れて聞き憎いのもあはれに、功が見えて陀羅尼を讀んだ。お迎への人々参つて、病の愈らせられた喜びを申上げ、内裏からも御使があつた。僧都は滅多には見られない様の御菓物を何くれと、谷の底から掘り出しまでして御まかなひ申上げる。「今年だけは山を出られない誓が深うございますので、お送りにも参れない事、お目に懸つて却つて思ひ出の悲しくなる事でございませう」と申上げて、酒を奉られる。君は、「山水に心が留まりますが、内裏から覺束なく思召し下さるのが恐多うございますので。おつつけ此の花の散つてしまはない中に又参りませう。

宮人に行きて語らむ山櫻風よりさきに来ても見るべく

〔歌意〕大宮人に行つて話ませう、この山櫻を、それを散らす風の吹く前に来て見るやうにと。

と仰せになるお振舞、聲づかひまでも、見る目もまばゆいまでなので、僧都は、

優曇華の花待ち得たるここちしてみ山櫻に目こそ移らね

〔歌意〕優曇華の咲くのを待ち得たやうな心持がして、山の櫻にはまるで目も移りません。「優曇華」は佛典の中にある極めて稀有な花で、佛の出現に譬へるもの。今は源氏の君の譬。

と申上げると、君はほほ笑んで、「時あつて一度咲くもので、見難いものだけに」と仰せになる。聖にお益を賜はると、聖は、

奥山の松の扉を稀れにあけてまだ見ぬ花の顔を見るかな

〔歌意〕奥山にある松の扉を稀れに開けて、まだ見た事のない優曇華に似たお顔を見ることである。「まだ見ぬ花」は優曇華で、源氏の君の美しさの譬。

といつて泣いてお見上げ申す。聖は君の御身の護りに獨鈷を奉る。それを見て、僧都は聖徳太子が百濟から得られた金剛子の珠數に、玉の裝飾をした物を、これもその國から入れて來た筈で、唐めいた物を、透いて見える袋に入れて、五葉の松の枝に附けて、又紺瑠璃の壺にお薬の色々を入れて、又藤の花、櫻の花などの枝に附けて、所につけての御贈物を捧げられる。君は聖を始め讀經をした法師の布施や、用意の品などの、様々を京に取りに遣はされたので、その邊の山賤までも然るべき物を賜はつて、讀經をしてお出ましになる間に、僧都は内に入られて、かの、君より申されてゐた事を尼君にお聞せになると、「何うかうと唯今では申上げやうも

ありません。もしお志がおありになりますならば、もう四五年も立つての上で、とにかくの事に」と云はれるので、僧都も、その通りだと思ひ、同じ様にばかりいふので、君は不本意に思召される。尼君への御消息を、僧都の許にゐる小さな童を使として、

夕まぐれほのかに花の色を見て今朝は霞の立ちぞわづらふ

〔歌意〕夕暮に、ほのかに花の色の美しさを見まして、今朝は名残が惜しくて歸りかねてゐます。「花」は女の兒の聲。「霞」は「立ち」の序。

御返歌、

まことにや花のあたりは立ち憂きと霞むる空のけしきをも見む

〔歌意〕本當でございませうか、花のあたりは立ち憂いと仰せになるのは。私もその花を霞ませてる空の様子を見ませう。「花」は前の歌と同じ。「霞むる空のけしき」は、君がかすめ云はする御心の後々の様子の意。

と嗜みのある手跡で、上品な字を、繕はずにお書きになつてゐる。お車に乗られる程に、大殿から、何處ともお知らせなくお出ましになられた事ですといつて、お迎への人々、君達も大ぜ

いお出でになつた。頭の中將、左中辨、ほかの君たちもお慕ひ申して来て、「このやうなお供だと致したいと存じてをりますのに、餘りなお見棄て方です」とお恨み申して、「これ程おもしろい花の蔭に、少しも休まずにお歸りになるといふのは、満足の出来ないことです」と云はれる。岩隠れの苔の上に並んでゐて、盃をお取りになる。落ちて来る水の様など、趣ある瀧のほとりである。頭の中將は懐から笛を取り出して吹きすさまれる。辨の君は扇を何となく鳴らし、て、「豊浦の寺の西なるや」と謡ふ。何れも人並よりは格別な君達であるのに、源氏の君のひどく勞れられて、岩に凭り懸つてゐられるのは、類もなく怖ろしいまでの御様なので、何事にも目が移りさうにもなかつた。例の筆篋を吹く隨身、笙の笛を持つてゐる風流者などもゐる。僧都は琴を自身で持つて来て、「これではんの御手を一曲遊ばして、同じことならば山の鳥も驚かしませう」と達て申上げるので、君は、「惱ましがひどくて休へられないのに」と申されたが、工合よく掻き鳴らされて皆お立ちになつた。満足の出来ない残念なことだと、つまらない法師や童までも涙を落し合つた。まして家の内では、年老いた尼君たちなどは、まだ一度もかうし

た人の御有様などは見なかつたので、「この世の物とはお思ひ申せない」と申し上げ合つた。僧都も、「ああ、何の因縁で、かういふ御有様でありながら、このやうにむさくるしい日本の國の末世にお生まれになつたのであらうと思ふと、ひどく悲しいことだ」といつて目をお拭ひになる。かの若君は、幼な心にも美しい人だと御覽になつて、「父宮の御様よりも勝つて入らつしやる」と云はれる。「それならばあの方の御子になつて入らつしやいませ」と申上げると、領いて、それは良いことだらうとお思ひになつた。雑遊びにも、繪をお書きになるにも、これが源氏の君だとお作り出しになつて、綺麗な衣を着せて大事にして入らせられる。

君はまづ内裏に参らせられて、此頃中の御物語を申上げられる。帝は、ひどくも衰へたことと甚だ御心配に思召された。聖の尊かつた事などをお尋ねになられる。くはしくお奏しになると、「阿闍梨などにもなるべき者のやうである、行法の勞が積つてゐるのに、朝廷で御存じがなかつた事だ」と、尊がつて宣はせられた。大殿が参り合せて、「お迎へにもと存じましたがお忍びでの御歩きなので、如何かと御遠慮いたしました。御緩りと一日二日はお休みなさい

まし」といつて、「直ぐにお送りを致しませう」と申されるので、君はそれ程にはお思ひにならないが、引かされて御退出になる。大臣は自分のお車にお乗せ申し、自分では後に引き下つて乗られる。お冊き申すお心持の深さを、君はさすがに氣の毒にお思ひになつた。女君の方でも、君がお出でになるだらうと心づかひをして、久しく御覽にならずにゐる間に、一段と玉の臺に磨き飾つて、萬事を整へてゐられた。女君は例のやうに隠れてゐて、早速出て來られないのを、大臣が逢つていはれて、やうやうのことで君のお側へお出になられた。ただ繪に描いた姫君のやうに作り据ゑられてゐて、身動きをなさることも出來ず、きちんとしてゐられるので、君は、思ふ心もほめかして云ひ、山路の物語などをなさるに、仕甲斐があつて、面白く御返事なさるやうだつたら可愛いことであらう、まるきり心が打解けず、親しみのない、極りの悪い者に思はれて、年の重なつて行くに連れてお心の隔ても増して來るのを、ひどく苦しく、心外にも思はれて、「時々世間並の御様子も見たいものです。忪へられないやうに煩つてゐるにしても、何んなただけも尋ねて下さらないのは、珍らしい事でもないが、何うやら恨めしく

思ひました」と申される。やうやうのことで、女君は「『問はぬはつらきもの』でせうか」と、尻目に見よこされた目つきも、ひどく恥づかしさうで、氣高くて、美しい御容貌である。「たまに云はれるのに、淺ましいお言葉です。『問はぬ』などといふ間柄は、これとは別なものです。厭やな言ひ方をなさるといふものです。何時まで経つても工合の悪い御もてなしを成さるので、もしお思ひ直しになる時もあらうかと、いろいろに試して見てゐる中に、一層お疎みになるやうです。『よしや命だに』です」と云つて、夜の御寢所にお入りになつた。女君は直ぐにもお入りにならない、君は云ひ出しやうもなくて、溜息を吐いて寝てゐられるが、何うやら工合が悪いのであらうか、態と眠さうな風をなさつて、何やかやと男女間の事で思ひ亂れる事が多くある。かの若草の育つてゆく間がやはりゆかしいのに、似合はない年頃だと思はれたのも尤もな事である、言ひ寄りかねることではある、何うにか工夫をして、面倒なしに迎へ取つて、明け暮れの慰みとして見たい、兵部卿の宮はひどく上品で、艶いてはゐられるが、匂ひやかだといふ程では無いのに、何うして彼の一族に似通つてゐられるのであらう、同じ后腹のせむだらうか

などとお思ひになる。その由縁の睦まじさにつけて、何うにかしてと深くもお思ひになる。翌日は御文を差上げられた。僧都の方へもその旨をほめかされたことであらう。尼上には、「懸け離れられた御様子の極り悪さに、思つてをります程を、顯はすことの出来ずにしまひましたのを残念に思ひます。これ程申上げるのでも、一通りではない志の程を御存じ下さらば、何のやうにか嬉しいこととせう」などとある。その中に小さく結び文にして、

面影は身をも離れず山櫻心の限り留めて來しかど

〔歌意〕 山櫻の面影は身より離れず附きまゝとつてゐます、その下に私の心の有る限りを留めて來ましたけれども、「山櫻」は女の子の譬。

『夜の間の風』も何うかと氣にかかりまして」とあつた。御手跡などは立派なもので、ただ果敢なく押包んだ様も、年更けた御眼などには、眼も亂れるやうな好ましいものに見える。「まあお氣の毒な、何う申上げよう」と思ひ煩はれる。「序の御事として、なほざりに思ひ取られましたのに、態々の御文で、申上げやうもございません。まだ難波津さへもしつかりとは書き續けら

れませんので、御歌を見せても詮がありません。それにしても、

嵐吹く尾上の櫻散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ

〔歌意〕嵐の吹く尾上の櫻の、その散らぬ間の暫くに、お心を留められたのは、果敢ない事でございます。〔散らぬ間を〕に、果敢ない意で幼女を寄せ、「はかなさ」に君の心の無理なのを寄せたもの。〕

そのやうなお心では、一段と氣に懸る事でございます」とある。僧都の方の御返事も同じなので、残念で、二三日して惟光をお使として遣はされる。「少納言の乳母といふがある。それを尋ねて委しく話をしろ」とおいひつけになる。及ばない限もないお心ではある。あれ程の幼いお様子だつたのにと、十分にではないけれど自分も見かけた年頃を思ひやると可笑しい。態とこのやうに御文のあるのを、僧都も有難がられる。少納言に案内をして逢つた。委しく、思召し仰せられる様、君の大凡の御有様などを話す。惟光は口數の多い人で、似合ふやうには云ひ續けるが、何うにも筋の立たないお年なのを、何う思召すのだらうかと、氣味悪い事に誰も誰も

思はれた。御文もひどく懇ろにお書きになつて、「その一字一字の放ち書きを、やはり見たいものです」とあつて、例の中に入れてあるのには、

浅香山あさくも人を思はぬになど山の井のかけはなるらむ

〔歌意〕浅香山の浅くは君を思はないのに、何うして山の井に映る影のかけ離れられるのでせう。〔影離る〕に、相手にしない意の「懸け離れる」を掛けてある。〕

御返歌、

汲みそめて口惜しと聞きし山の井の浅きながらや影を見すべき

〔歌意〕汲み初めて口惜しいものだ聞く山の井の、その浅いままで映る影をお見せするべきではございますまい。〔浅き〕に女の子の幼い意を寄せて、それでは末が遂げまいの意を持たせたもの。〕

惟光も、前と同じ事を申上げる。「病氣が少しでも快ろしうございましたら、當分を過しまして、京の殿に歸られましたから、御返事を申上げませう」とあるので、君は待ち遠にお思ひになる。

藤壺の宮が身に惱ませられる所があつてお里へ御退出なされた。帝の覺束なく思召され、御

嘆きになられる御様子も、ひどくお氣の毒にお見上げ申しながら、君はかうした折にでもと、心も身に添はずあくがれられて、何所にも何所にも何所にもお出でにならず、内裏でも里の殿でも、晝はつくづくと眺め暮して、暮れると王命婦を責め廻られる。何のやうに構へたのであらうか、ひどく無理をしてお逢ひ申した間までも、現とはお思ひになれないのは佗びしいことである。宮も、淺ましかつた事をお思ひ出しになるのでさへ、命ある限りの御嘆きなので、せめてそれだけで止めようと深くもお思ひになつてゐたので、ひどく辛くて、迷惑な御様子であるものの、懐かしくかはいらしく、さうかといつて打解けもせず、心深い、恥づかしく思ふやうな御もてなしなどが、やはり他の人には似させられないので、何うして、せめて不十分な點でもまじつて入られないのであらうかと、君はそれまでも辛い事にお思ひになる。何事を語り盡すことが出来よう。暗部の山に宿りも取りたいのであるが、生憎の短夜で、呆れる程に、生中のことである。見てもまたあふ夜稀れなる夢の中にやがて紛るるわが身ともがな

〔歌意〕 かくお逢ひしても、又お逢ひする夜は稀れである此の夢のやうな逢ふ瀬の中に、このま

ま夢に紛れて、消えて行く我が身でありたいことです。「見て」、「あふ」は、何れも「夢」の縁語。と咽せかへつてお泣きになる様も、さすがにあはれなので、

世語りに人や傳へむ類ひなく憂き身を覺めぬ夢になしても

〔歌意〕 世語りに人が言ひ傳へることせうか、此の類ひのない憂き身を、覺めぬ夢にして死んでしまひませうとも。

お思ひ亂れてゐる様も、いかにも尤もで勿體ない。命婦の君が、君の御直衣などは搔き集めて持つて來てお著せ申す。君は里の殿にお歸りになつて、泣き寝に臥してその日を暮らされた。御文なども、いつも御覽になつた事がないといふ由なので、ふだんの事ではあるものの辛く、ひどくぼんやりとして、内裏へも參られずに二三日籠つて入らせられると、又何のやうな事があるだらうかと帝の御心をお動かしになることであらうと恐しくばかりお思ひになる。宮もやはり、ひどくも辛い身であつたとお思ひ嘆きになるにつけ、惱ましさも加はつて來られて、疾く參られるやうにとの内裏よりの御使が頻りにあるが、お思ひ立ちにならない。まことにお心持も例の

やうでないのは、何ういふ訣であらうかと、人知れずお思ひになる事もあるので、心憂くて、何うであらうかと、そればかり思ひ亂れて入らせられる。暑い間は一層惱ましくて、お起き上りにもならない。三月つばきになられると、ひどくはつきりと目に着く程なので、お側の人々はお見咎め申すので、驚呆れるまでの御宿縁のほどが辛い。他人は思ひも寄らない事なので、此の月になるまでお奏しにならなかつた事を驚いて申上げる。御自分のお心一つには、はつきりとお辨わきまへになる事もあつた。お湯殿などに親しくお仕へ申して、すべての御様子をもはつきりと見知つてゐる御乳母おんめのとの子の辨と命婦とは、不思議な事と思ふけれども、互に云ひ合はすべき事では無いので、やはり脱のがれ難かつた御宿縁だと命婦だけが淺ましく思ふ。内裏うちへは、御物おんものの怪けの障りで、直ぐには其の様子が無くて入らしたやうに奏したのであらう。人は皆そのやうにばかり思つた。帝みかどにはいよいよ憐れに、限りなくお思ひになられ、御使ひまの隙ひまのないのも空恐しく、宮はお嘆き事に隙がない。中將の君も仰々しい、様子の變つた夢を御覽になつて、夢合せをする者を召して合せせると、及びもつかない、思ひも懸けない筋の事を合せた。「その中なかに行き違ちがひがあり

まして、お慎つとしみになるべき事がございます」といふので、面倒にお思ひになつて、「これは自分の夢ではない、他人ののを語つたのだ。この夢が合ふまではこれぎりでは人には云ふな」と仰せになつて、心の中では、何ういふ事だらうと思ひ續けてゐられると、この宮の御事をお聞きになつて、もしさういふ事があるのだらうかと思ひ合はされるにつけ、前よりは一段と思ひ入つた言葉を盡して申上げられるが、命婦も考へると、ひどく氣味悪く、面倒さも勝まさつて来て、全く工夫をするべき方法がない。はかない一行の御返事の、稀れにはあつたのも、絶え果たまててしまつた。七月になつて宮は内裏うちへ参られた。帝みかどには珍らしく、あはれで、一段の御思ひが限りも無い。少し膨ふらかにお成りになり、惱ませられ、お顔の瘦せられたのも亦、まことに似るものなく愛めでたい。例のやうに帝みかどには明け暮れこの宮にばかりお出でになり、御管絃も次第に面白い頃なので、源氏の君をも隙ひまなくお召し纏ひまはりになりなりして、御琴や笛などさまざまおさせになられる。君は極めて慎しんでゐられるけれども、怵おそへ難い様の漏れ出る折々には、宮もさすがにあはれな事を多く思ひ續けられた。

かの山寺の尼君は、病が少し快くなつてそこをお出になつた。君は京のお住まひを尋ねて折々に御消息をされる。同じやうな御返事ばかりなのも尤もであるのに、此の月頃は、君は以前にも勝るお嘆きをされてゐるので、その他の事は無くて過ぎて行く。秋の末、君はひどく心細くてお嘆きをなさる。月の面白い夜、忍んでお通ひになる所に、やうやうの事でお思ひ立ちになつたに、雨が時雨めいてこぼれて来る。お出でになる所は六條の京極あたりで、内裏からなので少し程遠い氣持がされるのに、荒れた家で、木立がひどく老いて、木闇く見えるのがある。例のお供を離れずする惟光が、「故按察の大納言の家でございます。或る日序があつて見舞ひますと、あの尼君がひどく衰弱されました、何事もお分りにならないと云つてをりました」と申上げるので、「あはれな事だ、見舞ふべきだつたものを、何だつてさうと申さなかつたのだ。入つて案内をしろ」と仰せになるので、惟光は人を入れて案内をさせる。態々君がこのやうにお立寄になるのだと使に云はせたので、使は入つて、「此のやうに御見舞に入らせられたのです」と云ふと、驚いて、「いかにも恐入つたことでございます、この日頃は、まるきり、いかにも頼みな

い御容態にられましたので、御對面もごさいますまい」と云つたが、「お歸し申すのは恐れ多い」といつて、南の庇の間を繕つてお入れ申す。「いかにもむさくるしうございますが、御禮をだけでも存じまして。お思ひ懸けのない見すばらしい御座所でございます」と申上げる。いかにも、かうした所は、例に違つた所とお思ひになる。「いつもお訪ね申したいと思ひ立ちは致しますが、甲斐のない様にばかりお扱ひ下さるのに恥ぢられて、御病氣のことも、それとも承らず、存ぜずにをりました」など申される。「惱ましさは何時といふ事もなく同じでございます。限りの様になりました、このやうに勿體なくもお立寄り下さいましたのに、自分で御返事が出来ませんで。仰せの事の筋は、萬一にも思召が變らないやうでございましたら、このやうな御無理な齡の過ぎました節に、必ず數の中にお入れ下さいませ。ひどく心細さうな様なのを残して行きますのが、後世の障りに思はれます」など申上げられる。聞かひどく近いので、心細さうなお聲が絶え絶えに聞えて、「ひどく有難い事です、せめて此の子がお禮を申上げられる程にでもなつてゐたのでしたら」と云はれる。君はあはれにお聞きになつて、「何だつて淺

くお思ひする事でしたら、このやうに好色好色しい様をお見せ申しませう。何ういふ宿縁ですか、お見初めしてから、あはれにお思ひ申すことが不思議なくらゐるで、此の世だけの事とは思はれません」など云はれて、「張合ひのない氣ばかり致しますので、あの幼いお一聲を何うかと仰せになるので、「いやもう、何も御存じのない様で、御寝なりました」など申上げる折柄、彼方から來る音がして、「お祖母様、あの寺に入らした源氏の君がお出でになりました。何故御覽になりません」と云はれるのを、女房達はひどく氣の毒に思つて、「お静かに」と申上げる。「いいえ、お見上げたので、氣分の悪いのが直つたと仰しやつたからです」と、賢い事を申すのだと思つてお云ひになる。君はひどく可笑しいとお聞きになつたが、人々が苦しく思つてゐるので、聞えない風をして、まめやかに御見舞を申し置いてお歸りになつた。いかにも詮のない様子である、それでも十分よくお教へしようとお思ひになる。翌日もひどく眞實やかに御見舞を申上げられる。例の小さく結び文にして、

いはけなき鶴の一聲聞きしより葦間になづむ船ぞえならぬ

〔歌意〕 幼い鶴の一聲を聞いてから、それが懐かしく、葦間に躊躇つて岸に着け難くしてゐる船の、我慢が出来ないことです。「鶴」を姫君に、「船」を自身に譬へてゐる。「え」は「江」の意で「葦間」の縁語。

『同じ人にや』と、態と幼い手跡に書き變へられてゐるのも、ひどく面白いので、そのままお手本にするやうにと人々は申上げる。少納言が御返事を申上げる。「お尋ね下さつた人は、今日も過し難いやうな様で、山寺に參らうとする時で、このやうに御尋ね下さいました御禮は、此の世からでなくも申上げませう」とある。ひどくあはれにお思ひになる。秋の夕べは、一段と心に少しの暇もなく、思ひ亂れる人の御あたり心懸けて、無理な縁の方も尋ねたい心も増されることであらう。『消えむ空なき』と云つてゐた夕べが思ひ出されて、戀しくはあるが又、見劣りがしはしないかと、さすがに危ふく思はれる。

手に摘みていつしかも見む紫の根に通ひける野邊の若草

〔歌意〕 手に摘んで、我が物として何時になつたら見られようか、紫の根が生えてゐるので、そ

れに通ふ氣のするその野の若草を。「紫」は藤壺の宮、「若草」は姫君の譬。「通ふ」は一族の意を寄せてある。

十月に朱雀院の行幸があらう。舞人には、貴い家の子供、上達部、殿上人なども、その方面で似合はしい者はみんなお選みになつたので、觀王たち、大臣から始めて、色々の伎をお習ひになるので暇がない。君は山里に籠もつた人にも、久しく音信をなさらない事をお思ひ出しになつて、態々御文を遣はされると、僧都の御返事だけがある。「過ぎた月の二十日の程につひに空しくなりまして、世間の道理ではあるが悲しく思つてをります」などあるを御覽になるにつけ、世の中の果敢なさが身に沁みて、尼君の氣がかりに思つてゐた人も何んな様子であらう、幼い程で戀つてゐることであらう、故御息所にお別れた程の事はしつかりとは覺えてないが思ひ出して、淺からずお見舞を給はつた。少納言が故なくはない御返事を申上げた。忌中が過ぎて、京の殿へ歸つたとお聞きになつたので、君は程經て、自然心靜かな夜にお越しになつた。ひどく凄さうに荒れた所で、人少ななので、何んなにか幼い人が恐ろしからうと見える。

例の所へお入れ申して、少納言が御様子を、泣き泣き申し續けるので、君も訣もなく御袖も濡れる。「宮にお渡し申さうといふのですが、故姫君が、ひどく情なく辛いものに思つて入らつしやいましたのに、まるきりの稚兒ではないお年で、まだはかばかしくは人の氣合ひもお解りにならないといふ中途半端のお年で、大勢ゐらせられます中に、輕しめられる人になつて混じつて行かれる事であらうかと、お亡くなりになられた方も、絶えず嘆いて入らつしやいましたが、確にさうと思はれる事も多くございますので、このやうな忝い聊かのお言葉は、後々のお心はとも角と致して、ひどく嬉しく存じられます場合でございますものの、少しも御女になれさうな御様子もなく、お年よりも子供ばい風で入らつしやいますので、ひどくお氣の毒に存じてをります」と申上げる。「何だつて此のやうに、繰返してお知らせしてゐる心を汲まずに、遠慮をなさるのでせう。その詮のないお有様が可愛ゆくもゆかしくも思はれるのが、宿縁が特別なせるだと、自分ながら思はれるのです。やはり人傳てではなくてお話しませう。

あしわかの浦にみるめは難くともこは立ちながら歸る波かは

〔歌意〕葦の若い和歌の浦に、沖の海松藻を寄せることは難からうとも、これは立つたままで、岸へも寄らずに歸つて行く波であらうかは。〔葦若〕の若い姫君を、「波」に自分を譬へ、「みるめ」に見る目即ち逢ふ事を掛け、「立ちながら歸る」に、逢はずに歸る意を持たせてゐる。〕

心外なことでせう」と仰せになると、少納言は、「いかにも恐縮なことでございます」と云つて、

寄る浪の心も知らでわかの浦に玉藻靡かむ程ぞうきたる

〔歌意〕その寄つて來る浪の心の何ういふものであるかも知らずに、和歌の浦で玉藻の靡くといふのは、浮いたことでございます。〔浪〕を君に、「玉藻」を姫君に譬へ、「わか」に「若」を掛け、「靡く」に従ふ意を持たせてゐる。〔浮き〕は、「玉藻」の縁語。〕

御無理なことでございます」といふ様の物馴れてゐるのに、少し不足をお許しになられる。君の、「など越えざらむ」と誦されるのを、身に沁みるものに若い女房どもは思つた。姫君は尼君を戀つて泣き臥してゐられたに、御遊びがたきの者共が、「直衣を著た方が入らつしやいます、宮が入らしたのでせう」と申上げるので、起き出られて、「少納言よ、直衣を著てゐられるつて方は何所に。宮が入らしたのか」と云つて寄つて來られるお聲がひどく可愛ゆい。君は、「宮で

はないが、これも餘所になさるべき者ではありません。此方へ」と云はれるのを、極りの悪かつた人だと、さすがに聞き取られて、悪い云ひ方をしたと思はれて、乳母にさし寄つて、「さあ、眠たいから」と云はれると、君は、「今更何だつてお隠れになるのでせう。この膝の上にお眠みなさいまし。もしお寄りなさいまし」と云はれるので、乳母が、「御覽の通りに、このやうに情づかない御程でございます」と云つて、君の方に押して寄せられると、女君は無心で入らせられるに、君は御衣の間に手を差入れて探つて御覽になると、柔らかな御衣に髪がすべすべと懸つて、その末の房つさりとした所に探りあてられたあんばいは、ひどく美しく思ひやられる。手をお執りになられると、厭やな、例とはちがつた人の、此のやうに近づかれたのが恐ろしくて、「寢ようと云ふのに」と云つて、達て彼方へ引き込まれるのに躑いて、君もるざり入つて、「此れからは私が思ふべき人です。お疎みなさいますな」と仰せになる。乳母は、「まあ飛んでもない。ひどい事でございます。何うお聞かせになりませうとも、全きり何の驗もございませうものを」といつて、苦しうに思つてゐるので、君は、「何うしたからとて、こんなお

年の者に何事があらう、ただ世間並ではない志の程を見きはめて下さい」と仰せになる。霰が降り荒れて、凄い夜の様である。君は「何うして此のやうに人少なで心細くて過して行かれよう」とお泣きになられ、何うにも見棄てられない様子なので、「み格子を下しなさい、怖ろしい夜の様らしいので、宿直人になつてゐませう。人々も近くお付き添ひなさい」と云つて、物馴れた様で、御帳の内に若君を抱き入れられたので、奇怪な、案外なことだと呆れて誰も誰もた。乳母は氣懸りに、無法な事と思ふけれども、荒々しく騒ぐべきことでもないの、溜息を吐き吐きしてゐた。若君はひどく怖しくて、何うなる事だらうと慄へられて、ひどく美しい御肌も寒けがするやうに思はれるのを、君は可愛ゆく思はれて、單だけにして押包んで、そして御自分の氣持も亦、變に思はれるのであるが、あはれにお話をなされて、「入らつしやいよ。面白い繪がどつさりあつて、雛遊びもする所へ」と、若君の氣に入りさうな事を云はれるあんばいが、ひどく懐かしいので、幼いお心持にもさうひどくは怖ぢられず、さすがに氣味が悪くて眠りもされず、身動きをさせて臥てゐられた。夜通し風が吹き荒れるので、女房ども、

211

紫 若

「本當にかうしてお出で下さらなかつたら、何んなにか心細いことだつたでせう。同じ事なら、相應なお年で入らしたなら」と私語き合つた。乳母は氣懸りなので、直ぐ側に附添つてゐる。風が少し風いで來たので、君は夜深くお歸りになつたが、世の常の後朝めいたことである。「ひどく哀れに見上げられる御有様であるに、今は一層で、片時の間でも氣になることだらう。明け暮れに眺められる所にお移し申さう。かうした様でばかりは、何うしてゐられよう」と仰せになると、少納言は、「宮もお迎へにと云つて入らつしやるやうですが、此の御四十九日が過ぎての事だらうと思はれます」と申上げると、「頼もしい筋ではゐられるが、離れて暮すことに馴れてゐられるので、同じやうに親しみのない者にお思ひにならう、私は昨今のお馴染ではあるが、淺くない志の方は勝つてゐるよう」といつて、若君の髪を撫で撫でして、見返り勝ちにしてお出ましになられた。ひどく霧の立つてゐる空の様子も一通りではないのに、霜が眞白に置いて、本當の懸想も面白さうに思はれるにつけ、さみしい氣がしてゐられる。ひどく忍んでお通ひになる所が、途中であることをお思ひ出しになつて、その家の門を叩かせたけれども、聲をききつける人が無

い。仕方がなくて、お供の中の聲の好い人にお話せになる。

朝ぼらけ霧立つ空の迷ひにも行き過ぎ難き妹が門かな

〔歌意〕朝ぼらけの霧の立つてゐる空のおぼろなのにも、それを感じられて、通り過ぎ難く思はれる妹が門ではある。(催馬樂「妹が門」を模したもの。)

と繰返して諺ふと、心の氣取りのある下仕を出して、

立ちとまり霧の籬の過ぎ憂くは草の扉のさはりしもせじ

〔歌意〕立ち留まつて、霧が作る隔ての籬の爲に通り返ぎ難くて惱まれるならば、この家の草の扉の方には障る物もございますまい。

と云ひかけて内へ入つた。それきり人も出て來ないので、歸るのも情が無いが、明けてゆく空の様子も工合が悪いので、二條の殿へお歸りになつた。可愛かつた若君の名残が戀しく、獨笑みをしいしいお臥みになつた。日が高くなつてお目覺めになつて起きて、後朝の文をお遣りになるにつけ、書くべき言葉も普通とは違ふので、筆を置き置きして思案をしてゐられた。面白い繪などをお遣はしになる。

其方には今日は宮がお越しになられた。この年頃よりも又一層荒れまさつて、廣く古びた所にいよいよ人少なでさびしいので、見渡されて、「かうした所には、何うして少しの間でも、幼い人が暮してゐられよう。やはり彼方にお移し申さう。何も窮屈な所ではない。乳母は部屋を持つて附添はせよう。君は幼い者が大勢ゐるので、一しよに遊んで、良いやうになられよう」など仰せになる。若君を近くお呼び寄せになると、かの御移り香がひどく艶に染み込んで、たので、「良い御にほひだ。召物は萎えてゐるのに」と、心苦しいやうにお思ひになる。「何年も、御病氣な、年をした人に添つてゐられるので、時々は彼方へ入らして見馴れるやうになさいと云つたが、妙に疎まれて、北の方も氣を置くやうであつたに、かうした折に移られるはお氣の毒で」など仰せになると、少納言は、「何んなに、心細くても、暫くの間このままでお出でになりました方が。少し何かがお分りになつての上で、お移し申した方が宜しうございませう」と申上げる。「夜晝戀しがられました、ちよつとの物も召し上りません」といふに、如何にもひどく瘦せられて、却つてひどく上品に美しくなられたと御覽になる。宮は若君に、「何だつて

そんなにお思ひになるのです。もう世に亡い人の御事は甲斐がありません。私が居ますから」とお話を申されて、日が暮れるとお歸りになるのを、若宮はひどく心細いと思つてお泣きになると、宮も泣かせられて、「そのやうにひどくお思ひ入るものではありません。今日明日にもお移し申します」と繰返し慰めて置いてお歸りになつた。名残の惜しく慰めかねて、若宮は泣いてゐられた。行末の身の成り行きなどはお解りにならず、ただ何年も離れる時がなく、纏はり馴れて来て、今は亡き人となつてしまはれたと思ふのが悲しくて、幼いお心持であるが胸がしばいに塞がつて、いつものやうにお遊びにもならない、晝の間はそれでも紛れさせられるが、夕暮となるとひどく萎れられるので、此れでは何うして過して行かれようと、慰めかねて乳母も泣き合つてゐる。

君の御許からは惟光をお遣はしになつた。「伺ふべきであるが、内裏よりの召がありますので。お氣の毒な御様子なのを見ましたので、落ちつけません」といつて、宿直人として遣はされた。「弱つた事です。かりそめにも御生涯の初めに、かうした御事で。宮がお聞き付けに

なられたなら、お付きの者の粗略だとしてお責めになられる事でせう。決して、何かの序に、頑是なく、お云ひ出しなさいますな」と云つても、それを何ういふ事ともお解りにならないで詮もない。少納言は惟光に哀れな物語をして、「御成人の後には、然るべき御縁で遁れられないといふ事もございませう。唯今はてんで何うにも似合はない事に存じますのに、不思議にその事を仰せになるのが、何ういふお心なのか見當も附けられませんが、當惑してをります。今日も宮がお越しになりましたして、『安心の出来るやうにお仕へ申せ。分別の足りない御もてなしはするな』と仰せになりましたにつけても、ひどく煩はしい事に、世間並の事よりも、かうした御好色事を思ひ出した事でございました」など云つて、此の人も、實事でもあつたやうに取りはしないかと、氣が置けるので、ひどく嘆いてゐるやうには云ひ立てない。大夫も何ういふ事であらうかと心得難く思ふ。歸つて来て君に有様を申し上げると、哀れにお思ひやりになるけれど、さてお通ひになるのも、さすがに浮はつた事のやうな氣がして、軽々しい變な事だと思ふ人が漏れ聞きはしないかと憚られるので、何うでも御自分の殿へお迎へ申さうと思はせられ

る。御文は度々差上げられる。暮れると例の大夫をお遣はしになる。御文には、「障る事があつて参れませんが、粗略だと思ひになりませうか」などとある。少納言は、「宮から明日俄にお迎へにと仰せがございましたので、氣忙しくてをります。年頃住み馴れましたあばら屋を離れますのを、さうはいつても心細がつて、お附きの者はみんな思ひ亂してをります」と言葉少なにいつて、殆ど相手をしない。物を縫ひなどする様子がはつきり分るので、歸つて來た。君は大殿の方に入られたが、例の女君は早速にはお逢ひにもならない。君は小面倒にお思ひになつて、和琴を清搔きにして、『常陸には田をこそ作れ』といふ歌を、聲はひどくなまめいて弾いてゐられた。惟光が参ると、召し寄せて有様をお聞きになる。これこれと申上げると、殘念にお思ひになつて、あの宮に移つたならば、改まつて迎へるといふ事は、好色々々しい事であらう、幼い人を盗み出したと世間の不評判を受けよう、その前に、暫らく人に口止めをして、此方へ移らせようと思ひになつて、「明け方に、彼方へ行かう、車の装束はこのままで、隨身を一人二人命けて置け」と仰せになる。惟光は承つて立つた。君は、何うしよう、人が聞くと好色がま

しいやうに思ふ事である、せめて相手の年が、物を思ひ知る程であつて、女も心を通はしての事だと推量されるやうであつたら、世間並の事である、父宮が尋ね出されたなら、間の悪い、輕はずみだとされるべき事であるとお思ひ亂れにはなるが、さうかと云つて、取り外づすのは、ひどく殘念に思はれるべき事なので、まだ夜深くお出ましになる。女君は例のやうに澁々と、心も打解けずるにせられる。君は、「彼方に大切に見なければならぬ物のあつた事を思ひ出しました。引返して参りませう」といつて出られたので、お附きの女房達も知らなかつた。御自分の間で直衣などはお召しになる。惟光だけを馬に乗せてお出でになつた。門を叩かせる、何も知らない者の開けたので、御車をゆつくりと引き入れさせて、大夫が妻戸を鳴らして咳拂ひをすると、少納言がそれと知つて出て來た。「ここに入らつしやいます」と云ふと、少納言は、「幼い方は御寝みなつて入らつしやいます。何だつてこのやうに夜深い中にお出ましになられたのですか」と、何ぞの序の事と思つていふ。君は、「宮へお移りになるとの事だから、その前に一言申しておかうと思つて」と仰せになると、「何のやうな事でございます。何んなに

はつきりした御返事を申し上げることでございませう」と笑つてゐた。君が寢所へお入りになると、少納言はひどく工合が悪くて、「打解けて變な年寄どもがお添ひ申してをりますのに」と申し上げる。「まだお目覚めではなからう、どれお目を覺まさせよう。かうした朝霧を知らずに寝てゐるといふ事があるのですか」と云つて入つて行かれるので、女房どもは「あれ」とも申上げられない。若君は何心もなく寝てゐられたのに、抱き起して目を覺まさせられるので覺まして、宮がお迎へに入らせられたのだと寢ぼけて思はれた。君は御髪を搔き繕ひなどされて、「さあお出でなさいまし。宮のお使で参つたのですよ」と仰せになるに、若宮は宮ではなかつたと呆れて、怖ろしいと思つたので、君は、「これは酷い、私も同じに人ですよ」といつて、搔き抱いてお出になるので、大夫や少納言などは、「何うなさるのですか」と申上げる。君は、「此所へはふだんには來られなくて、覺束ないので、氣樂な所へと申してゐたに、辛くも宮へお移りになるといふので、それだと一層申上げられなくならうから。誰でも一人ついて來なさい」と仰せになるので、少納言は心が慌てて、「今日はひどく都合が悪いこととございます。宮

がお越しになりましたら何のやうに申上げませう。自然時が経ちまして、然るべき御縁であらせられましたなら、とに角の事でございませうが、全く物のお解りにならない時のこととございませうので、お付きの者が當惑いたすこととございませう」と申上げると、君は、「ままよ、後からでもお供は來るがよい」といつて、お車を寄せさせられるので、餘りの事に、何のやうにしたものか、と女房共は思ひ合つた。若君も、變な事にお思ひになつてお泣きになる。少納言はお止め申す方法もないので、昨夜縫つたお召物どもを提げて、自分も相應な著物に著かへて乗つた。二條の院は近いので、まだ明けきらない中にお着きになつて、西の對にお車を寄せてお下りになる。君は若君をば、ひどく輕さうに抱いてお下りになる。少納言は、「まだまるで夢のやうな氣がしてゐるので、何うしたらば可うございませうか」と車の上でまごついてゐると、君は、「それは心任せだ。若君の御身はお渡し申したのだから、其方は歸らうといふのなら送りをさせよう」と仰しやるので、餘儀なく下りた。俄に呆れが出て、胸も靜かでない。宮のお思ひになり仰しやるだらう事、若君も何のやうになつておしまひになるべき御有様であ

らうか、とにかくにも、頼もしい方々に死に別れたのが悲しいことだと思ふと、涙が止まらないが、さすがに縁起の悪いことなので忪へてゐた。此方はお住まひにならない對なので、御帳なども無かつた。惟光を召して御帳、御屏風などを、そこそこにお仕立てになる。御几帳の帷を下し、御座所など唯取締つたといふだけなので、東の對に、夜具を取りにお遣りになつて御寝になつた。若君はひどく氣味悪く、何のやうにされる事だらうと體がふるへるけれども、さすがに聲を立ててはお泣きにならない。「少納言の側に寝よう」といふ聲がひどく幼い。君は、「今はさうしてはお寝みになるものではありませんよ」とお教へになると、若君はひどく辛くて泣き伏された。乳母は臥られもせず、物も思はずに泣いてゐた。夜が明けて行くままだに見渡すと、大殿の造り様、飾り様はいふまでもなく、庭の砂までも玉を重ねたやうに見えて、耀やいてゐるやうな心持氣がするので、少納言は間が悪く思つてゐたが、此方の方には女房なども詰めてはゐなかつた。疎い客人などの伺ふ、時たまにお使ひになる方なので、男だけが簾の外にゐるのであつた。このやうに人を迎へられたことをほのかに聞く召使の者は、「何方であ

らう。一通りの方ではなからう」と私語く。お手水、お粥などは此方へ參らせる。君は、日が高くなつてお起きになつて、「召使が無くていけないやうだが、然るべき人々を、夕方になつてお召しなさいまし」と云はれて、東の對に女の童を召しにおやりになる。「小さい者だけを特によこせ」との仰せだつたので、ひどく美しい者が、四人參つた。若君は召物にくるまつて臥てゐられるのを、無理にお起しして、「そのやうに辛さうにはなさいますな。心そぞろな者は、此のやうに致しませうか。女は素直なが可いのです」と、今からお教へなさる。若君の御容貌は、離れてゐて見た時よりはひどく清らかで、君は懐かしく話をなさりつづけ、面白い繪や玩具を取りにやつてお見せし、お氣に入るやうな事をなさる。若君はそろそろ起き出して御覽になる。鈍色の喪服の、良くはあるが萎えた物などを召されて、無心に笑んでゐられるのが、ひどく美しいので、君も笑まれて御覽になる。君が東の對に行かれたので、若君は立ち出て庭の木立、池の方など覗かれると、霜枯れの前裁は繪に描いたやうに面白くて、見た事もない四位五位の人の紫や紅の袍がまぎつて、絶間なく出入りしいしいして、如何にも面白い所だと思ひになる。

御屏風などのひどく面白い繪を見いなどされて、慰んでゐられるのも果敢ない事である。君は二三日は内裏へも参られずに、此の人の手馴づけて話相手をしてゐられる。やがて手本にお思ひになるのか、字や繪などを色々に書き書きしてお見せになる。ひどく面白く書き集められた。「武藏野といへばかたれぬ」と、紫の紙にお書きになつたの、墨繼ぎのひどく格別なのを、若君は手に取つて御覽になつてゐる。それに少しく小さな字で、

ねは見ねどあはれとぞ思ふ武藏野の露分けわぶる草のゆかりを

〔歌意〕 その根は見ないけれども、あはれだと思ふ、武藏野の露を分け惱んで見る草の紫を。

〔ね〕は「寝」を掛け、露分けわぶる草」に、戀しさの涙に堪へられない紫の草を持たせ、その紫に、更に藤壺の宮を思はせてゐる。「ゆかり」は「紫」の意と共に、縁の者の意も持たせてある。

そちらの意では、共寝はしないけれども、あはれと思ふ、武藏野にある紫の縁の者をの意。

とある。「君もお書きなさい」といはれるので、若君は、「まだ良くは書けません」といつて見上げられたさまが、無心で美しいので、君もほほ笑まれて、「上手でなくても、達て書かないのは悪いことです、教へて上げませう」といふと、側へ向いて書かれる。その手つき、筆を持つて

るる様子の子供つばいのも、可愛ゆくばかり思はれるので、我ながら不思議にお思ひになる。

「書き損ひました」と恥ぢて隠すのを、無理に御覽になると、

かこつべき故を知らねば覺束ないかなる草のゆかりなるらむ

〔歌意〕 私を託けられる訣を知らないので、覺束なく思ひます、何ういふ草の縁なのでせう。

と如何にも子供っぽい、先々の上達を思はせる手で、ふつくらとお書きになつた。故尼君の手に似てゐた。當世風の手本を習つたならば、ひどく好く書くやうにならうと御覽になる。雛なども態々御殿を造りつづけて、一しよに遊びをされされて、此の上もない物思ひの紛らしである。

かの故里に留つてゐた女房どもは、宮がお越しになつて若君をお尋ねになつたに、申上げやうもなく困り合つた。少しの間人に知らせまいと君も仰せになり、少納言も同じやうに思ふことなので、堅く口止めをしておやりになりしたので、「ただ行方も知らせず、少納言が連れてお隠し申しました」とばかり申上げさせたので、宮も詮なく思召して、「故尼君も、彼方に行かれることをひどく氣に入らない事にしてゐるので、乳母のひどく出過ぎた氣働きの餘りに、尋

常に渡すのを不都合だとはいはずに、心任せに連れ出して廢らせてしまつたのであらう」と仰せになつて、泣く泣くお歸りになつた。「もし聞きつけたならば知らせろ」と仰しやるのも煩はしい。僧都の御許にもお尋ねになつたけれど、様子が分らなくて、惜しいものであつた御容貌などを戀しく悲しいとお思ひになる。宮の北の方も、母君を憎いとお思ひになつた心も消えて、自分の心に任せて育てようとお思ひになつたのに、違つたのを残念にお思ひになつた。

二條の院には次第に人が参り集まつた。若君の御遊びがたきの女の童、稚兒なども、ひどく珍らしい、當世風のお二人の御有様なので、思ふこともなく遊び合つた。若君は、男君がお出でにならずなどして、さみしい夕暮などだけは、尼君を戀しがられて泣きなどもされるけれど、父宮の事は格別にお思ひ出しにならない。前からお見馴れ申さない事に馴れてゐられるので、今はただ後の親に深く睦み纏はられる。君が餘所からお出でになると、第一に出迎へて、可愛くお話になり、御懐に入つてゐて、少しも疎く恥づかしくも思つてゐられない。遊び相手としては甚だ可愛い仕ぐさなのであつた。嫉妬の心があつて、何くれと面倒な事になつて來

れば、自分の心持も今とは少し違ふ節も出て來ようかと心が置かれ、女もまた恨み勝ちになるにつけ、案外な事も自然出て來るものであるが、今はひどく面白い弄び物である。娘などでも又、これ程になると、心安く振舞つたり、隔てのない様に起き臥しも出來ないらしいのに、これはひどく様の變つた冊き物であると君はお思ひになる事であらう。

註

僧都——僧正に次ぐ僧官。正五位に准ず。

新發意——新たに佛門に入つた人。

按察——按察使。國司の治績を視察する役。

兵部卿の宮——先帝の御子、藤壺の兄。

豐浦の寺——葛城寺の前なるや、豐浦の寺の西なるや、榎のは井に白玉しづくや、眞白玉しづくや
(催馬樂葛城)

阿闍梨——天台、眞言の最高學位であると共に、僧官の高いもの。

問はぬはつらきもの——こともつき程はなけれど片時も問はぬはつらきものにぞありける(古今和

歌六帖)

命だに——えぞ知らぬ今こころみよ命あらばわれや忘るる人やとはぬと(古今和歌集)

夜の間の風——朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに。

王命婦——藤壺に仕へる女官。

同じ人によ——堀江漕ぐ棚なし小船こぎかへりおなじ人によ戀ひわたりなん(古今和歌集)

など越えざらむ——人知れず身はいそげども年をへてなど越えざらむ逢坂の關。

常陸には田をこそ作れ——常陸には田をこそ作れあだ心、かぬとや君が、山を越え野を越え、雨夜

來ませる(風俗歌)

武藏野といへばかこたれぬ——知らねども武藏野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ。

末摘花

思ふけれども、それでも足りない氣のした夕顔の、露と消えるのに残された時の心持は、年月が経つけれども君はお忘れにならない。ここもかしこも、打解けない方々ばかりで、氣持を見せたり、心深い所を見せようとする方の競争であつて、あの親しく、懐かしかつた可愛さには、似るものもなく戀しくお思ひになる。何うかして、仰々しい評判はなくて、ひどく可愛らしい人で、氣の置けるところのない人を見附けたいものだ、懲りずにお思ひ續けになつてゐるので、少しでも故ありさうに聞える邊りには、お耳の留まらないといふ隈もなく、そこはとお心の寄る程の様子のある邊りには、一行でもほのめかされるやうであるが、お塵き申さず、受附けないといふ者は、殆ど無いやうであるのは、珍らしげのない事である。素氣なく剛情な方は、云ひやうもなく情が後れてゐるからの眞實やかさで、餘りにも分際といふものを知らないやうで、さうばかりでは通しきれず、すつかりと崩れて、「つまらない者の妻になりなごする者もあるので、云ひ懸けだけで止められた者も多くあつた。ほんにあの空蟬を、何かの折には口惜しく思ひ出される。荻の葉の方も、然るべき序のある折にはお消息をおやりになる

事もあるやうである。灯影に見た亂れてゐた様は、又あつた所を見たいものだとお思ひになる。大體、全く忘れてしまふといふ事はお出来になれなかつた。左衛門の乳母といつて、大貳の尼君に續いで睦ましくお思ひになる者の娘に、大輔の命婦といふがあつて内裏にお仕へ申してゐる。王家の裔で、兵部の大輔である者の娘なのである。いたくも色を好む若人であつたが、君も召使ひなどされてゐる。母は筑前の守の妻で、夫と任國へ下つてゐるので、父君の許を里として内裏へ通つてゐる。故常陸の親王が晩年にお設けになつて、ひどく大切になさつた御娘が、心細い有様で遺されてゐられることを、事の序にお話申した所が、君は、あはれの事だといつてお尋ねになる。「氣前や容貌など、深くは存じ上げられません。ひつそりして、人の出入りも少くお暮しになつてゐますので、然るべき宵居の時などに物越してお話を申上げてをります。琴を懐かしい話相手に思つて入らつしやいます」と申上げると、君は、「それが『三つの友』で、もう一つの友が良くないものだらう」と云はれて、「私に聞かせる。父親王は其方の方にはお上手で入らしたから、並々の手づかひではあるま

いと思ふ」とお話になる。「そのやうにお聞きになる程のものではございませんでせう」といふと、「ひどく氣を持たせることだ、此頃の朧月夜にそつと行かう。其方も退出つてゐる」と仰せになるので、煩はしい事だと思ふが、内裏も長閑かな春の徒然に退出した。父の大輔の君は外の所に住んでゐた。ここには時々だけ来た。命婦は繼母の所には住み着かず、姫君の御邊りに馴染んで、ここへ來るのである。君は仰しやつた通りに、十六夜の月の面白い時刻にお越しになつた。「ひどくお氣の毒な事でございます、物の音の澄むやうな夜の様子でもなささうでございませぬ」と申上げると、「それでも彼方へ行つて、ただ一聲でもお勧めして見ろ、無駄で歸るのは残念だから」と仰せになるので、命婦は君を、自分の打解けての居間にお置き申して、氣づかはしく勿體ないと思つたが、寢殿の方へ參ると、まだ格子も上げたままで、梅の香の面白いのを眺めやつてゐられる。好い折だと思つて、「お琴の音が、どんなにか澄みまさらだらうと思はれる夜の様子なので、誘ひ出されて參りました。氣ぜはしい出入りをしてをりますので、承れずにばかりをりまして残念でございます」といふと、姫君は、「さういふあはれは、

聞き知る人だけのものです。宮中へ通つてゐる人の聞く程のものではありません」といつて、琴を召し寄せられるので詮もなく、君が何のやうにお聞きにならうかと胸が潰れる。姫君はほのかに搔き鳴らされる。面白く聞かれる。何といふ程の深い腕ではないが、その物の音柄の筋が格別のものなので、聞き憎くも君はお思ひにならない。いかにもひどく荒れ渡つた寂しい所に、あれ程だつた親王の、古風に、窮屈にお冊きになつた名残も無く、何んなにか嘆き盡してゐられることであらう、かういふ所にこそは、昔物語にも身に沁みるやうなことが澤山にあつたことだなどと君は思ひ續けて、言ひ寄らうかとお思ひになつたが、卒爾だとお思ひにならうが心恥づかしく思つて躊躇をされる。命婦は氣働きのある者で、ひどくお耳に馴らすまいと思つたので、「曇り勝ちのやうでございます。客が來ようといつてをりました、嫌つてゐるやうに思はれましては。後程ゆつくりと又。み格子を下しませう」といつて、ひどくも勧めずに歸つたので、君は、「生中な程で止めたではないか、聞き分けられる程でもなくて、残念な」と仰せになる。様子が面白いと思ひになつた。「同じことなら、近くで立聞きをさせろ」と云はれる

が、心憎い程度でと思ふので、「さあ、いかにもひつそりとした御様子で、沈んで入らつして、お氣の毒なやうでございますから、氣が咎めますやうで」といふと、なる程さうもあることだ、急に此方も彼方も打解けて話し合ふといふ分際は、又その分際があるものだなど、哀れにお思ひになる御身分の方なので、「でもそのやうな心持をほのめかして置け」とお話になれる。他にお約束になつてゐる所でもあらうか、ひどく忍んでお歸りになれる。命婦は「帝が實體に入らせられるとお案じになれますのを、可笑しく存じますが折々ございます。かうしたお寢し姿は何うして御見附けになることがございませう」と申上げると、小戻りして笑つて、「他の者のいふやうに、咎め立てなどはするな。これを浮氣な振舞だといふなら、女の有様の方が困ることだらう」と云はれると、命婦は自分を餘りに色めいてゐるとお思ひになつて、折々このやうに仰せになるので、恥づかしいと思つて物もいはない。寢殿の方へ、姫君の御様子の聞かれることもあらうとお思ひになつて、そつとお出でになる。透垣の唯少しばかり折れ残つてゐる隠れの方に立ち寄られると、前から立つてゐる男があつた。誰であらう、心を

寄せてゐる好色者があつたとお思ひになつて、蔭に入つてお隠れになつたが、頭の中將なのである。此の夕べ、内裏から一しよに退出されたが、そのまま大殿にも寄らず、二條の院でもなくて、お別れになつたので、何所へ行かれるだらうとゆかしくて、自分も行く所があるけれど、跡について来て窺つてゐた。つまらない馬に乗り、狩衣姿の粗末なので來たので君はお分りにならなかつたが、さすがにかうした異つた所にお入りになつたので、その訣が分らずにゐた間に、琴の音に聴き入つて立つてゐて、お歸りになるだらうかと心待ちにしてゐたのである。君は誰とも見分けられなくて、自分とは知られまいと、拔足をして歩み退かされると、突と寄つて来て、「振り棄てになつた辛さに、お見送りをしますので、

諸共に大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月

〔歌意〕 御一しよに大内山は出たけれども、その入る方は見せない所の十六夜の月です。

〔「月」を源氏の君に譬へてゐる。〕

と恨むのも口惜しいが、此の君であると御覽になると、少し可笑しくなつた。「思ひ寄らないこ

とだ」と憎み憎み、

里分かぬ影をば見れど行く月の入るさの山を誰か尋ぬる

〔歌意〕 何れの里も差別をせず照らすその光は、人が見るけれども、空を移つて行く月の、その入つて行く山を誰が尋ねる者があらう。(「月」は前と同じ。)

中將は、「此のやうに慕つて歩いたら、何うなさいます」と申上げる。「本當は、かうした御歩きにも、隨身次第で埒もあかうといふものです。後らかさなくて下さい。寢れての御歩きには輕しい事も起りませう」と繰返しお止め申す。かうまで見附けられたのを口惜しいとは思ひになるが、あの撫子は尋ね知る事が出来ずにいるのを、君は我が重い功だと心の中で思ひ出でられる。各約束してある所へも、甘え合つて、別れて行くことが出来ない。同じ車に乗つて、月の面白い程度に雲隠れをした道の間を、笛を吹き合せて大殿にお越しになつた。前驅なども追はせられない。忍んで入つて、人の見ない廊に御直衣を取寄せてお召しかへになり、平氣に、今來たやうにして、御笛を吹きすすんでゐられると、大臣は例のやうにお聞き過ぎしにな

らず、高麗笛をお取り出しになつた。ひどくお上手なので、ひどく面白くお吹きになる。琴をお取寄せになり、女君の方でも、その方に心得のある人々にお弾かせになる。中務の君は専ら琵琶を弾くが、頭の君が心を懸けたのを受けつけなくて、ただ君のたまさかの御氣色の懐かしいのをば、背くことが出来ずにいるが、自然に隠れない事となつて、大宮なども、宜しくないことにお思ひになるやうになつたので、嘆かましい、間の悪い氣持がして、つまらなさうに物に凭つて臥してゐる。全く君を見上げられない所に離れて行くのも、さすがに心細くて、思ひ亂れてゐる。君達は前の琴の音も思ひ出して、哀れさうだつた住まひの様なども、様子を変へて、面白く思ひ續けて、豫想として、ひどく美しく可愛らしい人が、ああして年月を重ねてゐる時に見初めて、ひどく氣に入つたならば、世間からも騒がれる程に、我が心も亂れることであらうかとまで、中將は思つた。此の君が、あのやうに氣持をもつてお歩きになるからは、何うしてそのままでお置きにならうかと、何だか口惜しいやうな危い氣がした。その後、此方彼方から文などお遣りになる事であらう。何方も何方も返事が無い。覺束なくも焦れた

くもあるので、餘りにも變屈なことである。あのやうな暮しをしてゐる人は、物思ひを知つてゐる様子をして、はかない木や草、空の様子などにつけても、さうした心持を寄せて云ひなどして、心持の推し量られる折々のあるのがあはれである。身分が重いからといつても、此のやうにひどく、餘りな埋もれ方をしてゐるのは、氣にくはない悪いことであると、中將の方は、一層に焦れてゐる。例の隔てをお置き申さない心から、「これこれの返事は御覽になりますか。試みにかすめて見ましたが、工合が悪いので止めました」と愚痴をいふと、君は、では言ひ寄つたのだなと微笑まれて、「さあ何うか、見ようと思はないせるかして、見るといふ程でもない」と御返事になるので、人の差別を附けたのだと、中將は残念に思ふ。君は、さう深くは思はない事が、このやうに情が無いので、面白くなつて來られたが、此のやうに此の中將が云ひ懸けてゐるのを知つて、言葉を多く云ひ馴らした者の方に靡くことであらう、得意さうにして、以前の事は思ひ捨てたやうな風をされる事は不快なことであらうと思ひになつて、命婦に本氣になつてお話になる。「何うとも分らない、受け附けない御様子がひどく辛い。浮氣の

事のやうに疑ひをお寄せになつてゐるからであらう。それにしても一時の心は私は持てないのに。人の心にゆつくりした所がなくて、案外な事になる事があるので、自然私の過ちにもなつて行くのだ。心がどこかで、親や兄弟が口を出して恨みる者もなく、氣易くてゐられる人は、却つて可愛いことであらう」と仰せになると、「さあ、そのやうな面白いといふ方で御笠宿りには、駄目なのではなからうかと、不似合なやうにお見受けします。ただもう遠慮をして、引込んで入らつしやる方は、珍らしい方でございます」と、見てゐる有様を申上げる。「功者らしく、利口ぶつた心は無い人であらう、ひどくあどけなく、おつとりしてゐる方が可愛いことであらう」と、お思ひ忘れにならずに御催促になる。

瘡をお煩ひになられ、人の知らない御嘆きに紛れて、お心に暇がないやうで春から夏が過ぎた。秋の頃、靜かに思ひつづけて、あの砧の音も、耳についてやかましかつたのまでも戀しく思ひ出されるにつけ、常陸の宮には屢御文を上げられるが、やはり覺束ないばかりなので、男女間のことを知らず、焦れたくて、負けては止めまいといふお心までも添つて來て、命婦を

お責めになる。「何んな風なのだ、何うにも、かういふ事はまだ覚えがない」と、ひどく心外に思つて仰せになると、命婦もお氣の毒に思つて、「お受けつけしず、似合はない御事だとお思ひになつてゐるのではありません。ただ一通りの恥づかしさのいかにもひどいので、手をお出しになれないのだとお見受けいたします」と申上げると、「それは色氣を知らないといふものだ。心配といふものも知らずにゐる頃とか、自分の身を心任せに出来ない中は、そのやうに恥づかしがるのも尤もだ。何事もお分りになつてゐるだらうと思ふので、何をといふ事もなく徒然で、心細くばかり思つてゐるので、同じやうな心で、御返事をして下さつたら、願ひが叶ふやうな心持がすることだらう。何だ彼だと情交めかしい筋ではなくて、その荒れた簀子に佇みたいものだ。何うにも覺束なくて訣の分らない氣がするので、彼方のお許しはなくても、その工夫をしろ。氣が焦れた悪いやり方といふではあるまい」など御相談になる。君はやはり世間の人の有様を、大方のやうで、聞き集められ耳に留められる癖がお附きになつてゐるので、命婦はさみしい宵居などに、ちよつとした序に、かやうな人がと申上げたのであつたが、此の

やうに態々のやうに仰しやり續けられるので、命婦は小面倒で、姫君の御有様も、君に似合はしく、由ありさうにもないので、生中な手引の爲に、お氣の毒なことが見せられはしないかと思つたけれども、君が此のやうに本氣に仰しやるのを、聞き入れないのは變屈な事であらう。父親王が世に在られた時でさへ、古風な邊りだとして、お訪ひ申す人もなかつたのに、まして今では、庭の淺茅を踏み分ける人は全くないのに、此のやうに世に珍らしい君の御様子が漏れて匂つて來るので、生女房などはにここして、やはり御返をお上げなさいませとお勧めするけれども、姫君は呆れるほどに恥づかしがられるお心から、まるきり御文を見入れもされないのである。命婦は、それならば然るべき折に、物越してお話になつてゐる中に、お氣に入らなかつたらば、それでお止めになさいませ。又然るべき御縁で、かりにもお通ひになるのを、お咎めになるべき人もないことだなど、浮氣ばい逸り心に思つて、父君にも、かういふ事がとも云はなかつた。

八月の二十日餘りの、宵過ぎまで待たれる月の待ち遠で、星の光だけが清かで、松の梢を吹

く風の音の心細さに、姫君は昔の事を話し出して泣かれなどする。命婦は、いかにも好い折だと思つて、お消息を上げたのであらう、君は例のやうにひどく忍んでお越しになつた。月が次第に出て、荒れた籬のあたりを、疎ましく眺めてゐられると、姫君の琴をそのかさされてほかに掻き鳴らされたが、悪くはない。少し當世風を附けたものだ、命婦は浮氣心に心許なく思つてゐる。君は人目のない所なので氣樂にお入りになられる。命婦をお呼ばせになる。命婦は急に驚いた風に、「何うも工合の悪いことでございます。しかじかでお越しになりました。いつも此のやうにお恨みを申されますのを、お心に叶はない由ばかりを申し争つてをりましたので、御自分で道理をお話し申さうと仰しやり續けで、入らつしやいます。何う御返事を申上げませう。並々の軽い方のお振舞ではないので、お氣の毒でございますから、物越しで仰しやる事をお聞きなさいませ」といふと、姫君はひどく恥づかしいと思つて、「人に物を申すやうも知らないのに」といつて、奥の方へゐるざつて入られる様がいかに幼々しい。命婦は笑つて、「さう子供ぼくて入らつしやるのはお氣の毒なことでございます。限りのない方でも、

親が世話をし後見をしてゐられる間は、子供ぼく入らつしやるのも御尤もです。このやうに心細いお有様で、殿方を限りなく憚つて入らつしやるのは、似合はしくございません」とお教へ申す。さすがに人のいふ事は強くは否まないお心で、「御返事を申上げなくて、ただ聞いてゐるといふのなら、格子など鎖しての上でゐませう」と云はれる。「簀子などでは不都合でございます。押しつけない軽はずみの御振舞などはまさか」など、いかにもよく言ひ拵へて、二間の隔ての襖を、自分でひどく強く閉めて、君のお褥を置きなどして繕ふ。姫君はひどくつつましくお思ひになるけれど、かうした懸想人に物をいふ心ばへなどは、夢にも知られないので、命婦がさういふのを、子細のある事だらうと思つてゐられる。乳母といつたやうな老女などは部屋に入つて臥て、寝入つてゐる頃である。若い者で二三人ゐるものは、世に愛でられてゐられる君の御有様を、ゆかしいものにお思ひ申して、心嗜みをし合つてゐる。姫君には少し良い召物を召させて繕つて上げるけれども、本人は何の心嗜みもなくてゐらせられる。男は、限りもなく風流の御様を、それとなく心づかひまでしてゐられる御様子は、ひどくも艶めいて、見分

けられる人にこそ見せたいものだ、何の映えもなさうなかうした邊りに、ああお氣の毒にと命婦は思ふが、姫君のただおほやうに入らつしやるだけが後ろ安くて、出過ぎた事はお見せ申すまいと思つてゐた。自分が常に責められてゐる言ひ諛事の爲に、お氣の毒な嘆きが出て來ようかなどと、不安に思つてゐる。君は人の御身分を思つて、洒落れ返つた、當世風の氣取りよりは、遙かに奥ゆかしいと思ひ續けてゐられたに、とやかくとそそのかされて居ざり寄られた様子が、忍びやかで、えびの香がひどく懐かしく薫つて來て、おほやうなので、思つた通りだとお思ひになる。君は年頃思ひ續けてゐられることを、ひどくよく云ひ續けられたるけれど、遠かつた時にも増して、近くての御返事は全く無い。餘りの事だと嘆かせられる。

幾そたび君がしじまに負けぬらむ物ないひそといはぬ頼みに

〔歌意〕 幾たび君のする無言行に私の方が負けたことでせうか、物を云ふなど云はないのを頼みに云ひ續けて。「しじま」は、童の遊戯の無言行で、物を云ふなど云ひ捨てて、鐘を打つのを相圖にして始め、先に物を云つた方を負けとするもの。

その詰ぢめのお言葉なりとも云つて下さい、『玉響』では苦しうございます」と仰せになる。女君の御乳母の子で侍従といつて、ひどく逸り氣な若い女が、ひどく覺束なくお氣の毒に思つて、姫君にさし寄つて申す。

鐘つきて詰ぢめむことはさすがにて答へま憂きぞかつはあやなき

〔歌意〕 鐘をついて、物を云ふ事を止めさせる事は、さすがに憂く、同時に一方では、返事をする事も愛いといふのは、諛の分らない事です。「鐘つきて詰めむ」は無言行。

若い聲の、殊に重くはない聲なのに、人傳ではないやうに申すので、君は分際よりは甘たれてゐるとお聞きになるけれど、その珍らしいので、却つて口の塞がることです、

いはぬをも云ふにまさると知りながらおし込めたるは苦しかりけり

〔歌意〕 云はないのを、云ふに勝る心だとは知つてゐますもの、押し込めて黙つてゐられるのは苦しいことです。「おしこめ」に「啞」を掛けてゐる。

君は何や彼やと、ちよつとした事ではあるが、面白いやうにも、本氣にも云はれるけれども、何の甲斐もない。ひどい此のやうなもの、風の異つた事で、心持の格別に入らせられる人なの

であらうかと思ふと、口惜しくなつて、君はそつと襖を開けて姫君のゐる所に入つて行かれた。命婦は、まあ厭やな、油断をおさせになつてと、ひどくお氣の毒なので、知らん顔をして自分の部屋の方へ行つてしまつた。かの若い女房どもも亦、世に類もない君の御有様の評判に科をお許し申して、仰々しくも嘆けない。ただ思ひも寄らない俄の事で、姫君にさうしたお心も無い事をお氣の毒に思つた。御本人は唯夢中になられて、恥づかしく極り悪るさより他の事は無いので、君は、今はかういふのがあはれである、まだ男に馴れない人で、冊かれてゐる人だと見許されるものの、訣の分らない、何だかお氣の毒のやうに思はれる御容貌である。何の點につけてお心が留まらう、溜息がつかれて、夜深い中にお歸りになつた。命婦は、何うだらうかと、目が覺めて耳を澄まして臥つてゐたけれど、知つてゐる様子はしまいと思つて、「御送りに」とも聲を出さない。君もそつと忍んでお出ましになつた。

君は二條の院に歸つてお寢になつても、やはり思ふやうには行かない世の中であるとお思ひつづけになつて、軽くはない御身分なのに、お氣の毒にとお思ひになられた。思ひ亂れてゐら

れると、頭の中將が来て、「途方もない御朝寢です、訣があることだらうと思はれます」といふので、お起きになつて、「氣樂な獨寢の床で、氣が緩んだのです。内裏からですか」と仰せになると、「さうです、退出したままです。朱雀院の行幸について、今日樂人や舞人をお定めになる由を、昨夜承りましたので、大臣に傳へようと思つて退出したのです。すぐに參内するつもりです」と忙しさうなので、君は、「それならば一しよに」と云はれ、御粥や強飯をお命じになり、客にも差上げて、車は引續けてあつたが、同じ車にお乗りになつて、中將は、「まだお眠さうです」と咎め出しながら、「お隠しになる事が多うございます」と恨みを申される。諸事を多くお定めになられる目で、君は内裏に詰めてお暮しになつた。彼處には、せめて文だけでもと氣の毒にお思ひ出しになつて、夕方になつてお遣はしになつた。雨が降り出して、道の間が窮屈でもあるに、そこに笠宿りをしようとも亦お思ひにならなかつたのであらう。彼處では、君をお待ち申すべき時刻も過ぎたので、命婦はひどくお氣の毒な御様だと、辛く思つた。御本人は心の中で、恥づかしく思ひ續けられて、今朝來るべき御文の暮れてからになつたのも、と

角のことはお考へがおつきにならなかつた。君の御文には、

夕霧の晴るるけしきもまだ見ぬにいぶせさ添ふる宵の雨かな

〔歌意〕夕霧が晴れる様子もまだ見えないのに、更にいぶせさを添へて降る宵の雨ではございませぬ。〔夕霧〕は姫君の打解けない譬。〕

雲の絶間を待たうとする間あひだの、いかに待ち遠でせう」とある。お越しにならないやうな御様子を、女房どもは心配に思ふけれど、「やはり御返事をお上げなさいまし」と一しよにお勧め申すが、姫君は一段とお思ひ亂れになつてゐる時で、型のやうにも書き續けられないので、侍従が例のやうにお教へ申す。

晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ同じ心に眺めせずとも

〔歌意〕雨の晴れない夜に、月の出るのを待つてゐる里の者を思ひやつて下さいまし、同じ心でその月を眺めば遊ばされなくとも。〔月〕を源氏の君に、「里」を姫君の家に譬へ、「眺め」に、戀の上の思ひを掛けてある。〕

口々に責められて、紫の紙の、何年も経つたので色の褪せて、古びたのに、お手跡はさすがに

線を強く、中まくらゐの手筋で、天地を同じに揃へてお書きになつた。君は見る甲斐がなくて打置かせられる。何のやうに思つてゐようと思ひやるにも氣の毒である。かうした事を、悔やしいなどと云ふのであらうか。さうかといつて何うしよう。自分がそれにしても心永く、末まで見ようとお思ひになる。お心を知らないので、彼處ではひどくお嘆きになられた。

大臣が夜になつて退出されるのに引かせられて、君も大殿にお出でになつた。行幸の事を興のあることに思はれて、君達は集まつてその事を云ひ、銘々舞などを習はれる事をその頃の爲事として月日が過ぎて行く。物の音のさまざまが平生よりはやかましくて、方々は勵み合はれつつ、例の御遊びではなく、大箏、尺八の笛などの音の高いものを吹き上げ、太鼓までも勾欄のもとにまで轉がし寄せて来て、自身打鳴らして遊んでお出でのやうである。君も暇のない形で、切に思はれる所にだけは、時をお盗みにもなるが、常陸の宮の邊りは、全く様子が分らなくて秋が暮れ終つた。其方ではやはり頼んで来た甲斐もなくて過ぎて行く。行幸が迫つて来て、試樂などといつて騒ぐ頃に、命婦が君の所に伺つた。「彼方は何うしてゐる」などとお尋

ねになつて、ひどく氣の毒だとはお思ひになつた。命婦は有様など申上げて、「ひどく此のやうにまで遠々しいお心持は、見上げてゐます者までも心苦しうございまして」と、泣く程に思つてゐる。奥ゆかしく扱つて止めにようと思つてゐたのを、だいなしにしてしまつたのは、心ない事、此の人も思つてゐようと、それまでも氣の毒にお思ひになる。御本人の物も云はずに思ひ埋もれてゐられるだらう様は、思ひやつても氣の毒なので、「暇の無い頃なのだ、餘儀ない」と嘆息されて、「物思ひも知らないやうな心持を、少しの間懲らしてやらうと思つてゐるのだ」とほほ笑まれるが、それが若く美しいので、命婦は自分も笑まれるやうな氣がして、恨みられても餘儀ないお年頃だ。思ひやりが少く、御氣隨なのも御尤もだと思ふ。行幸の御準備の程を過して、時々はお出でになつた。

かの紫の縁を尋ね取られてからは、そのお可愛がりにお心が入つて、六條邊りでも足が遠くなりまさるやうであるから、まして荒れた宿は、あはれだとはお思ひ怠りにはならないながら、大儀にばかりお思ひになるのも餘儀ないことであつた。姫君の持て餘すやうな物恥ぢを

見顯はさうといふ程のお心も格別には無くて過ぎて行くが、逆に、見優りするやうなこともあつても知れない、手探りで、はつきりしないので、不思議な、心得られない事もあるのかも知れない、見たいものだとお思ひになるが、あから様にさういふ事をするのは恥づかしいとお思ひになつて、打解けてゐる宵居の頃に、そつとお入りになつて、格子の隙間から御覽になつた。けれど姫君は見えさうにもなく、几帳などひどく損じてはゐるものの、昔からの立て所が變らず、押寄せるなど亂してないので、奥は見えなくて、老女房が四五人ゐる。御食膳の上の茶碗は、祕色のやうな青い、唐土の物であるが、様の悪いのに、何といふ料理もなくてあはれなのを、退つて来て人々で食つてゐる。隅の間にだけ、ひどく寒さうな女房が、白い衣の云はうやうもなく古くなつたのに、汚らしい褶を結つてゐる腰つきが、變な風である。さすがに櫛を、ずるけさせて挿してゐる額つきは、内教坊、内侍所などだけにかうした者がゐることだと、可笑しい。君は全く、御自分達の身近く仕へる者に、かうした者を御存じはなかつた。ああ、さてさて寒い年だ、命が長いとかういふ世にも逢ふものです」といつて泣く者がある。故

宮みやがるらせられた世を、何だつて辛いなんて思つたのでせう、こんなに頼みない暮しをするのですもの」といつて、今にも飛び立ちさうに慄ふるへてゐる者もある。色々に様さまの悪い事を嘆き合つてゐるのを、聞いてゐられるのも氣の毒なので、君は立ち退いて、唯今お出でになつたやうに格子をお敲たたきになる。「そら」などといつて、燈火ともびを取り直し、格子を開け放つてお入れ申す。侍従は齋院わかくらに参り通ふ若人で、此頃はここには居ない。いよいよ變に、田舎めいた極みで、君は見馴れない氣ばかりなさる。老女房おんなばやのものやが上の愁ひであつた雪は、搔き垂れてひどく降つた。空の様子が烈はげしく、風が荒れて、燈火は消えてしまつたが、燈ともす人も無い。君はかの鬼に襲はれた折の事をお思ひ出しになつて、荒れてゐる様はそこに劣らないやうであるが、家が狭く、人けが少しあるなどに慰められてゐられるけれど、凄く、戀に目敏めざとい氣のする夜の様である。君は面白くもあはれにも、常とは變つて、心の留とまるべきあたりの様であるのに、姫君がひどく引込み氣分が強く、何の興もないのを残念にお思ひになる。やうやう夜が明けて行く様子なので、君は格子を御自身お上げになつて、前の前裁の雪を御覽になる。踏み分けた跡

もなく、遙々と荒れ續いてゐて、ひどくも淋しいので、振りすてて行くのもあはれで、「面白い時刻の空を御覽なさい。何時いつまでも心の隔てを附けてゐるのは餘りです」と恨みを申される。まだほの暗いが、雪の光で、君のいよいよ清らかに若く見えられるのを、老女房おんなばやどもは嬉しさに笑んでお見上げする。「早くお起きなさいまし。つまりません。心の美しいことが第一です」などお教へ申すと、さすがに人のいふ事は厭いややとはいはないお心で、とやかく引繕つて居ざつてお出になつた。君は見ないやうな風をして、外そとの方を眺めてゐられるけれども、後目しりめは普通ではない。何うだらう、打解け優まさりが少しでもあれば、嬉しいことだらうとお思ひになるのも、無理なお心である。先づ居い丈だけが高く、背せいの長く見えるられるに、此れだつたと驚く。次いで、まあ見苦しいと見えるものは、御鼻である。ぢつと目が留とまる。普賢菩薩ふけんぼさつの乗物のりものの象ざうが思はれる。呆れるほど高く、延びやかで、先の方はうが少し垂れて、赤く色が着いてゐる所が、格別にも見苦しい。顔色かほいろは雪恥ゆきぢづかしく白くて、青みを帯び、額ひたいつきはひどく廣いのに、猶なほ下の方はうが長い顔の全體は、大方おほかた仰山やうざんに長いのであらう。瘦せてゐられることは、氣の毒なほど骨が

ちで、肩の邊りなどは痛さうな程で、衣の上からでさへはつきり見える。何だつて残りなく見
 顯はしてしまつたらうと思ふものの、珍らしい様をしてられるので、さすがに見やらせられ
 る。頭つきと、髪の垂れ懸つてゐる様だけは美しく、まことに愛でたいとお思ひ申す人々に
 も殆ど劣らない程で、袴の裾に溜つて、餘つて後に曳かれてゐる所が一尺ばかりもあらうと見
 える。著てゐられる物まで云ひ立てるのは口が悪いやうであるが、昔物語にも人の装束を第一
 にいつてゐるやうである。紅の色の古びて、ひどく白けた一襲に、紫の古びて、すつかり黒く
 變つた袴をかさねて、上著には黒貂の皮衣の、ひどく清らかで香に染みたのを著てゐられる。
 古代の由緒のある御装束ではあるけれども、若い女の御装束としては似氣なく、その仰々しい
 事がひどく持て囃されてゐる。だが本當に此の皮衣がなかつたならば、寒いことだらうと見え
 るお顔の様であるのを、お氣の毒だと君は御覽になる。何事もお云ひにはなれず、自分までも
 口を閉ぢてゐるやうな心持がされるけれど、例の無言行も試して見ようと、とやかくと申され
 ると、姫君はひどく恥ぢらつて、袖で口を覆はれる様までも、鄙びて古めかしくて、態とらし

くて、儀式官が練り出した時の張り肘が思はれて、それでも笑顔になられたあんばいは、間が
 ぬけて粗忽めいてゐる。君は氣の毒にあはれに思はれて、一段と急いでお出ましになる。「頼
 もしい人もないお有様なので、逢ひ初めた私には疎くなくお睦び下さると、本意のある氣がい
 たしませう。許しのない御様子なので、辛い事で」など託つけて、

朝日さす軒の垂氷は解けながらなどかつららの結ぼほるらむ

〔歌意〕 朝日のさす軒のつらはは解けながら、何だつて氷の方は結ぼれてゐるのでせう。「つら
 ら」は氷で、姫君を譬へたもの。

と仰せになるけれど、姫君はただ「むむ」と笑つて、返歌を詠むにひどく口が重さうなものも氣
 の毒で、お出ましになつた。お車を寄せてある中門の、ひどく歪んでよろけ懸つてゐるのが、
 夜目にもはつきり見えながらも、其方此方隠れてゐる所も多かつたが、ひどく衰れに淋しく荒
 れ切つてゐるのに、松の上の雪だけが暖かさうに降り積んでゐるのが、山里のやうな氣がして
 面白いので、あの人々が云つた葎の門といふのはかういふ所なのであらう。成る程氣づかはし

く可愛ゆい人を此所に置いて、氣に懸けて戀しく思ひたいものだ。有るまじき物の我が嘆きは、それによつて紛れもしようと思ひ、この思ふに叶ふ住家には一致しない姫君の有様は、取るべき所が無いと思ひながら、自分でなかつたら、ましてあの姫君を我慢して相手になつてゐるようか。自分がかうして馴染んで来たのは、父親王の氣懸りだと思つて姫君に付き添はせて置いた魂が、案内をしたのでもあらうと思ひになる。橋の木の雪に埋まつてゐるのを、御隨身を呼んで拂はせられる。それを羨しさうに、松の木が我と起きかへつて、さつと零れて来る雪も、「名に立つ末の」と見えて面白いのを、さう心が深くはなくとも、一通りの程度にあしらつて一しよに見る人を欲しいものだと思つて御覽になる。お車の出るべき門はまだ開いてゐないので、鍵を預つてゐる者を探ね出すと、翁のひどく年寄つたのが出て来る。娘なのか孫なのか、中途半端の大きさの女の、衣は雪に照らされて汚れが目立ち、寒いと思ふ様子が著しくて、變な物に火を僅か入れて、袖に包んで持つてゐる。翁が門を開け得ないので、女が寄つて手傳つて引いてゐるが、ひどく不器用である。お供の人が立ち寄つて開けた。

ふりにける頭の雪を見る人も劣らず濡らす朝の袖かな

〔歌意〕 年老いた人の頭の白髪を見る自分までも、その哀れさに、その人にも劣らずに涙で朝の袖を濡らすことである。(「頭の雪」は白髪の譬。「ふり」は「降り」の意で、「濡らす」と共に雪の縁語。)

「若き者よ形蔽れず」と誦されたが、「悲愴と寒氣と、併せて鼻の中に入りて辛し」と續けられると、鼻が色を顯はして、いかにも寒さうに見えた御面影が、ふつと思ひ出されて、君はほほ笑ませられる。頭の中將にあれを見せた時には、何んな事を譬へていふだらう。絶えず窺ひ寄つてゐるから、追つ附け見つけられようと、しやうも無く思はせられる。世間並の程度での、無器量であるならば、思ひ棄てて止めもしようが、はつきりと御覽になつて後は、却つて哀れに氣の毒で、眞實な様で常にお訪ねになられる。黒貂の皮ではない絹、綾、綿など、又年寄ども著るべき物の類、かの翁の爲にまでも、上下ともお思ひやりになつて差上げられる。此のやうな地味な事も、なさるに極り悪くお思ひにならずにゐられるのを氣やすく思はれ、かうした

方の後見となつて養つて行かうといふ思ひ方をなさつて、風の違つた、さうはすまじき打解けた事もなさつた。あの空蟬の打解けてゐた宵の横顔は、ひどく悪い容貌ではあつたが、身もてなしで隠されて、残念ではなかつた、あれに劣るべき程の人柄であらうか、いかにも階級にはよらない事である、氣持の穩やかで、心憎かつたのに、負けて終りになつた事だと、何かの折毎にはお思ひ出しになる。

年も暮れた。君は内裏の御宿直所に入らせられると、大輔の命婦が伺つた。御梳り髪などには、懸想めいた筋ではなくて、心易いだけなものの、さすがに戯れ言などを云つてお使ひになつてゐるので、召のない時でも申上げる事のある時には伺つてゐた。「妙な事がございしますが、申上げないのも變だと、困つてしまひまして」とはほ笑んで云ひさしてゐるのを、「何のやうな事なのだ、私には包む事があるまいと思ふに」と仰せになると、「何う致しまして、自分のお願でしたら、恐れ多くても第一にと思つてゐますが、これは申上げにくうございまして」と、ひどくもぢもぢしてゐるので、「いつもの艶な振りをする」と君は憎まれる。「あの宮からの御文でござ

います」といつて取り出した。「まして此れは、隠すべき物でも無いぢやないか」とお取りになるにも命婦は當惑する。陸奥紙の厚ぼつたのに、香だけは深く焚き籠めてある。ひどく確りと書きおふせてある。歌も、

唐衣君が心のつらければ袂はかくぞそぼちつのみ

〔歌意〕君の心が辛くて、打絶えて居らせられるので、衣の袂はこのやうに、涙に濡れそぼちつづけてばかりをります。「唐衣」に衣の意と、「君」の「着」に係る枕詞。

君は訣が分らずに、小首を傾けて入らせられると、命婦は、包につつんだ衣篋の、重さうな古風なのをそこに置いて、押し出した。「これが何うして工合悪く思はずにゐられませう。ですが元日の御装束にと思召して、態々の物のやうでございしますから、はしたなくお返しも出来ません。私が引き込めて置きますのも、彼方のお心持に違ふこととございしますから、御覽に入れての上で」と申上げると、「引き込められるのは辛い事だらう、『袖捲き乾さむ人』もない私には、いかにも嬉しい志だ」と云はれて、それきり物も云へずにゐられる。さても淺ましい詠口だ、

これこそは自分の腕の限りのものであらう、いつもの侍従が直してゐたのであらう、また筆の尻を持ち添へてくれる博士も無いことであらうと、詮なく思はせられる。心を盡して詠み出した程を思ふと、「ひどく勿體ない歌といふのは、かういふのもいふのであらう」と、ほほ笑んで見られるのを、命婦は顔を紅らめてお見上げする。装束は當世風の紅の、我慢の出来ないうな艶の無い古めいた直衣で、裏も表も同じやうな細かい織で、ひどく平凡に袷々の仕立てが見られる。君は淺ましいとお思ひになつて、其の文を廣げながら、端に、手習をし散らされるのを、命婦は側から見ると、

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖に觸れけむ

〔歌意〕なつかしい色でもないのに、何だつて此の末摘花を袖に觸れたのであらうか。「末摘花」は紅花の一名。姫君に譬へてある。「袖に觸る」は摘む意で、逢つた事の譬。

色の濃い花だと見たけれども」と書き汚される。命婦は、花の咎め立てをされるのは、もつと子細のある事だらうと思つて、思ひ合せられる折々の月の光などで見るそれを、お氣の毒とは

思ふものの、可笑しい氣になつた。

くれなるの「花衣薄くともひたすら腐す名をし立てずは

〔歌意〕紅花色の一浸しだけ染めた衣の色、薄くはあらうとも、全然腐らせてしまふ評判を立て下さらなかつたならば嬉しうございませう。「一花衣」は、一入だけ染めた色の薄い衣で、姫君の取柄のない事の譬。「ひたすら」は「一花」の縁語。

お氣の毒な御仲で」と、ひどく物馴れて獨り語にいふのを、君は心の中で、好い歌ではないが、姫君もせめて此れ程の一通りの事でも出来られたならば可からうにと、返す返すも残念だ。御身分から見てお氣の毒なので、名の朽ちるといふ事はさすがにと思はれる。人々が來るので、君は「隠さうか。かうした事は、人のするものだらうか」とお呻きになる。命婦は、何しに目懸けたのだらう、私までが心もならでと、ひどく恥づかしく思つて、そつと退つた。その翌日、命婦が殿上に詰めてゐると、君は裏盤所をお覗きになつて、「そりや、昨日の返事だ、變に心づかひをなさり過ぎる」といつて、文をお投げになつた。そこにゐる女房たちは、何であらう

とゆかしがる。君は、『たたらめの花の如、三笠の山の少女をば棄てて』と風俗歌を謡ひすさんでお立ち去りになつたのを、なほ命婦はひどく可笑しいと思ふ。事の心の分らない人々は、「何うしたのです、その獨り笑ひは」と咎め合つた。「何でもないんです、寒い霜の朝に、歌の文句の掻練のやうな赤い鼻を御覽になつたのでせう。御鼻歌がひどく可笑しいのです」といふと、「御無理なことです、此の中にはそんなに色の鼻は無いやうです。左近の命婦か肥後の采女がまじつてゐたのでせうか」など、訣が分らないので云ひ合ふ。命婦は君の御返事を差上げると、宮では女房が集まつて愛でて見た。

逢はぬ夜を隔つる中の衣手に重ねていとど見もし見よとや

〔歌意〕逢はない夜に、隔てとなつてゐる我らの間の衣に、贈られた衣を重ねて著て、一層隔てをつけて見もし見られもしようといふのですか。

白い紙に、書き棄てたやうにお書きになつてゐるのが、却つて面白く見える。晦日の日の夕方、その御衣筥に、君の御召料にといつて餘所から差上げた御衣一揃、葡萄染の織物の御衣、

又山吹か何かなど色々見えるのを、命婦から姫君に差上げた。前の此方からの物の色合を悪いと御覽になりはしないかと思ひ知られましたが、「あれもまた紅の重々しい色でしたもの。それかといつて負けますまい」と、年をした女房どもは品定めをする。「御歌も、此方からのものは、理が通つて確りとしてゐました。御返しは、ただ面白いだけです」などと口々にいふ。姫君も生やさしくはなくお詠みになつた物なので、物に書き付けてお置きになつた。

元日の頃が過ぎて、今年には男踏歌がある筈なので、例の所々を遊び騒いで歩かれるので、物騒がしいけれど、淋しい所が哀れに思ひやられるので、七日の日の節會が終へて、夜に入つて君は御前から退下されたが、御宿直所にそのままお泊りになるやうな形にして、夜を更かして常陸の宮にお越しになつた。何時もの有様よりは、様子が賑やかになつて、世間並になつて來た。姫君も少し柔らかな様子が添つてゐられた。何んなであらう、容貌も改まつて直つてゐたならばと思ひ續けられる。日の出る頃に、出かねる様にして、お出ましになられる。東の妻戸を押し開けられると、對つての廊の、屋根も無く崩れてゐるので、日の脚が程もない所までさし込

んで、雪が少し降つてゐる光で、ひどくはつきりと見える。君の御直衣などを召されるを姫君は見出だして、少し居ざり出て、物に凭つて傾き臥してゐられるが、その頭つきや、零れ出てゐる髪がひどく愛でたい。顔の生ひ直つてゐるのを見出した時は嬉しいだらうと思つて、格子をお引上げになる。氣の毒だつた時に懲りて、上げ切ることもしらずに、脇息を押寄せて格子を持たせて、鬢の毛の亂れたのを繕はせられる。恐ろしく古めかしい鏡臺、唐櫛匣、搔上の匣などを持ち出して來た。さすがに男の道具までが何うやらあるのを、洒落れて可笑しいと御覽になる。女の御装束の、今日は世間風になつてゐると見えるのは、前の衣笥の心持をそのままに召してゐるからである。君はそれとはお思ひ附きにならず、興のある紋の附いてゐて、はつきりとしてゐる表衣だけを、變だとお思ひになつた。「せめて今年は、聲を少しはお聞せなさい。『待たるる物』の方はさしおかれて、御様子の改まることの方がゆかしいことです」と云はれると「囁ぐる春は」とやうやうの事で慄へ聲で云はれる。それです、年を立つた験です」と打笑はれて、『夢かとぞ思ふ』と誦してお出ましになるのを見送つて物に凭つて臥してゐられる。

袖で口覆ひをしてゐられる横から、やはりあの末摘む花が、ひどく艶やかにさし出てゐる。見苦しいことだと思ひになる。

二條の院にお歸りになると、紫の君がひどく美しい育ちがかりで、紅はかうもなつかしいものもあるものだと見えるに、無紋の櫻色の細長をやはらかに著こなして、無心の様でゐられるのがひどく可愛ゆらしい。古風な祖母君の躰の名残で、まだ黒漿を着けることはされなかつたのを、それらをおさせしたので、眉もはつきりと變つて來て、美しくも清らかである。我が心から、何だつてああいふ辛い男女仲を見抜つてゐる事であらう、此のやうにいぢらしい者を見てもゐずと思ひ續けて、例のやうに一しよに雑遊びをなさる。紫の君は繪を描いて色どりをなさる。色々面白く調子に乗つて書き散らしをされた。君もお描き添へになる。髪の毛のひどく長い女をお描きになつて、鼻に紅を着けて御覽になると、繪に描いたものでも見るに厭やな様をしてゐる。御自分の顔の鏡臺に映つたのが、ひどく綺麗なのを御覽になつて、我が手でその紅花を鼻に描き着け、赤くして御覽になると、このやうに好い顔でも、さうした物のまじ

るのは見苦しくなる事のやうである。姫君はそれを見て、ひどくお笑ひになる。「私が此のやうに片輪になつたとしたら何うだらう」と云はれると、「いやな事でせう」といつて、そのやうに染み着きはしなからうかと、危くお思ひになる。君は空拭ひをして、「少しも落ちない。つまらない徒らをしてしまつた。内裏で、何うやうに仰せになる事だらう」とひどく本氣らしく云はれると、姫君はひどく氣の毒にお思ひになつて、側へ寄つて、お硯の水入れの水で陸奥紙を濡らしてお拭きになるので、「平仲のやうに彩色を添へないで下さい。赤いのは我慢もしませう」と戯れてゐられる様は、ひどく面白い御夫婦と見られる。日はいと麗らかで、いつになつたら花が咲かうかと、霞み渡つてゐる梢どもの待ち遠に思はれる中にも、梅だけはその様子を見せ、一面に綻んでゐるのが取り分けて目立つ。階隠しの下の紅梅は、一番早く咲く花で、色づいてゐる。

くれなるの花ぞあやなく疎まるる梅の立枝はなつかしけれど

〔歌意〕紅の花の方は詠もなく疎まれることだ、その咲く梅の立枝の方はなつかしいけれど

も。「紅の花」に常陸宮の姫君の花の赤さを譬へ、「立枝」に常陸の宮の家筋を譬へてゐる。

いやもう、何うも」と、詮なく呻かせられる。ああお可憐さうな事である。かうした人々の末々は、何うなつた事であらう。

註

常陸の宮——親王で常陸の國守。

三つの友——白樂天の詩にあるもの、琴詩酒をいふ。

玉櫛——ことならば思はずとやはいひはてぬなど世の中の玉櫛なる(古今和歌集)

内教坊——禁中にて舞妓をおいて女樂を教へられた所。

内侍所——禁中に八咫の神鏡を奉安する所。巫女や老女が奉仕す。

名に立つ末の——我が袖は名に立つ末の松山か空より波の越えぬ日はなし(後撰集)

若き者は形蔽れず——白樂天の秦中吟中に貧しい生活をうたつた一節。夜深煙火盡、霰雪白紛々、

幼者形不蔽、老者體無溫、悲端與寒氣、併入鼻中辛。

袖捲き乾さむ人——沫雪は今日はな降りそ白たへの袖捲き乾さむ人もあらなくに(萬葉集)

待たるる物——あら玉の年たちかへるあしたより待たるるものは鶯の聲(拾遺和歌集)

囀る春は——もち鳥囀る時はものごとにあらたまれども我ぞ古りゆく(古今和歌集)
 平仲——有名な好色の男。平仲が硯の水を空涙に使ふのを知つた女が、その硯の中に墨をすり込
 て置いたので、顔を黒くして家へ歸つた。妻がそれを見て「われにこそつらさは君が見すれども人
 にすみつく顔の氣色よ」と詠んだといふ話がある。
 待たるるものは——あら玉の年立ちかへる朝あしたより待たるる物は鶯の聲。(古今和歌集)
 さへざる春は——百千鳥さへづる春は物毎にあらたまれども我ぞ古りゆく。(同上)
 夢かとぞ見る——忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見むとは。(同上)

紅葉賀

朱雀院の行幸は、十月の十日餘りである。世の常のものではなく、面白くあるべきこの度の事なので、御方々は御見物なさらないことを残念がられる。帝も藤壺の御覽にならないことを飽かぬことに思召されるので、試樂を御前でおさせになる。源氏の中將は青海波を舞はされた。片方の相手は大殿の頭の中將で、容貌も用意も格別の人であるが、立ち並ぶと花の傍らのみ山木である。入り方の夕日がさやかにさしてゐるのに、樂の聲が勝つて来て、その事の面白い所で、同じ舞の足拍子、面持など、世に見られない様である。詠をされる時は、これが佛の國の迦陵頻伽の聲であらうかと聞える。面白くあはれなのに、帝は涙をお落しになる。上達部や親王たちも皆泣かれた。詠が終つて、舞の袖を直してゐられると、それを待ち受けての樂の音が賑はしく起るにつけ、顔の色合が立ち勝つて来て、平生よりも耀いて見えられる。東宮の御母の女御は、源氏の君のこのやうに愛でたいにつけても妬ましくお思ひになつて、「神などが空で愛でさうな容貌です、厭やな、氣味の悪いことだ」と仰せになるのを、若い女房などは聞きづらい事だと耳に留どめた。藤壺は勿體ない心がなかつたならば、まして愛でたく見

えようとお思ひになつて、夢のやうな心持がしてゐらせられた。藤壺の宮は直ちに御宿直なのである。帝は、「今日の試樂は青海波で事が盡きた。何う御覽になつた」と仰せになると、宮は何うにも御返事が申上げにくくて、「格別でございました」とだけ申上げらる。「片方も悪くはなく見えた。舞の振も手つかひも家の子は異つてゐる。當世に名を得てゐる舞の師は、成る程いかにも上手だが、おつとりして艶めいてゐる所は見せない。試みの日にあのやうに皆仕てしまつたので、紅葉の蔭はさびしいことだらうと思ふが、お見せしようと思つて用意させたのでした」など仰せになる。翌日は早朝に、中將の君から藤壺の宮に御文で、「何のやうに御覽になつたのでせう、云ひやうもない惱ましい心持でしたのでございました。

物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖打ち振りし心知りきや

〔歌意〕 嘆きをしてをりますので、舞などすべくもない身でございますが、お見せする爲のものと思つて袖を振りました、その心をお汲み下さいましたか。「袖打ち振りし」は、離れてゐて思慕の心を現はす仕ぐさ。

あな畏」とある。御返事は、見る目もまぶしかつた源氏の君の御様容貌に、怵へることがお出来にならなかつたのでもあらうか、

唐人の袖ふることは遠けれど起ち居につけてあはれとは見き

〔歌意〕唐人が袖を振つたといふ古事は、遠い境の知らない事でございますが、近い君の舞は、その起ちつ居つするにつけて身に沁みて見ました。「唐人の袖ふること」は、唐樂である青海波の舞はといふ意に、唐人が思慕の心で袖を舞つたといふ古事はの意を掛けたもの。「起ち居」は、袖を振る意を言ひ換へたもので、同じく思慕の心を持たせたもの。

大方の上としては」とあるのを、君は限りなく珍らしく思ひ、かうした故事の方面までも不案内ではなく、他國の朝廷の事をも思ひやられたのは、后となられるべき御方の言葉で、豫てもそれと知られるものだとほほ笑まれて、經のやうに手から放さず披いて見てゐられた。

行幸には、親王たちを始め世に残る人もなくお供をした。東宮も行啓になる。例の樂をする船がお池を漕ぎめぐつて、唐土の舞高麗の舞と盡してする舞の種類が多い。角の聲、鼓の音が世を響かせる。帝は一日の源氏の君の夕暮のお姿を、氣味悪くお思ひになられ、無事を祈る爲の御

誦經を所々にさせられたが、それを聞く者は御尤もだとしてあはれがり申すのに、東宮の御生母の女御は、餘りの事だとお憎がりになる。垣代は、殿上人も地下の者も、心得が格別だと世間から思はれてゐる堪能の人の限りを選り揃へさせられた。宰相が二人、左衛門の督、右衛門の督が、左右の樂の事を奉行する。舞の師などは、世間に名ある者を師取りして、誰も誰も引籠もつてゐて習つたのであつた。丈の高い紅葉の蔭に、四十人の垣代の、云ひやうもないやうに吹き立てる様々の樂の音に、打合つて吹く松風は、本當の深山おろしのやうに聞えて、吹き亂れて、色々の色に散り合ふ木の葉の中から、青海波の耀いて現はれた様は、ひどく恐ろしいまで見える。頭挿の紅葉がひどく散り過ぎて、源氏の君の顔の艶に壓しられてゐる心持がするので、御前にある菊の花を折つて、左大將が挿し替へさせられる。日の暮れかかる頃に、しるしばかり時雨れて來たのは、空の様子まであはれを知つてのやうに見えるに、源氏の君はさうした美しい姿に、菊の花の色々に移ろつて、云はれず美しいのを挿頭して、今日は又と無い手を盡して舞はれる、その入綾の程の面白さは、そぞろに寒けがして、此の世での事とは思は

れない。物の趣は知るまいと見える下人などで、木の下、岩に隠れ、山の木の葉に埋もれて見
てゐる者までも、少し物の心を知つてゐる者は涙を落した。承香殿の御腹の第四皇子が、ま
だ童で、秋風樂をお舞ひになつたが、此れが源氏の君に次いでの見物であつた。これらに面白
さが盡きたので、他の事には眼も移らなくて、却つて興を覺ますものでもあつたらう。その夜源
氏の中將は、正三位にお進みになられる。頭の中將は正四位の下にお進みになる。上達部たち
の何れも然るべき限りは昇進の喜びをされたのも、此の君に引かれての事なので、人の目を驚
かし、心をも喜ばせられるその前世が知りたい氣がする。

藤壺の宮はその頃内裏からお下りになつたので、君は例のやうに隙がなからうかと窺ひ歩か
れるのを爲事としてゐて、大殿にはお騒がれになる。一段と又、かの若草を尋ね取られたの
を、「二條の院では、人をお迎へになられました」と人が申上げたので、ひどく氣に入らない事と
お思ひになつた。内々の有様は御存じがないので、そのやうにお思ひになるのは尤もなこと
であるが、女君が心がやさしくて、普通の者のやうに恨みを仰しやるのならば、君も打明けての

お話をして、お慰めも申せようものを、思ふとは異ふ扱ひをばかりなさる氣まづさから、君の
さうした有るまじきお慰みも出て來ることである。女君の御有様には悪い、これが不足だと思
はれる疵もない、又他の人よりも先に御夫婦仲となつたので、君のあはれに、大切な方とお思
ひ申してゐる心も、それと御存じにならない間こそはとにかく、終にはお思ひ直しにならうと
思つて、その穩やかな、輕々しくはないお心の程からも、自然さうならうと、君の頼みになさ
り方は、他の人とは異つてゐるのである。

幼い人は、見續けてゐらせられるにつれて、いかにも良い心様と容貌で、無心に君に睦れ纏は
らせられる。暫くは殿の内の人にも、誰とも知らせまいとお思ひになり、やはり離れた對の方
に、御裝飾も此の上もなくして、君も明け暮れにお出でになつて、萬事をお教へになられる。
手本を書いて習はせなどしいしい、君はただ他に置いてあつた御娘を迎へ取つたやうに思つて
入らつしやる。政所、家司などを始め、すべてを別に分けて、不自由なくお仕へ申せる。惟光
より他の人は、何ういふ方かとばかりお思ひ申上げてゐる。かの父宮もお知りになる事が出來

なかつた。姫君は今でも時々以前をお思ひ出しになる時は、尼君を戀しがる時が多い。君のお出でになる時は紛らかされるが、夜などは、時々はお泊りにもなれ、此所彼所とお暇がなくて、暮れるとお出ましになるのを、跡を追はれる時があるが、君はひどく可愛ゆくお思ひになる。二三日内裏に侍らはれ、大殿にもお出でになる折は、ひどく萎れなどされるので、君は氣の毒で、母の無い子を持つてゐるやうな氣がして、夜のお出ましも落着き心のないやうな氣がされる。僧都は、これこれだとお聞きになつて、不思議に思ふものの嬉しくお思ひになつた。尼君のお法事などされるにつけても、君は鄭重にお弔ひをされた。

藤壺の退出してゐられる三條の宮に、君は御有様もゆかしいので伺はれると、命婦、中納言の君、中務といつたやうな人々が對面をした。さつぱりとした御もてなしであると、安からず思はれるが、心を落着かせて、普通のお物語を申上げてゐる中に、兵部卿の宮が入らせられた。宮は、この君がゐらせられると聞かれて御對面になつた。宮のひどく由ある様子をして、色好みらしく、しなやかなのを見て、君は自分が女であつて見たならば面白いであらうと、人知れ

ず見奉るにつけても、それこれの關係から睦ましく思はれて、心濃やかに物語などを申上げられる。宮もまた此の君が、いつもよりは格別に懐かしく、打解けてゐられるのを、ひどく愛でたいと御覽になつて、鞞になどは思ひも寄らず、自分が女であつて見たいものだ、色好みのお心にはお思ひになる。暮れると、宮は御簾の内にお入りになるのを、君は羨ましく、昔は帝の御もてなしで、藤壺の宮に間近く、人傳でなくて物をも申したものを、ひどくもお疎みになると、辛くお思ひになるのは無理なことである。君は、「屢お伺ひ申すべきであるが、さしたる事のごさいません時は、自然怠るでございませうが、然るべき御用は仰せつけて下さいましたら嬉しうございませう」など、確りとした云ひ方をしてお歸りになつた。命婦も工夫の附けやうも無く、宮も以前よりは一段とその事を憂い事にお思ひ定めになり、打解けない御様子であるにつけても、命婦は恥づかしくも思ひ、お氣の毒でもあるので、何の甲斐もなく月日が過ぎて行く。果敢ない縁だとお思ひ亂れになることが互に盡きない。

少納言は、思ひも懸けず面白い世界を見ることである、これも故尼上が、姫君の御上を案じ

て、御行法にもお祈りをされた、その佛の御験であらうと思ふ。大殿はひどく貴く入らせられ、此所彼所にも多く御關係の所があるが、本當に御成長になつた時は、面倒なこともあらうかと思はれた。しかし此のやうに取り分けての御寵愛の點は、ひどく頼もしさうである。御喪服は、母方は三月のものだといつて、十二月にはお脱がせ申したが、別に親もなくて御生長になつたので、眩ゆい程の色ではなくて、紅、紫、山吹色の、地だけで、紋はなく織つた小桂などを著てゐられる様は、ひどく當世風でおもしろい。男君は小朝拜に參内されるといつて、姫君の方をお覗きになつた。「今日からは大人しくなりましたか」といつて、打笑まれるのが、いかにも愛でたく愛敬づいてゐられる。姫君は、いつの間にか雛を押並べて、忙しくしてゐられた。三尺の御厨子の一揃ひになつたのに、品々を飾りつけて、又小さい屋も幾つか作つて差上げてあるのを、一ぱいになるまで遊び廣げてゐられた。「追灘をするといつて、犬きがこれを壊してしまひましたので、繕つてゐるのです」と、ひどく大事件と思つてゐられる。「ほんに、ひどく心なしな事をしたものです。直ぐに直させませう。今日は縁起を取つてお泣きになりま

すな」といつて、お出ましになる御様子のひどく貴いのを、人々が端に出てお見上げするの
で、姫君も立つて出て御覽になつて、雛の中の源氏の君を飾り立てて、内裏へ參らせなどなさ
る。「せめて今年は、少し大人のやうにお成りなさいまし。十年を越した人は、雛遊びは嫌ふもの
でございますのに、このやうに御男をお持ちになつたのですから、それらしくしとやかにしてお
見せ申すものです。御髪を梳る間でもさへもお厭やがりになりますなんて」と少納言は申上げる。
お遊びにはかり氣を入れてゐられるので、恥づかしく思はせようと思つていふと、姫君は心の中
で、私はそれでは男を持つたのだ。この人たちの男といつてゐるのは、醜い者ばかりだ。私はあの
やうに美しい若い人を持つたことだと、今初めてお思ひ知りになつた。さうは云つても、お年の
數の添つたしるしであらう。かうした幼い御様子が、事に觸れてははつきり分るので、殿の内の
人々も不思議だとは思つたけれど、まるで此のやうに、情づかない御添臥だとは思はずにゐた。
君は内裏から大殿へ退られた。女君は例のやうにしやんとした、取締つた御様で、心やさし
い御様子もなくて苦しいので、「今年からでも、少し夫婦仲らしくなつて、改めて下さるお心が

見えたなら、何んなに嬉しいこととせう」など申されるけれども、女君は、君が態と人を据ゑて大切にされてゐられるとお聞きになつてからは、定めて貴い方かたにお思ひ定めになつての事であらうと、氣ばかり置かれて、一段と疎く、恥づかしくお思ひになられるのであらう。我慢して見知らないやうな風をして、君の亂れてゐる御様子には、さまで心強くは出来ず、御返事など申されるのは、やはり他の人とはひどく異ちがつてゐる。女君は四歳ほど上で入らせられるので、年嵩さまなのを極り悪さうに、盛りと整つた様にお見えになる。君は、我が心の餘りにも怪しからず調子附いてゐるので、このやうに恨みられるのだと思ひ知られる。同じく大臣だいじんと申上げらる中なかでも、帝みかどのお覚えの貴く入らせられる方が、宮腹みやはらの一人娘ひとりむすめとして齋いっき冊かじいてゐられるといふお心驕りが、格別かくべつひどく強くて、ゐらせられて、少しでも粗末そまつにされるのを、心外こころはずにお思ひになられるのに、男君は、何だつてそれ程までといふお心習おこころなひがある、その爲のお心の隔へだたなのであらう。大臣おとよも、此のやうに頼もしげのない君のお心を、辛つらいとはお思ひ申してゐるもの、君をお見上げる時には、恨みをお忘れになつて冊かじきお世話せわをなさる。翌日あしたの早朝さうしやうに、君のお出

ましになる所を大臣おとよは覗かれて、君が御装束おんまゐをなさるに、御帶おんたうを御自身おんみづか持つて入らせられて、君の御衣おんぎの背せの亂れを引繕ひきとふなど、御沓おんくつも取りかねない程ほどになさるのは、ひどくあはれである。君は、「これは内宴ないえんなどといふこともございませうから、その折せにこそ戴かぶきませう」と申されると、「それにはもつと良い物もございませう、これは唯珍ただうらしいものですから」といつて無理におさせになられる。まことに色々いろいろに拵しらへ立ててお見上げするにつけ、生きてゐる甲斐かひがあつて、たまさかでも此のやうな人を出入りさせて御覽おんらんになるに越こすことはあるまいとお思ひになると見える。

君は元日げんじつの参賀さんかといつても、多くの所はお歩きにならず、帝みかど、春宮はるみや、一院いちいんだけで、その他は藤壺ふじうらの三條さんじやうの宮みやに伺うかがはされた。「今日は又格別かくべつにお見えになることです。年をお取りになるに連れて、氣味の悪い程ほどによくおなりになるお有様おんようさまです」と人々の愛あで申すのを、宮みやは御几帳おんきちやうの隙ひまからほのかに御覽おんらんになるにつけても、お思ひになる事が多くあつた。かのお産うの御事おんごのあるべき十二月も過ぎたが、その御様子おんごようすがないので、此の月はそれでもと、宮の人々もお待ち申し、内裏うちでもその準備じゆんびなどがあるに、何事もなくてその月も過ぎた。御物おんものの怪けのせるであらうかと、

世の人も云ひ騒ぐので、宮はひどくお心細く、此の事によつて我が身は犬死となる事であると思ひ嘆かせられると、お心持もひどく苦しくてお悩みになる。中將の君は、一段と深く思ひ合せるところがあつて、御祈の爲め御修法など、それとはなくて、所々でおさせになる。君は、世の中の定めないにつけても、此のやうに果敢なくて、何もかも終るのではなからうかと、色々の事を取集めて嘆いてゐられると、二月の十日餘りの頃に男皇子がお生まれになつたので、お嘆きは名残もなくなり、内裏でも宮の人々もお喜びを申される。宮は、帝の命長くあれとお思ひ下さるのは心憂いことではあるけれど、弘徽殿などでは咀はしいやうに云つてゐられると聞いたのに、もし空しくなつたとお聞きになるやうな事であつたら、物笑ひとなることであらうと氣を強くして、次第に少しづつ快くなつて行かれた。帝は待ち遠にゆかしく思召される事が限りもない。君も人知れぬお心からも、ひどく氣懸りに思はれて、人の居ない時に參られて、「帝がひどく覺束なく思召して入らせられますから、先づお目に懸つて奏上しませう」と申されたが、「むさくるしくて入らつしやる頃ですから」といつて、お見せ申さないのも尤もであ

る。それは全く呆れるほど、珍らしいまでに、源氏の君に生寫しであつて、紛ひやうもない。宮は御心の鬼に責められてひどく苦しく、お側の者が見ても、あのお體の様子不思議であつた頃の過ちを、何うして人が咎めずになるようか、それ程ではない、ちよつとした事でさへも、疵を捜し出す世に、何んな評判が終には漏れ出る事であらうかとお思ひ續けになると、御自分の身だけがひどくも心憂い。君は命婦の君に、たまにお逢ひになつて、ひどく悲しい事を盡して云はれるけれども、何の甲斐もありさうにない。若宮の御事を無闇に覺束ながつて仰せになると、「何だつてそのやうに無理に仰しやるのでせう。おつつけ自然に御覽になりませう」と申上げながら、心に思ふ所は、互に通りではない。君は工合の悪い事なので、十分には云ふ事が出來ず、「何うした世に、人傳でなくて申上げられよう」といつてお泣きになる様が、命婦はお氣の毒である。いかさまに昔結べる契にてこの世にかかる中の隔てぞ

〔歌意〕 何のやうに前世で結んだ宿縁で、此の世には此のやうに、二人の中に隔てがあるのであらう。(「この世」の「こ」に、「子」の意を暗示させたもの。)

かういふ事は心得かねる事だ」と仰せになる。命婦も宮の思ひ亂れてゐられる御様子を見上げ
てゐるので、はしたなく突き放すことも出来ない。

見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむこや世の人の惑ふてふ闇

〔歌意〕 見てゐられる方もお嘆きになります、見られない方も亦お嘆きになります、これこそ
世の人が、その爲に惑ふといつてゐる心の闇でございませうか。(「この世」の「こ」に「子」
の心を持たせて、「こや」を「子や」にしたもの。その上では「見て」は宮、「見ぬ」は源氏。闇
は子を思ふ意の成語。)

おかはいさうに、何方どちも心の緩む間まもないお事です」とそつと申上げた。此のやうに云つて
遣る方法もなくばかり君はお歸りになられるもの、宮は人の物いひの煩うるさいことを餘儀な
い事にお思ひになつて、命婦をも以前のやうには打解けて睦ましくなされず、人目に立たない
やうに穩かに扱はれるものの、氣に入らずお思ひになる時もあるやうなので、命婦はひどく心
細く、案外だといふ氣がすることであらう。若宮は四月に内裏うちへ參られる。日柄の割には大き
くお育ちになつて、そろそろ起きかへりなどなされる。呆れるほど源氏の君に紛れる所もない

御顔つきを、帝みかどはお思ひ寄りにもならない事なので、並ぶ者のない美しい者同志は、様子よの似
るものなのであらうとお思ひになつた。ひどく可愛がりになり、大切になさる事が限りもな
い。帝みかどは源氏の君を限りなく可愛い者に思召しながら、世間の人がお許し申しさうもなかつ
たので、東宮にもお据かゑになれなかつたのを、飽き足らず残念に思召され、臣下としては勿體
ない御様子や御容貌かたちに整つてゐられるのを御覽みになるに連れて、氣の毒に思召されるのに、こ
のやうに貴いお腹に、同じやうな光でお現はれになつたので、疵かさのない玉とお思ひになつて冊
くにつけ、宮は何方どちにつけても胸のすく時がなく、安からず物をお思ひになる。例の中將の君
が、藤壺で御遊あそびなどされるに、帝みかどは若宮をお抱だき出しになられて、「御子みこ達がだ大ぜいあるが、
其方そなただけをこれ程の時から、明け暮れに見ました。それで思ひ續けられるのだらうか、いか
にもよく似てゐます。小さい時は、皆みんなきまつてかういふものなのだらうか」と、ひどく可愛ゆい
とお思ひになつて入らせられる。中將の君は顔の色が變るやうな氣がして、怖ろしくも、忝かたじけなくも、
嬉しくも、あはれにも、いろいろに心が移つて行くやうに思へて、涙が落ちさうである。若宮

が物などいつて笑まれるが、ひどく氣味悪く美しいので、君は我が身ながらこれに似てゐたならば、ひどく可憐いかつたらうとお思ひになるのは、餘りの事である。宮はひどく工合が悪くて、汗が流れて入らせられた。中將は若宮を見て生中の氣がして、胸が搔き亂されるやうなので、退出した。二條の院に臥されて、胸の思ひは遣瀨が無いので、時を経たせて、大殿へ行かうと思ひになる。御前の前裁の、何がといふこともなく青み渡つてゐる中に、常夏が花やかに咲き出しているをお折らせになつて、命婦の君の許にお遣りになつたが、書かれる事が多いことだらう。

よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさる撫子の花

〔歌意〕 擬へながら見てゐるが、我が心は慰まなくて、もとよりの露ほさを、更に露ほくした撫子の花である。〔「撫子の花」は若宮を譬へたもの。露けさは、花の上の露と、涙の譬としてのそれを掛けたもの。〕

『花に咲かなむ』と思ひましたのも、その甲斐のない世でございましたので」とある。然るべき隙があつたのであらうか、命婦は宮にお目に懸けて、「ほんの塵ほどを、この花びらに」と

申上げると、宮は御自分のお心にも、ひどく物あはれに思はれる頃で、

袖濡るる露のゆかりと思ふにもなほ疎まれぬ大和撫子

〔歌意〕 折らうとする我が袖を濡らす露の、その縁のものと思つても、やはり疎みはされない大和撫子の花である。〔「袖濡るる露」は、罪を悲しんでの涙を暗示したもの。大和撫子」は若宮の譬。〕

とだけ、態とほのかに書いたやうなのを、命婦は喜びながら君にさし上げる。例の事なので驗もあるまいと、がっかりして嘆いて臥てゐられたので、見ると胸騒ぎがして、嬉しさにも涙が落ちた。つくづくと臥てゐられたが、遣瀨の無い氣持がされるので、例の慰めには、西の對へに入らせられる。

君はそそけてふくらんだ鬢をし、洒落れた桂姿で、笛を懐かしく吹きすさびながら覗かれると、女君は、前に見た撫子の露に濡れてゐるやうな氣持がして、横臥しになつてゐられる様が、美しくも可愛ゆい。愛嬌は零れるやうで、殿にお歸りになりながら、早く入らして下さらないのが生恨めしかつたので、いつになく横を向かれたのであらう。君は端の方にもちよつと居

て、「此方へ」と云はれるけど、女君は目を開かない。「入りぬる磯の」と口ずさんで、袖で口を覆はれた様が、ひどく洒落れて美しい。「まあ憎い、そんな事を口馴れたのですか。『みる目に厭く』はよくない事です」といつて、人を呼んで、御琴を取寄せてお弾かせになる。箏の琴は、中の細緒が保ち難くて面倒だといつて、平調に下げて調子をお調べになる。調子を合せるだけ弾いて、姫君の方へさし遣られると、姫君は恨みつづけてゐることは出来ず、ひどく美しくお弾きになる。小さい頃なので、及び腰になつて、左の手で絃を押されるその手つきがひどく美しいので、君は可愛ゆいとお思ひになつて、笛を鳴らし鳴らしお教へになる。ひどく敏くて、面倒な調子をただ一度で覚え込まれる。大體に器用で、面白みの解るお心持を、君は思つてゐた通りだとお思ひになる。ほそろぐせりといふ樂は、名は憎いものであるが、それを面白く吹き澄まされると、姫君の合奏は、また幼いけれど、拍子は違はなくて上手らしい。燈火をともさせて繪などを御覽になるに、君はお出ましにならうと云つてゐられたので、お供の人々が咳拂ひをして、「雨が降りさうでございます」と申上げると、姫君は例のやうに心細くてしほれ

られた。繪も見さしにして、俯伏してゐられるので、君はひどく可愛らしくて、御髪のいかに美しくこぼれ懸つてゐるのを撫でて、「外へ行つてゐる間は戀しいのですか」とお訊きになると、姫君は頷かれる。君は、「私も一日でも逢はない日は、ひどく苦しい。だが幼くてゐられる間は、氣樂に思つて、先づ氣むづかしく恨む人の心を損ずまいと思つて、面倒だけれど當分かうして出歩いてゐるのです。大人のやうになつて來られたら、外へは決して行きませぬまい。人の恨みを受けまいと思ふのも、長く生きてゐて貴方と思ふやうに、一しよにゐようと思ふからです」と細々とお話になると、姫君は、さすがに極りが悪くて、何うとも御返事もしない、そのまま君のお膝に凭りかかつて寝入つてしまはれたので、君は氣の毒になつて、「今夜は出ないことにした」と仰せになるので、女房は皆起つて、御食物を此方へ差上げた。姫君をお起し申して、「出なくなつた」と仰せになると、喜んでお起きになつた。一しよに物を召上がる。姫君はほんの少しばかりを上がつて、「それならばお臥みなさいまし」と、危さうに思つてゐられるので、かういふ者を見捨てては、如何に止み難い道でも赴き難いとお思ひになる。

このやうに姫君にお留めになられる折々も多いので、自然に漏り聞く人が、大殿おほいどのに申上げたので、「誰でせう、全く呆れたこともあるものです。今まで誰とも分らない人で、そのやうに纏つて戯れなどするのは、身分の高い、心憎い人ではありませんまい。内裏うちなどでちよつと関係になつた人を、立派さうにして、人が咎めようかとお隠しになつてゐるのでせう。物心の附かない、幼い人のやうに云ふのは」など、女君に仕へてゐる女房たちも云ひ合つてゐた。

内裏うちでも、さうした人があるのを聞こし召されて、「氣の毒に、大臣おとぎの嘆いてゐられる事も。ほんに物げなかつた頃から、深切にこのやうに世話をしてくれてゐる事だのに、それ程の事を辨わかへない年でもあるまいに、何だつて情なさけのない扱ひをするのだらう」と君に仰せになるけれど、君は恐れ入つた様でゐられて、御返事も申上げないので、姫君が氣に入らないのだらうと思召されて、大臣おとぎを氣の毒に思召させられる。しかし、好色すき々々しく亂れて、ここに見える女房にでも、また其方そち此方こちの人々にでも、一通りならず關係するといふやうな事は、見もしず聞きもしないやうだが、何ういふ内々たくの所を隠れて歩いて、このやうに人にも恨まれるのだらう」

と、仰せになる。帝みかどの御年は更けさせられてゐるが、かうした方はちの事はお見のがしにならせられない。采女うねづ、女藏人にょくらうどなどまでも、容貌かたちや心持のある者を、特に持てはやして入らせられるので、由のある宮任人みやづかへびとの多くゐる頃である。源氏の君は、ちよつとした戯れ言ごよでもお云ひ懸けになつたならば、受け附けない者は有りさうも無いのに目馴れてゐられる爲でもあらうか。まことに不思議な程、好色のお心が無いやうであると思つて、女房は、試たましに戯れ言ごよをお云ひ懸けなどする折もあるけれど、君は情なさけの無くはない程度に返事をされて、實際には亂れられないのを、實直で、淋しいと思ひ申上げる者もある。

年のひどく老いた典侍ないしのすけで、人柄も貴く、氣も利いてゐて、上品で、人の思はくも高くありながらひどく浮氣な心様こころさまで、そちらには重くない人のゐるのを、君は、こんないい年になるまで、何だつてああも亂れるだらうと訝しくお思ひになつたので、戯れ言ごよを言ひかけて試たまして御覽になると、女は不似合な事とも思つてはるなかつた。君は淺ましと思ひながら、さすがにかうしたのも面白くて、物を云ひなどされたのであつたが、人が漏れ聞かれたら、年寄じみた相

手のことなので、無情く扱つてゐられるのを、女はひどく辛いと思つた。この内侍が帝の御梳髪をお勤めしたが、終へたので、帝は御桂の係りの人を召して、其方にお出ましになつた時に、他には人が居なくて、この内侍はふだんよりは綺麗にして、身なりも頭つきも色めいて飾り立ててゐる様が、ひどく端手で、好色らしく見えるのを、かう年寄らしくできなくてと、氣にくはなく御覽になつたものの、何う思つてゐるだらうと、さすがに見過し難い氣がされて、裳の裾を引つ張つてそれと知らせると、蝙蝠の扇の思ひ切つて端手に描いたので顔を隠して、見返した目つきは、ひどく流し目にはしたが、臉はひどく黒ずんで凹んで、扇を外れた髪の毛もひどくそけてゐる。君は似合はない扇の様だと御覽になつて、御自分の持つてゐられるのを取換へて御覽になると、赤い紙の、此方の顔にも映る程色の濃いのに、丈の高い森の繪を、泥で塗りつぶしに描いてある。その片方に、手跡はひどく年寄風であるが、下手ではなくて、『森の下草古いぬれば』など書き散らしてあるので、書く事は幾らもある、餘りな心持だと笑まれながら、君は、『森こそ夏の』といふのらしい』と云はれて、何彼と仰せになるのも似合はしくな

く、人を見附けはしないかと苦しいのに、女はさうも思つてはゐらず、

君し來ば手馴れの駒に苅り飼はむ盛り過ぎたる下葉なりとも

〔歌意〕 君が入らしたならば、乗り馴らしてゐられる駒に苅つて飼ひませう、盛りを過ぎてゐる森の下草ではございますが。〔下葉〕は下草で、繪につけて、典侍を譬へたもの。〕

といふ様子が、ひどくも色めいてゐる。

篠分けば人や咎めむいつとなく駒馴つくめる森の木隠れ

〔歌意〕 篠を踏み分けて訪ねて行つたならば、餘所の人が咎め立てをしよう、いつといふ事もなく、絶えずも、人の乗る駒の馴つてゐるらしいその森の木下は。〔森〕は内侍の譬。〕

面倒さで行けないのだ」といつてお起ちになるのを、内侍は引き留めて「まだこれほどの嘆きをしたことはございません。今更になつて、身の恥でございます」といつて泣く様が、ひどく烈しい。「おつつけ逢はう、思ひながらの事だ」といつて、拂りはらつてお立ちになるのを、強ひて追ひ着いて、『橋柱』といつて恨みかかるのを、帝は、御桂の事が終つて、襖の中からお覗きになつてゐた。似合はない間であるといひく可笑しく思召されて、「好色心がないと思つ

て、いつも氣にしてゐるやうだつたが、さうは云つても、見過してはゐなかつた」と仰せになつてお笑ひになると、内侍は何うやら極り悪くはあるが、憎くない人ゆゑには、せめて濡衣でも著たいといふ類もあるか、ひどく言談も申上げない。人々も案外な事があるものだと言判してゐるやうなのを、頭の中將が聞きつけて、至らぬ限もない好色心から、そこまではまだ思ひ附かなかつたと思ふにつけ、内侍の盡きずにある好色心も見たくなつたので、關係を附けた。此の君も大方の人にくらべるとひどく立ち勝つてゐるのに、彼の無情い人の御代りにと内侍は思つたが、本當に逢ひたいと思ふ人は限りのあるものだとか。厭やな好みである。ひどく隠してゐるので、源氏の君はお知りになれない。内侍は君をお見附けしては、先づ恨みを申上げるので、君は内侍の齡の程が氣の毒なので、慰めてやりたいとはお思ひになるが、我慢のできない物憂さから、ひどく久しくなつたに、夕立が降つて、その名残の涼しい宵の闇に紛れて、温明殿の邊りをさまよはれると、この内侍が琵琶をひどく面白く弾いてゐた。御前でも、男方の御遊びにまじりなどして、格別な、立ち勝る者もない上手なので、もの恨めしく思

つてゐる折柄のものなので、ひどく身にしみて聞える。「瓜作りになりやしなまし」と、聲はひどく好くて謡つてゐるのが、少し氣にはない。剽州にゐた昔の人も、このやうに面白かつたのだらうかと、君は目に留つて聞いてゐられる。内侍は弾き止めて、ひどく思ひ亂れてゐる様子である。君は「東屋」を忍びやかに謡つて、倚り懸つてゐられると、内侍は、「押開きて來ませ」と此方の文句に附けて謡ふのも、女の方がいふこととて、君は例に異つた心持がされる。

立ち濡るる人しもあらし東屋にうたてもかかる雨そそぎかな

〔歌意〕 外に立つて濡れてゐる人もあるまいに、人にも懸つてゐるやうに、東屋に變な風に懸かる雨そそぎの音がすることである。(すべて催馬樂の「東屋」の言葉を取つたもの。「雨そそぎ」は、軒から落ちる雨で、源氏の君の謡つてゐた文句「うたてもかかる」は、厭やな風に、そのやうにしてゐるで、君の家へ入られないのを憎んで促す意の掛詞。)

と内侍の歎くのを、君は自分一人が引受けるべきものではないやうだが、疎ましくも何事をそのやうに歎いてゐるのだらうにと思はれる。

人妻はあなわづらはし東屋のまやの餘りに馴れしとぞ思ふ

〔歌意〕人妻は、ああ面倒だ、餘りには馴れまいと思ふ。(すべて「東屋」の言葉。「東屋のまやの」は、「餘り」の序で、すべて「東屋」の言葉。)

と云つて、君は通り過ぎて行きたいけれども、餘りに生中な事だらうかと思ひ返して、内侍の歌の心に従ふと、少しはしやいだ戯れ言などを云ひ合つて、君はこれも亦珍らしい氣持がされる。頭の中將は此の君が、ひどく實直にあり過ぎて、常に自分の好色を諫められるのが残念で、知らん顔をして、内々忍んで通はれる所が多いらしいが、何うかして見顯はさうと思ひ續けてゐたので、今宵の事を見附けた心持はひどく嬉しい。かういふ折に少しお威し申して、「懲りましたか」と云ひたいと思つて、油斷をおさせする。風が冷やかに吹いて、夜がやや更けて行く頃、君は少し微睡まれたかと思はれる様子なので、そつと入つて行くと、君は打解けては眠られないお心なので、ふと聞きつけて、この中將とは思ひ寄らず、やはり此の内侍を忘れ難くしてゐる修理の大夫であらうと思ひになると、大人らしい人に、かうした不似合な振舞をして、見

附けられる事は恥づかしいので、「ああ面倒だ。歸らう。人來るのは、蜘蛛の振舞でも分つてゐたらうに、辛くも瞞された事だ」といつて、直衣だけを取つて、屏風の後にお入りになつた。中將は可笑しいのを怵へて、君の引立てられた屏風の側に寄つて、はたはたと疊み寄せて、仰々しい音を立てると、内侍は年はしてゐるけれども、ひどく様子振つたしなやかな人で、以前にもかうした事でまごついた事が度々あるので、馴れてゐて、ひどく心は慌てたが、此の君を何のやうにおさせ申さうとするのかと思つて、苦しいので、慄へ慄へ突と中將を捉まへてゐる。君は誰とも相手に知られずに立ち去らうとは思はれるが、しどけない姿で、冠など歪めてかぶつて逃げて行く後姿を思ふと、ばかばかしい事だらうと思つて躊躇される。中將も、何うかして自分だとはお知らせ申すまいと思つて、物も云はず、ただひどく怒つた様子をして見せて、太刀を抜くと、女は、「拜みます拜みます」と中將に向つて両手を擦り合はせるので、中將はほとんど笑ひ出しさうになる。好色らしく、若作りをしてゐる表面こそは、さうも見えもするが、五十七八の人が、見えを棄てて心配し騒いでゐる様子は、云ひやうもなく美しい二十歳の

若い人達の中で、物怖ぢをしてゐる様は、何うにも不似合である。そのやうに、その人では無
 いやうにごまかして、怖ろしさうな様子を見せるけれども、君は却つてはつきり見附けられて、
 自分と知つて態とするのであると思つて、ばかばかしくなつた。中將だらうと見るとひどく
 可笑しいので、太刀を抜いて持つてゐる腕を掴まへて、思ひきりひどく掴られると、中將は殘
 念なもの、恠へられなくなつて笑つた。君は、「本當に正氣なのか、冗談もひどすぎる、どれ、
 此の直衣なほしを著よう」と云はれると、中將は確りと掴んでゐて、少しもお離ししない。「では、
 同じやうにしよう」といつて、中將の帶を解いてお取りになると、取らせまいと争つて、ああ
 かうと引つ張り合つてゐる中に、直衣なほしの綻びの所がほろほろと離れた。中將は、
 包むめる名や漏りいでむ引きかはしかく綻ぶる中の衣なほに

〔歌意〕 お隠しになつてゐるらしい評判が、漏つて立ちませう、引つ張り合つて此のやうに綻び
 た我らの中の衣なほによつて。

上うへに取り著しば著しからむ』でございます」といふ。君は、

隠れなきものと知る知る夏ごろもきたるは薄き心とぞ見る

〔歌意〕 隠れない仲であると承知の上で、ああして来たのは、淺はかな君の心だと見てゐる。

〔夏衣〕は、「著」を「來」に轉じての枕詞。「薄き」は夏衣の縁語で、淺い意。〕

と言ひ合つて、何方どなたも恨みのないしどけない姿にされて、揃つてお歸りになられた。君はひど
 く残念に、見附けられた事だと思つて臥ふてゐられた。内侍は呆れたことに思つたので、落ち殘
 つてゐた御指貫おんさしぬき、帶などを、翌朝早くお届けした。

うらみてもいふかひぞなき立ち重ね引きて歸りし波の名殘に

〔歌意〕 浦を見てもこれといふ貝もありません、立ち重なつて、引いて、沖へ歸つた波の跡には。
 「うらみ」は「恨み」、「いふかひ」は「云ふ甲斐」の掛詞。「立ち重ね歸りし波」は、「君と中將と
 の揃つて歸つた譬。〕

『底ちも露あはに』とあつた。厚顔あつかましいものだと思つても憎いけれど、大變な事に思
 つてゐるのは、さすがに氣の毒なので、

あらだちし波に心は騒がねど寄せけむ磯をいかがうらみぬ

〔歌意〕 荒かつた波には、心驚かなかつたけれど、さうさうした波を寄せた磯を、何うして呆れた浦だと思つて見ずにゐられよう。恨みずにゐられようか。〔あらだちし波〕は、頭の中將の譬。〔寄せけむ磯〕は内侍の譬。〔うらみ〕は、「恨み」の掛語。

とばかりあつた。帯は中將のものなのである。自分の直衣なほしよりは紫の色が濃いと御覽になるに、一方では自分の直衣の袖もなくなつてゐた。飛んでもない事である。出歩いて浮氣をする人は、成る程ばかばかしい事も多い事だらうと、君は一段とお心が治められる。中將は内裏うちの宿直所とほじところから、「此れを先づお綴ぢ着けさせなさいまし」といつて、物に包んでよこしたのを、何うして取つたのだらうと心外である。此の帯が取つてなかつたならば残念だつたらうとお思ひになる。それと同じ色の紙に包んで、

中絶えばかごとや負ふと危ふさに縹はなだの帯は取りてだに見ず

〔歌意〕 此れが中程で切れたならば、恨みを受けることだらうと思つて、危あぶなかしいので、この縹はなだの帯は手に取り上げてさへも見ない。〔中絶え〕は、中將と内侍との仲の切れる譬。〔かごと〕は帯の金具の「かごと」を掛けてある。縹はなだの帯は、催馬樂の「石川」の中の文句で、猶ほ歌全體に

「石川」をからませてる。

と云つてお遣りになる。折り返して中將から、

君にかく引き取られぬる帯なればかくて絶えぬることとかこたむ

〔歌意〕 君に此のやうに引いて取られた帯であるから、それで切れたのだと恨みませう。〔引き取られぬる帯〕は、奪はれてしまつた内侍の譬。〔かくて絶えぬる〕は、その爲に内侍との仲の切れたの譬。

恨みはお脱のがれになる訣には行きません」とある。日が闌たけて各殿上へ參られた。君はひどく靜かに、昨夜よべの事などは物遠い事のやうにしてゐられるので、頭の君もひどく可笑しいけれど、此方こちらも公事おほやけごとの多くを宣下せんげする日で、ひどくしやんとして、はきはきしてゐるのを御覽になるにも、互にほほ笑まれる。人の絶間に中將は君にさし寄つて、「物隠しはお懲りになつたのでせう」といつて、ひどく口惜くやくしさうに尻目をする。「何だつてそんな事があらう。來ながら唯歸つた人が氣の毒なだけです。本當は、『よしや世の中』です」と云ひ合つて、『床とこの山なる』で、互に口止くどめをする。その後は、中將はともすると事の序ついでには云ひ出して、椰揄からかひの種にするのを、君は一

段と、面倒のある女故とお思ひ知りになられることであらう。女はやはり艶に恨みかけて来るのを、君は困つたものに思つて、忍び歩きをしてゐられる。中將は妹の君にも云ひ出さず、ただ然るべき折の威しの種にしようと思つてゐた。源氏の君に對しては、高貴の御腹々の皇子達でさへ、帝のお扱ひの格別なのを煩しがつて、ひどく特別な方にして避けてゐられるのに、この中將は、決して壓倒されまひと思つて、ちよつとした事についても競つてゐる。此の中將一人だけが姫君と御同腹なのである。帝の御子といふだけであつて、自分も同じく大臣といつても、帝の御覚えは格別な人の、皇女腹であつて、此の上もなく大切にされてゐる者なので、何れ程の劣りがあるともお思ひにならないからであらう。人柄も、あつていい限りのものは備へてゐて、何の點も、かうもあらいたいと思ふだけのものは十分持つてゐられた。この御仲での競争は奇妙なものであつたが、しかし語るのはうるさい事である。

七月には后がお立ちになつたやうである。源氏の君は宰相におなりになる。帝は御讓位にならうとする御下心が近くなつて、此の若宮を東宮にとお思ひになるが、御後見をするべき人が

ゐられない。御母方はすべて皇族で、臣籍となつた源氏は攝政をなさるべき家筋ではないので、せめて藤壺の宮だけでも、動きのない様におさせ申して、東宮の御強味としようと思召されるのであつた。弘徽殿の女御は、いよいよお心が動揺される。が、お尤ものことである。だが、「東宮の御世がすぐ近くなつたのだから、疑ひない皇太后の御位である。御辛抱なさい」と仰せになられた。まことに東宮の御母として、二十年にもなられる女御をさし置いて、宮を引き越えさせる事は出来ないことだと、例の口さがない世間の人もお噂した。藤壺の宮が后として参内される夜のお供は宰相の君がお勤めになる。同じく后と申上げる中にも、先帝の后腹の皇女で、皇子は玉の光と耀いてゐられ、帝の類のない御覚えまでも添つてゐるので、人もひどく格別にお思ひ申上げる。まして君の云ひやうもないお心では、御輿の中も思ひやられて、ますます及びない心持がされて、飛び立つやうである。

盡きもせぬ心の闇にくるるかな雲居に人を見るにつけても

〔歌意〕 盡きる時のない心の闇に、我も暗くなつてゐることである、雲居の高きに昇られた人を

見るにつけても。「つき」、「闇」、「雲居」など縁語。

とばかり獨語たれて、ひどく物哀れである。皇子は御生長になる月日と共に、源氏の君と見分け難いやうであるのを、藤壺の宮はひどく苦しくお思ひになるけれども、それと思ひ寄る人は無いやうである。まことに何のやうに作りかへたからとて、源氏の君に劣らない様が此の世に出るといふことがあらうか。月日の光が空に似通つてゐるやうに世間の人は思つてゐる。

註

加陵頻迦——極樂淨土にすむ不死鳥。

垣代——青海波の舞人の廻りに、垣の如く樂人の立ちならび吹奏するをいふ。

入綾——舞樂終つて入らうとして、又取つて返して舞ひ入ること。

一院——桐壺帝の父帝。

花に咲かなむ——わが宿にまきし撫子いつしかも花に咲かなむよそへても見む。

いりぬる磯の——潮満てばいりぬる磯の草なれや見らくすくなく戀ふらくの多き(萬葉)

みる目に厭く——伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよしもがな(古今集)

森の下草老いぬれば——大あらしの森の下草老いぬれば駒もすさめず駒る人もなし(古今集)

森こそ夏の——郭公きなくを聞けば大荒木の森これ夏のやどりなるらし(拾遺集)

橋柱——津の國のながらの橋の橋柱古りぬる身こそ悲しかりけれ。

瓜作りになりやしなまし——山城のこまのわたりの瓜つくり、なよやらいしなや、さいしなや、

瓜作り、はれ。瓜作り我をほしといふ、いかにせんいかにせん、はれ。いかにせん、なりやしなま

し、うりたつまでに、やらいしなや、うりたつまでに(催馬樂山城)

押開きて來ませ——東屋のまやのあまりの雨そそぎ、われ立ちぬれぬその戸開かせ。かすがひも

戸ざしもあらばこそ、その戸われささめ、押開きて來ませ、われや人妻(催馬樂東屋)

上に取り著ば著からむ——紅の濃染の衣下に著ん上に取り著ばしるからむかも(古今六帖)

底も露はに——別れての後ぞかなしき涙川底も露はになりぬと思へば。

石川——石川のこまうどに帯をとられてからき悔いする、いかなる帯ぞはなだの帯の中は絶えたる

(催馬樂)

よしや世の中——人言はあまの苜藻に、しげくとも思はましかばよしや世の中(古今六帖)

床の山なる——犬上の床の山なるいさや川いさと答へてわが名洩らすな。

花

宴

二月二十日餘りに、紫宸殿の花の宴をお催しになる。后と東宮との御部屋は、東と西とにしてお上りになられる。弘徽殿の女御は、中宮が此のやうにしてお出でになるのを、何ぞの事のある場合には心外な事に思召されたが、物見の今はお見合せになることが出来ずにお上りになる。日はよく晴れて、空の様子、鳥の聲も氣持がよいのに、親王たち、上達部を始めとして、その道に携はつてゐる人々は、すべて韻字を賜はつて詩をお作りになる。宰相の中將の、「春といふ文字を賜はりました」と仰せになる聲までが、例のやうに他の人とは別である。次ぎに頭の中將は、人の注目することも一通りではないとお思ひになるであらうが、ひどく見よく落着いて、聲づかひなども尤もにして、立ち勝つてゐる。その外の人々は皆臆しがちにして鼻白んでゐる者が多い。地下の文人に至つては一段のことで、帝も東宮と御學才が賢くすぐれて入らせられて、此の方面に極めてすぐれてゐる人が多い頃なので、恥づかしく思つて、遙と曇りのない庭に立ち出るのが工合が悪くて、詩作などたやすい事であるが苦しうにしてゐる。年老いた博士どもの、身なりが見すばらしく衰れて、例も見馴れてゐるものもあはれ

で、帝はその様々を御覽になるのが興のあらせられることであつた。音楽などは云ふまでもなく整へさせてお置きになつた。次第に入り日になる頃に、春鶯囀といふ舞がひどく面白く見えるので、源氏の君の御紅葉の賀の折の事をお思ひ出しになつて、東宮は挿頭を賜はらせて、深くお勧めになるので、辭退が出来なくて、君は立つて、緩かに袖を翻す所だけを、一疊だけ、その趣を舞はれたが、似るべき物もなく見える。左大臣は君に對しての恨めしさも忘れて、感涙をお落しになる。帝は、「頭の中將は何うした、遅い」と仰せになるので、柳花苑といふ舞を、これは源氏の君よりは今少し多く、かういふ事もと思つて用意をしてあつたのであらうか、ひどく面白く舞はれたので、帝は祿として御衣を賜はつたが、この事をひどく珍らしい事に人が思つた。上達部もみな入り亂れて舞はれたが、夜に入つては取立てては上手下手の差別も見えない。詩を講じるにつけても、源氏の君の御詩をば、講じ続けることが出来ず、一句一句誦しては感じて騒いでゐる。その道の博士どもの心でも、すばらしいものと思つた。かういふ時にも、第一に此の君を光とされるのであるから、帝も何うしておろそかに思召されよう。中宮

も御目が留まるにつけても、東宮の御生母の女御の、無闇にお憎しみになるのも不思議に、御自分のさう思ふのも心憂いことだと、自身お思ひ返しになられる。

大方に花の姿を見ましかば露も心のおかれまじやは

〔歌意〕 大凡に、深くも思はずして花の姿を見るのであつたならば、少しでも、その花につけての雨風などを心に懸けるやうなことがあらうか。「花の姿」は源氏の君の譬。「心置かれ」は、自身に責められる事を暗示したもの。「露」「おく」は「花」の縁語。

これはお心の中だけの物であつたらうが、何うして此のやうに漏れ傳はつたのであらう。夜がいたく更けてその事は終つた。上達部は各退散し、后、東宮もお歸りになつたので、邊りはのんびりとなつて來たに、月がいかにも明るく出て來て面白いのを、源氏の君は酔ひ心地から見過し難いものに思はれたので、殿上の人々も休んでゐる、かうした思ひ懸けない時に、もし然るべき隙もあらうかと、藤壺の邊りをひどく忍んで、窺つて歩いたけれども、相談をするべき人の戸口は皆閉してあるので、歎息して、それでも此のままにはと思つて、弘徽殿の細殿に立ち寄

られると、三の口が開いてゐる。女御は上の御局に、紫宸殿からすぐに參られたので、人少ない様子である。奥の方の樞戸も開いてゐて、人の聲もしない。かういふ風にして置くので世の中の過は起るものだと思つて、君はそつと長押の上へ昇つて、奥の戸を覗いて見られる。人はすべて寝てゐるやうである。ひどく年若な、美しさを思はせる聲で、おしなべての人とは聞えない聲で、「おぼろ月夜に似るものぞなき」と誦しながら、此方の方へと來ることだ。君はひどく嬉しくて、ふとその袖を捉へられる。女は怖ろしいと思つた様子で、「おお氣味が悪い、誰れ」と云はれるが、君は、「何を疎ましいことがあらう、

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろげならぬ契とぞ思ふ

〔歌意〕 春の深夜のあはれを知つてかく歩かれるは、我と臈ろげではない宿縁のある爲と思ひます。「入る月の」は「おぼろ」の枕詞。「契」は前世の宿縁。

といつて、そつと長押から抱き下して、奥の方の戸は押閉てた。女の餘りの事に呆れてゐる様が、ひどく懐かしくも美しい。慄へ慄へ、「ここに人が」と云はれるが、「私は皆から許されて

ゐる者だから、召寄せられたからつて何でもありません。黙つて聲を立てずに入らつしやい」といはれる聲で、女はこの君なのであると聞き知つて、少し慰められた。困つたことだとは思ふものの、情の無い剛々しい風は見せまいと思つた。君は酔ひ心地が例のやうではなかつたのであらう、女を放してやるのは残念であるに、女も若く、心柔らかで、強い心は知り得ないのであらう。可愛らしいと見られるに、間もなく夜が明けて行くので、心が慌しい。女はまして、さまざまに思ひ亂れてゐる様子である。君は、「やはり名を仰つしやい、何うして音信をしませう、これきり止めようとは、それだからつて思つてはゐないでせう」などと云はれると、

憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば訪はじとや思ふ

〔歌意〕 私の憂き身がそのままに死んだならば、捜し尋ねて、その葬られた草の原は訪はうとはお思ひにならないのですか。「消え」、「草」は暗示した「露」の縁語。

といふ様が艶で、なまめいてゐる。君は、「尤もです、云ひ損つた言葉でした」といつて、

何れぞと露の宿りを分かむ間に小笹が原に風もこそ吹け

〔歌意〕 何處がそれであるかと、露の宿りを捜してゐる中に、その小笹が原に風が吹いて、露がこぼれて、まるきり分らなくなつてしまひませう。「露」は女の譬で、女の歌を受けたもの。

面倒だとお思ひになることになかつたら、何だつて包むことがありませう、それとも嘯されるのですか」と云ひ切らない中に、人々は起き出して騒ぎ、上の御局に女御の御迎へに参りちがふ様子が、音繁く聞えるので、何うにも餘儀なく、扇だけを印に取り換へて君はお出になられた。桐壺には人々が大勢詰めてゐて、目を覺ましてゐる者もあるので、君のお歸りになられたのを、いかにも絶間のない御忍び歩きではあると突つき合つて空寝をし合つてゐた。お部屋に入つてお臥みになられたけれど、眠られない。可愛ゆい様の人ではあつた、女御のお妹であらう、まだ情事に馴れてゐられない所は、五か六の君であらう、帥の宮の北の方、頭の中將の好かれない四の君などは、すぐれてゐると聞いた、却つてその人たちであつたら、今少し美しいことであらう。六の君は東宮に奉らうと志してゐられるが、それであつたらお氣の毒なこ

とになる訣である。煩はしくて何の君と尋ね出す事も紛らほしい、それにしても此れきりで絶えようとは思はない様子であつたのに、何だつて音信を交す方法を教へなかつたのだらうなどと、様々に思ふのもお心が留まつたからであらう。このやうな事につけても、藤壺の邊りの有様は、格別にも奥まつてゐたことであつたと、貴いものに思ひ較べがなされる。

その日は後宴の事があつて、君は取紛れて暮された。君は箏の琴をお弾きになつた。昨日の事よりもなまめかしくて面白い。藤壺は曉に上の御局にお上りになつた。君はかの有明の月に似た人が禁中を出るであらうかと、心も空になつて、心の行き届かない隈とては無い良清と惟光とを、その殿に附けて窺はせられたが、君の御前から退出した時に、「唯今北の陣から、前から隠れに立ててありました車が退出いたします。御方々のお里の人が居られます中に、四位の少將だの右中辨などが、急いで出て來られてお見送りをされた車は、あれは弘徽殿からの御退出であらうと御見受けしました。悪くはない御様子が目に着きまして、車も三つ程ございました」と申すにも、君は胸のときめく氣がされる。何のやうにして何の君と知らうか。父の

大臣が聞きつけて、改まつての待遇などをされるやうだつたら、何んなものであらう、まだ女の有様をよく見定めない中は、それも煩はしからう、さうかと云つて誰と知らずにゐるのも亦残念なことだらうから、何のやうにしようと思ひ煩つて、つくづくと案じて臥てゐられる。

姫君も何んなにか徒然であらう、逢はないのも幾日にもなるので、萎れてゐることだらうと、可愛ゆく思ひやられる。

かの印の扇は、櫻の三重がさねで、金の濃い蘇芳の方に、霞んだ月を描いて、それを水に映した意匠は、見馴れた物であるが、嗜みの程がなつかしく持ち馴らしてある。『草の原をば』といつた様ばかりが心に懸るので、

世に知らぬ心地こそすれ有明の月の行方を空にまがへて

〔歌意〕 全く見當のつけられない心持ばかりしてゐる、有明の月の行方を、空に紛らし見失つてしまつて。「有明の月」は女君の譬。

と書き添へられて、さし置かれた。

大殿おほいどのへ行いかれないのも久しくなると思はれるけれども、若君わうきみの方が心苦しいので、すかさうと思つて二條院へお出でになつた。見てゐる間にひどく美しく育つて、愛敬あいけいがつき、功者こうしやな心持こころもちがいかにも格別かくべつである。我が氣に入るやうに教へ立てようとお思ひになるに叶ふことであらう。男のお教へであるから少し男馴おとこなれた事がまじらうかと思ふのがお氣懸りである。此頃中のお話やお琴を教へるのに暮らしてお出ましになるのを、例の事だと口惜しくお思ひにはなるが、今はもうよく馴らされて、無闇むぐみに慕まほひ纏まとはりはなさらない。

大殿おほいどのでは、女君が例のやうに直ぐには對面をなさらない。君は徒然つれづれと様々さまざまの事を思ひまはされて、箏の琴をまさぐつて、『柔らかに寝る夜はなくて』と謡つてゐられる。大臣おとぎがお越しになつて、一日の興のあつた事を申される。『多くの齡を重ねて、明王めいおうの御代みよの四代を見ましてございますが、今度のやうに、詩に秀句が多く、舞、樂がく、物の音ねの揃そろひまして、命いのちも延びるやうな事はございませんでした。道々みちみちの上手の多い頃でございますが、委しく御存じの上で、お選えらびになつたせるかと存じます。この翁おきなも何うやら舞まひ出いしさうな心持がいたしました』と申され

ると、君は、『特別にお選えらびになつたのではございません、ただつい通りに、隠れてゐる物の師を、ここかしこで尋ねたのでございます。何よりも柳花苑りゅうかえんが、後代こうだいの例れいともなるものと拜見はいけんしましたが、まして貴方あなたが榮さかえ行く春にお舞まひになりましたら、世の面目となつたでございませう』と申される。辨はなや中將ちゆうじやうなども参り合せて、勾欄こうらんに背中を凭たせながら、それぞれに物の音を合奏して遊ばれる。いとも面白い。

かの有明の月であつた君の方は、はかなかつた夢を思ひ出して、ひどく嘆かはいやうに物案ものあんじをしてゐられる。東宮とうきゆうに参ることは、四月頃と腹はらづもりをされてゐるので、どうにも餘儀あまなくて思おもひ亂れてゐられるに、男おとこの方も、確ためようとすれば手が着きけられない事はないが、何なにの君とも分わらなくて、殊ことに出入りの許ゆるされない邊あたりに拘かづらふのも、様ようの悪い事なので躊躇ちゆうちゆうしてゐられると、三月の二十日餘りに、右の大殿みぎのだいどのの弓ゆみの結むすに、上達部じやうたつたべや親王みこ達を大勢お集めになつて、續ついて藤の花の宴うたげをされる。櫻の花の盛りは過ぎたが、『外の散ちりなむ』と教へられたのであらうか、遅おそれて咲く櫻の二本がひどく面白い。新しく造られた殿とのを、姫宮ひめみや達の御裳おんち著ぢの

日に磨き飾られてあつた。派手やかになさる殿の風で、何事も當世風になされた。源氏の君にも、一日内裏で御對面の序に御案内を申されたが、お出でにならないと残念で、事も引き立たないと思はれて、おん子の四位の少將をお迎へに差遣はした。

我が宿の花しなべの花ならば何かは更に君を待たまし

〔歌意〕 私の宿の櫻が、もし普通の花でしたら、何だつて改めて貴方をお待ち申しませう。

君は禁中にお出でになつた時で、その歌を帝に奏せられる。「得意な様子だ」とお笑ひになつて、「態々との迎へのやうだ、早く行け。女皇女達も生まれる所だから、他人のやうには大臣も思つてはゐまいに」など仰せになる。君は御装ひなども繕ひ立て、すつかり暮れた頃に、待たれてお越しになられる。櫻の唐の綺の御直衣に、葡萄染の下襲をされ、裾を長く曳いて、すべての人は袍であるのに、洒落れた大君姿のなまめいた風をして、敬はれてお入りになられる様は、まことにひどく懸け離れてゐる。花の色艶までも壓しられて、却つて事覺ましである。遊びなどひどく面白くされて、夜の少し更けて行く頃に、源氏の君はいたく酔はれた振りをさ

れて、その座を紛れてお起ちになつた。寢殿に女一の宮、女二の宮の入らせられる、その東の戸口にお出でになつて、凭りかかつてゐられた。藤の花は此方の屋のつまに當つてあるので、御格子を上げ渡して、女房たちが出てゐた。袖口など、踏歌の折のやうに、態とらしく御簾の外に出してゐるのを、君は似合しからず思はれ、先づ藤壺の邊りのゆかしさをお思ひ出しになる。「惱ましいのに、何うにもひどく強ひられて、困つてしまつてゐます。恐れ多いことですが、この御前だけは、蔭にお隠し下さることせう」と妻戸の御簾を引き掲げて引被がれりと、女房の聲で、「まあ面倒な、良くない者だけが、貴い方に因縁をもとめるのでございませう」といふ様子を御覽になると、重々しくはないけれど、並々の若女房たちではない。上品に美しい様子がはつきり分る。空薫物がひどく煙い程にくゆつてゐて、衣摺れの音をひどく陽氣にさせてゐて、心憎く奥ゆかしい様子は劣つて、當世風の事を好まれる邊りで、貴い御方々が物見をされるといふので、此の戸口を占めてゐられるのらしい。さうはすまじき事であるが、君はさすがに面白くお思ひになつて、彼の人はいは此の中の何れであらうと思ふにも、胸がときめきし

て、「扇を取られて辛き目を見る」と、態とおどけた聲をして謡つて、凭りかかつてゐられた。「變な、風の變つた『高麗人』ですこと」と、謡について答へるのは、その心を知らない女房であらう。答へはしなくて、ただ時々溜息をつく様子にする方へ凭りかかつて、君は几帳越しにその手を捉へて、

梓弓いるさの山に惑ふかなほの見し月の影や見ゆると

〔歌意〕 私は入佐の山で惑つてゐることです。ほのかに見た月が、又も見えるかと思つて。「梓弓」は「いるさ」の「い」に係る枕詞。折柄の弓の結の縁のもの。「月」は女君の譬。

何ういふ訣でせう」と推量でいはれるのに、女君は怵へられないのであらう、

心いる方ならませば弓張の月なき空に迷はましやは

〔歌意〕 もしお心に沁み入つてゐる山でございましたら、はつきりとお確めになれる事で、そのやうに月の無い空に迷ふやうな事はごさいますまい。「心いる」は、心も月と共に入る意と、私といふ者が氣に入るを掛けたもの。「月なき空」は、月の入つてしまつた後の空と、似合はしくない所の意とを掛けたもの。

といふ聲は、まさにその女の聲である。ひどく嬉しくは思ふものの。

註

一疊——舞曲の一節。春鶯囀は十四疊に分れてゐる。

おぼろ月夜に似るものぞなき——この歌上句「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の」(新古今集)

柔らかに寝る夜はなくて——ぬき川の瀬々の小すげのやはら手枕、やはらかにぬる夜はなくてお

やさくるつま(催馬樂 貫川)

扇を取られて辛き目を見る——石川の高麗人に帶をとられて、からきくいする云々(催馬樂 石

川)

高麗人——同上。

葵

帝の御讓位の後は、君は萬事もの憂く思はせられ、又御身の貴さも添つた爲であらうか、輕々しい御忍び歩きも謹まれて、ここにも彼所にも覺束ない嘆きを重ねさせられる。その報いなのか、やはり御自分につれない方のお心を、盡きずに嘆いてのみられる。帝には今は以前にもまして絶間もなく、普通の者のやうに中宮に添つてゐられるのを、弘徽殿の新后は心やましく思はれるのか、内裏にばかりゐらせられるので、中宮は立ち並ぶ人がゐなくて心安さうである。院には季節季節に従つての御遊びを好ませられ、世に響く程になされなされるので、今の御有様の方が結構である。ただ東宮だけを戀しくお思ひになられる。御後見のないのを氣懸りに思召され、源氏の大将の君に萬事をお任せになるにつけても、君は工合悪く思ふもの嬉しくお思ひになる。

ほんに、彼の六條の御息所のお腹の、前の東宮の姫宮が、伊勢の齋宮に立たれたので、御息所は、大将のお心持がひどく頼もしくないのに、宮の此のやうに幼い御有様なのが氣懸りだといふことにかこつけて、御一しよに伊勢へ下らうかと豫てからお思ひになつてゐた。院にはか

うした事を聞こし召されて、君に、「故宮がひどく大切にされ、御寵愛になられたのに、輕々しく、普通の人のやうに扱つてゐるのは、お可哀さうなことです。齋宮も皇子と同然に思つてゐるのだから、何方につけても粗略にしない方がよからう。われ面白の心で、そのやうに浮氣な眞似をするのは、ひどく世間から悪く思はれることです」など、御氣色が悪いので、君は自分のお心でも、如何にもと思ひ知られるので、畏まつてゐられる。「先方にも恥をかかせるやうな事はし、何方も角立てないやうに扱つて、女の恨みを受けないやうになさい」と仰せになるにつけ、我が怪しからぬ心からの勿體ない事件をお聞きつけになつた時はと思ふと怖ろしいので、畏まつて君は退出された。君は又、かく院に聞こし召して仰せになるにつけ、御息所の御評判としても、御自分の御爲としても、好色らしく、お氣の毒なので一段と御息所の御身分が貴く、心苦しい筋合ひの事とお思ひ申すが、まだ表だつた改まつてのお扱ひはしない。女君も似合はないお年の程を恥づかしく思つて、打解けない御様子なので、君はそのお心持を受け入れた恰好をされてゐるので、女君は院にも既にお耳に入り、世の中の人知らない者はなくなつた

のに、君の深くは思つて下さらないお心の程を、ひどくお嘆きになつてゐた。

かういふ事をお聞きになるにつけても、あさがほ 權の姫君は、何うか自分には似まいと思ふので、君に對してかりそめのやうでしてゐられた御返事も、今は殆どない。さうかと云つて、見た目の悪い、はしたないお扱ひはなさらないその御様子を、君はやはり人とは異つてゐるとお思ひ續けになる。

おほいどの 大殿では、君の此のやうに浮はつてばかりゐられるお心を、氣に入らなくは思はれるけれど、餘りにも謹しみのない御様子を、云ふも詮ない事とされてゐるからでもあらうか、深くはお恨みも申さない。御懷妊の爲の氣づかはいい様でのお悩みもあるので、心細いやうな氣がされてゐる。君は珍らしくも哀れにもお思ひになつて、嬉しいものの、誰も誰もゆゆしい事にお思ひになつて、女君に御謹しみをなさせになる。かうした間は、君も一層にお心に暇がなく、思ひ怠るといふではないが、御息所に途絶えの多いことであらう。

その頃賀茂の齋院もお下りになつて、弘微殿の後腹の女三の宮が代りにお立ちになつた。帝

も後もひどく格別にお可愛がりになられる宮なので、人離れのした事におなりになるのをひどく苦しく思召されたが、他の宮には然るべき方がゐられられない。儀式などは、定めのある神事であるが、厳めしく騒いでゐる。祭の頃は、定めのある一通りの事に添へてされる事が多くて、見る物が此の上なくなる。人によつての事と見える。御禊の日は、勅使としての上達部の數も定まつてゐてお仕へ申す事であるが、院の御覺えの格別な、容貌の勝れた者ばかりを選ばれ、下襲の色、表袴の紋、馬や鞍に至るまで、皆整へられた。取り分けての宣旨で、大將の君もお仕へ申される。人々は豫てから物見車を心づかひした。一條の大路も空いた所もなく、氣味の悪いまで騒いでゐる。所々に設けてある御棧敷は、心々に手を盡しきつた裝飾で、見物の人の袖にまでも大した見物である。大殿では、さうした物見の御歩きは殆どされない上に、御氣分も惱ましいので、思ひ懸けもなさらなかつたのに、若い女房連は、「さあ、私共ばかりで、隠れて拜見するといふことは引き立たないこととございませう。大凡の人でさへも、今日の物見には、第一に大將殿をと思つて、賤しい山賤までもお見上げ申さうと思つて、遠い國々

からみんな妻子つまこを連れて参りますのに、それを御覽にならないのは、いかにも餘りでございませう」といふのを、大宮がお聞きになつて、「お心持も悪くない折柄です。お仕へしてゐる人達もさみしいやうです」と言はれて、俄にそち此方こちにお供を仰付けになつて御覽になる。日が闇けてに、様子も改まつてではない様でお出ましになつた。隙間すきまもなく物見事が立ち續いてゐるので、美々びびしく引き續けてゐるのを、立て煩はれる。よい女房車にようぼうぐるまが多いので、車添くるまぞひの雑ざつ人の居ないのを見定めて、皆立退みななかせる中に、網代車あじろぐるまの少し古びたもので、下簾したすだれの様子などは由ありさうに見えて、人はひどく忍んで、ほのかに見える袖口、汗衿かきみなどは、色がひどく清らかで、殊更に寢してゐる様子のはつきりと分る車が二つある。その雑人ざつじんは、「これは決して、そのやうに立退かせなどする御車ではない」と強く云ひ張つて手を觸れさせない。何處どこであつても、若い者どもが酔ひ過ぎての上で立ち騒いだ間の事は、認めしたきれないものである。大殿おほいどのの前驅まへぐりの中でも、年をした人々は、此れ此れだと云ふけれども、制しきれない。齋宮いはいのみの御母おほいどのの御息所おほいどのが、思ひ亂れてゐられる慰めにもなるかと、忍んでお出ましになつてゐるのである。平

氣な様を装つてはゐたが、自然にそれと知れた。大殿の人々は、「それ程の人ならばさうは云はせるな。大將殿を豪家ごうけとは承知してゐるだらう」などといふを、源氏の君の御方の人々もまじつてゐて、お氣の毒とは思ひながら、最眞ひいきをするのも面倒なので知らん顔をしてゐる。たうとう大殿のお車が立て續いたので、御息所のお車は、その女房車の奥おくの方に押遣おしやられて物も見えない。心の安からぬのはもとより、かうして寢してゐるのをそれと知られての上の事なので、御息所はひどく残念で限りもない。お車の榻しこなどもみんな折られたので、そこにある何といふこともない車の轂こに持たせ懸けたので、又となく様が悪く、口惜くちせしく、何しに來たのだらうと思つても甲斐もない。物も見ずに歸らうかとされたが、お車を通して出る隙すきもないのに、「お通りです」と人がいふと、さすがに辛い人の御前渡りをされるのの待たれるのも、心弱いことである。ここは『ささの隈』でさへも無い爲であらうか、君のつれない様で過ぎて行かれるにつけても、却つてお氣の揉めることである。まことに平生よりも好みも多く、整へもしてある車どもに、女房たちの我も我もと乗りこばれてゐる、その下簾したすだれの隙間すきまなども、君はそれとは

ないやうであるが、微笑み微笑み尻目に留められるのもある。大殿のお車はそれとはつきりしてゐるので、眞顔になつて過ぎて行かれる。君のお供の人々の、そのお車に對して畏まつて、敬意を示し示し通つて行くのを見るにも、御息所は御自分の壓倒された様をひどくお思ひになる。

影をのみみたらしの川の流れなきに身のうき程ぞいとど知らるる

〔歌意〕 姿だけを見せた御手洗川の流れなきで、我が身の憂いのが、一段とひどく思はれることである。「みたらし」の「み」は、「見」の掛詞。「みたらし川」は源氏の君の譬。「うき」は「泥」の意で「川」の縁語。

と涙のこぼれるのを、人の見る目も工合が悪いかれども、目もあやな源氏の君の御様や容貌の、一段と装り映えのなさるのを、もし見なかつたならばとお思ひになる。身分身分につけて装束をしてゐる人の有様の、何れも極めてよく整へてゐると見える中にも、上達部はひどく格別であるが、それも此の君一人の御光の爲に消されたやうである。大將の假の隨身を、殿上

の將監などがするのは普通の事ではない。珍らしい行幸などの折のことなのに、今日は右近衛の藏人の將監がお勤めした。普通の御隨身どもも、容貌も姿も眩ゆいまでに整へて、君の世に大事にされてゐる様は、木草でも靡かないものはないやうである。壺装束などといふ姿をした女の、賤しくない者や、又尼などの世を背いてゐる者までも、轉びつこけつしながら物見に出て來てゐるのも、平生は餘りの事だ、ああ厭やと見えるのに、今日は尤もで、口のすぼんだ、髪を著籠めてゐる賤しい女どもの、掌を合せて額にあてて、君をお見上げしてゐるもあれば、ばかばかしいやうに見える賤しい男も、自分の顔の何んな風であるかも知らずに、にこにことしてゐる。君は何の注意もなさらないやうな、生受領の娘などまでも、心の限り飾り立てた車に乗り、様を殊更にし、様子をつくつてゐるなど、面白い様々な見物であつた。まして此所彼所の、忍んでお通ひになる所々の人は、人知れず我が身の物の數ではないといふ嘆きをする者も多くあつた。式部卿の宮は棧敷にいらせられた。何うも眩いまでに整つて行く容貌である。神などは目を留められる事だと、氣味悪くお思ひになつた。姫君の櫛の宮は、君の年來申し續

けられてゐる懇ろさの、世の人には似ないのを、いい加減の人であつたからとて心が動かされる、まして此のやうに美しくは何うしてお生まれになつたらうと思つて、お心が留まつた。けれどひどく身近い状態で見られようとはお思ひ寄りにならない。若い人々は、聞きにくいまでに源氏の君を愛で申し合つてゐた。

祭の日には大殿では物見をなさらない。大將の君は、あのお車の場所争ひの事をお話し申上げる者があつたので、ひどく御息所をお可哀さうに思はれて、やはり女君の、折角に重々しくてゐられる人ではあるが、情が足りなくて、嚴めしい所が添つて來られる餘りに、御自分ではそれ程には思はれないであらうが、さうした、御息所との間柄などは、情を交すべきものとも思つてゐられない、そのお心掟に従つて、次ぎ次ぎの附添ひの、良くない者のさせた事なのであらう。御息所はお心持の、此方が極り悪く思はれる程で、由のあられる方だから、何のやうにか心の中で慍つてゐられるだらうかとお氣の毒で、君は訪ねてお出でになつたけれども、御息所は、齋宮がまだ以前の宮に入らせられるので、神事の障りになると託つけて、心やすく御對面もなさ

らない。君は尤もだとはお思ひになりながら、「何だつてかうであらう、此のやうにお互に角を立てなくて入らつしやい」と、獨りでお呟きになられる。

今日は君は二條の院に、おいでになつて、祭見にお出ましになる。西の對にお越しになられて、惟光に車の事を仰せになつた。「女房も出懸けるか」と女の童に云はれて、姫君のひどく美しく繕ひ立ててゐられるのを、打笑んで御覽になられる。「君はさあお出懸けなさい、一しよに物見をませう」といつて、姫君の御髪いつもより綺麗に見えるのを撫でられて、「久しく剃がれないやうだが、今日は吉日らしい」と云つて、曆の博士を召して、それをする時を問はせられる間に、「先づ女房が出懸けなさい」と云はれて、女の童の姿などの美しいのを御覽になる。ひどく可愛らしい髪の裾を、誰もみんな綺麗に切り揃へて、浮紋の袴に懸つてゐる所がくつきりと見える。君は、「君の御髪は私が削いであげよう」といはれて「何うにも煩いほどに多いことだ。何んなに伸びて行くことだらう」といつて、先を切り揃へ煩はれる。「ひどく長い人でも、額髪は少し短いものやうだが、まるきりさうした毛のないのは有り過ぎて、情のないや

うな氣がする」と云つてそこも手を入れて、削ぎ終られ、千尋にいつてお祝ひになるのを、少納言は身にしみて忝けないと思つてお見上げする。

はかりなき千尋の底の海松房の生ひ行く末は我のみぞ見む

〔歌意〕 測り知られぬ千尋の海の底に生える海松房のやうに、伸びて行くこの髪みづみの將來は、自分だけが見よう。「海松」は髪削ぎの調度の中の一つとされてゐたもの。

と君がお詠みになると、

千尋ともいかでか知らむ定めなく満ち干る潮ののどけからぬに

〔歌意〕 千尋といはれるその深さなど、何うして分りませう、定まりもなく満ちたり干たりする潮しほの落着きのない海ですもの。(源氏の君を海に譬へ、通はれる所の多いのを「潮」に譬へたもの。)

と詠まれて、紙に書き附けてゐられる姫君の様の、物馴れた恰好ではあるものの、幼なげに可愛らしいのを、愛でたいと御覽になる。今日も物見車は立てる所もなく混んでゐる。馬場の乙殿屋とどの所で、君は立て煩つて、上達部の車が多くて、物騒がしい邊りだと躊躇してゐられると、車から扇を差し出して、君のお供の者を招き寄せて、「ここにお立たせになりませんか。場

所をお譲り申しませう」と申上げた。君は何うした好色者であらうと思はれて、場所もいかに良い所なので、お車を引き寄せさせて、「何うして得られた場所かと羨ましい所です」と仰せになると、由ある扇の端を折つて、

はかなしや人のかざせる葵ゆる神のしるしの今日を待ちける

〔歌意〕 果敢ないことです、餘所の人のかざしてゐる葵なので、それを、神に祈つた験で、我が葵かと思つて来たことです。「葵」は賀茂の神の祭には誰も必ず挿頭したものです。それに「逢ふ日」を掛けてある。二三句は、君の他の女の逢ふ日となつてゐられる意。四句は、今日の祭にからませたもの。

注連しめの内の者となつてゐられたのでは」とある。手跡を思ひ出すと、かの源の典侍ないしつすけなのである。呆れるまでも年寄りになれずに、若い心を持つてゐることだと、憎いので、素氣なく、

かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人やそぢびとになべて葵を

〔歌意〕 それを挿頭してゐる心が、浮ついたものに思はれる、八十の氏の人のおしなべての物となつてゐる葵だので。「葵」に「逢ふ日」を掛け、典侍の多くの人を通はせてゐることを暗示

したもの。

女は恥づかしいと思つた。

口惜しくも挿頭しけるかな名のみして人頼めなる草葉ばかりを

〔歌意〕 口惜しくも私は挿頭したことでございます、葵といふ名ばかりで、實は空頼みをさせる草の葉といふだけなものですのに。「葵」に「逢ふ日」を掛け、それを「草葉」と言ひかへたもの。

と申上げる。君の人と相乗りして、簾を上げることさへなならないので、妬ましく思ふ人が多くあつた。一日の御有様の立派であつたのとは違つて、今日は亂れた様でお歩きになる。誰であらう、乗り並んでゐる人は悪い人ではなからうと、人々は推量り申す。君は張り合ふ心を起させない挿頭争ひであると、さみしく思はれるけれども、あのやうにひどく厚顔しい人では又、人が相乗りをしてゐるのに遠慮されて、果敢ない御答へも、心安くするのは極り悪いことであらう。

御息所は嘆き亂れられることが、この年頃よりも多く添つて來た。源氏の君のお心を辛いものとお思ひ切りにはなつたが、これを限りと、振り離れて伊勢へお下りになられるのは心細いやうで、世間の人聞きも笑ひ物になることだらうと思ひになる。さうかと云つて踏みとどまるやうに思ひ返さうとすれば、あのやうに此の上もない様に、すべてから見下げられるやうなものも安くは無く、『釣する海人のうけなれや』と、起き臥しにつけ、思ひ煩つてゐられる爲でもあらうか、お心が身に添つてゐないやうにお思ひになつて、惱ましくしてゐられる。大將殿には伊勢へ下られる事を、飛び離れた、有るまじき事とまでもお妨げにはならない。「數ならぬ身を見るに憂く、思ひ棄てようとなさるのも御尤もではございますが、今はやはり、云ふ甲斐のないにしても御覽じ果てて下さるのが、契りの浅くないことでございます」と文の上で云ひかかづらはれるので、定めかねてゐるお心も慰まうかとお出懸けになつた祭に、禊川の荒かつた瀬に逢つて、一段とすべての事がひどく憂く、焦れたくお思ひになつた。

大殿では、御物の怪のやうな風で、ひどくお煩ひになるので、誰も誰もお嘆きになつてゐて、

君はお出歩きなどには不都合な時なので、二條の院にさへも時々にお出でになる。何と云つても貴い上では、格別にお思ひになつてゐる人で、懷妊といふ珍らしい事までも添はれての御惱みなので、君は心苦しくお嘆きになり、修法だの色々の事を君の御方で多く行はせられる。物の怪や生靈などいふものが多く出て来て、さまざまに其の名を名の中なかに、寄りましにも決して移らず、ただ女君の御身にびつたりと添つてゐる様で、特に仰々しく悩ますといふことは無いけれど、又片時かたときでも離れる時といつては無いものが一つある。尊い験者げんさどもの云ふ事も聞かず、執念深い様子は、並々ななの者ではないやうに見える。大將殿の御通ひ所を、此所こゝ彼所かしこと目當てを附けて見るに、「あの御息所、二條の院の君などだけは、大凡おほよその様には思つて入らつしやらないらしいから、恨みの心も深いことであらう」と嘯ささいて、その心で物を訊かせて御覽になるが、それと胸に中るやうな事もない。物の怪とはいつても、改まつた深い敵かたきと申す者もない。死んだ御乳母おんめのとといつたやうな者、もしくは親の大臣おとぎに對しての恨みを持ち越してゐる者などの、女君の弱目よわめにつけ込んでゐる者で、しつかりともしない者が亂れて現はれて来る。女君はただ

つくづくと聲を立てて泣かれて、折々は胸を塞き上げ塞き上げされて、何うにも堪へられないやうに惑ふ様をされるので、何うなられるであらうかと、氣味悪く悲しくお思ひ慌てになる。院よりの御見舞ひまも隙ひまのないまでで、御祈禱のことまでもお氣をお付け下さる忝かたじけさにつけても、一段と惜しく思はれる御身である。

世の中の人のあまねくお惜しみするのを聞かれるにつけても、御息所は妬ましくお思ひになる。この年頃は、ひどく此のやうにまでではなかつた御競ひ心が、ちよつとした場所の車争くるまひから、御息所のお心が動搖して來たのを、左大臣家ではそれ程とも思ひ寄られなかつた。かうしたお嘆き亂れの爲に、御息所は御氣分が引續いて普通には思はれないので、齋宮の神事を憚おそかつて他の所にお越しになつて、修法すはふなどをおさせになる。大將殿はそれをお聞きになり、何んな御氣分だらうかとお可哀さうに思つて、我慢をしてお出でになつた。平生とは異ちがつたお旅所たびじよなので、ひどくお忍びになられる。思ひの外の御無沙汰を、咎とがの許されるやうに云ひ續けられて、悩んでゐる人の御有様も心配して申される。「私としてはそれ程に思ひ入つてゐる訣で

はありませんが、親達がいかにも事々しく嘆いてゐるのが氣の毒なので、かうした間を見遇してと思つてゐます。すべてを寛やかに所思ひ下さつたら、何んなに嬉しいでせう」などお話になる。御息所の平生よりは苦しきやうにしてゐられる御様子を、尤もな事と、哀れに君はお覽になる。打解けたお心ではなくて、明け方にお歸りになる君の御様の美しいのにも、御息所はやはり振り離れることは所思ひ返しになられる。貴い所は、一段とお心の深くなるべき御子の事も添つて來られたので、其所にお心が落着くやうになつて行かうに、此のやうにお待ち續けしいしいしてゐるのは、根も盡きるやうにばかりなる事で、却つて嘆きが深まつて來る心持がされるのに、君は御文だけが暮れ方になつてあつた。此頃中少し快いやうに見えてゐた病人の氣分が、俄にひどく苦しきやうに見えるので、手が抜けませんので」とあるのを、例のかこつげだと御覽になるものの、御息所の御文は、

袖ぬるるこひ路とかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞ憂き

〔歌意〕袖の濡れる泥とは一方で知つてゐながら、その中に下り立つ農夫の身は辛い事です。

〔「袖濡るる」は、戀の上の涙。「こひ路」は、戀路。「田子」は自身の譬。「みづから」は、身の意で、「みづ」は「こひ路」「田子」などと縁語。〕

『山の井の水』で入らせられるのも御尤もで」とある。御手跡はやはり多くの人の中でも勝れてゐると御覽になりつつ、何ういふものだらうかと疑ひの伴ふ世中ではある、心も容貌もそれぞれによく、さうかといつて又、此れをと思ひ定めようも無いのを苦しく所思ひになる。御返事はひどく暗くなつたが、「袖ばかりお濡れになるといふのは何うした訣でせう、そこは深くないからでせう。

浅みにや人は下り立つ我が方は身もそぼつまで深きこひ路を

〔歌意〕浅い所の方に貴方は下り立つのでせう、私の方は體のすべてが濡れそぼつ程の泥ですのに。「こひ路」は、田の泥に戀を掛けたもの。「濡れそぼつ」は、泥に濡れるのに、戀の涙を掛けたもの。〕

病人が大抵ならば、この御返事は直接に申上げずには置きませぬが」などある。大殿では物の怪がひどく起つて來て、甚しく御煩ひになる。この御生靈は、故父大臣の御靈

だと云つてゐる者があると御息所はお聞きになるにつけて、思ひ續けられると、自分の憂い嘆きの外には、人の上を悪しかれと思ふ心はないけれども、嘆きをするを身を離れて行くといふ魂は、さうもあらうかと思ひ知られる事もある。この年頃、何につけても嘆き残すこともない有様で過しては來たが、このやうにまでは心が碎けなかつたのに、ちよつとした折に、姫君の見下して、物數でもないやうに扱つた襖の後には、一すぢに辛いと思つて漂ひ出した心が、鎮まりかねるやうに思はれるせるでもあらうか、ちよつと微睡まれる間の夢にも、かの姫君かと思はれる人の、いかにも清らかにしてゐる所へ行つて、ああかうと小突き廻し、平生には似ない、猛々しい嚴ついで途心が出て來て、打擲すると見える事などが度び重なつて來た。ああ厭やだ、本當に心がこの身を離れて行つたのだらうと、正氣ではなく思はれる折もあつたので、御息所は、それ程ではない事でも、他人の事といふと善い事はいひ出さない世間だのに、まして此れは、悪く云ひ拵へるには、ひどく都合のいいものだと思はれると、ひどく評判になりさうで、全く死んでしまつての後に、恨みを残すといふのは普通のことである、それでさへも人の

上の事として聞くと、罪の深く氣味の悪い事だのに、生きてゐる自分の身でありながら、さうした疎ましい事を云ひ立てられるといふことは、宿世の辛いことである、總じて、情ない人に、何うでも心をお懸けする事はしまいと思ひ返されるけれど、思ふまいと思ふのも思ふことである。

齋宮は、去年内裏にお入りになるべきであつたのを、色々の障りがあつて、此の秋お入りになる。九月には、續いて野の宮へお移りになるべきなので、二度目の御祓の用意が重ねてあるべきだが、御息所の御様子も、不思議に惚け惚けしくて、つくづくと臥て惱んでゐられるので、御殿の人々は大事件として、御祈などをさまざまにする。仰々しい容態ではなく、何處かといふこともなく煩はれて、月日をお過しになる。大將殿も絶えずお見舞をされるが、一層大切な方が重く煩つてゐられるので、お心に暇もなささうである。

大殿では、まだ産期といふ程ではないと、何方も油断してゐられると、俄にその御様子があつて惱まれるので、一段と御祈の數を盡してされるが、例の執念深い御物の怪の一つは少しも

動かない。尊い驗者どもも珍らしい事にして扱ひ惱んでゐる。さうはいふものの嚴しい調伏の爲に、氣の毒のやうに泣き入つて、「少し弛べて下さい。大將殿に申上げたいことがあります」といはれる。「さうであらう。何か訣のあることだらう」といつて、女君の側に立ててある几帳の下に源氏の君をお入れ申した。全く最期の御様子でゐられるので、申上げて置きたい事もあるのだらうと、大臣も母宮も少しお退りになられた。加持の僧どもは聲を低めて法華經を讀んでゐるのが極めて尊い。君は御几帳の帷を引き上げて御覽になると、女君はいかにも美しく、御腹がひどく大きくて臥してゐられる様は、他人であつてさへも見上げたれば心が亂れさうである。まして君の惜しく、悲しくお思ひになるのは當然である。白い御衣に、色合ひがいかにも引き立つて、御髪の長く煩いまでなのを引き結んで添へられてゐるのも、かうあつてこそ可愛らしくなまめいた方が添つて来て美しいと見える。君は女君の御手を取つて、「これはひどい事です。辛い思ひをおさせになることです」といつて、物もいはれずに泣いてゐられると、いづもは心遣ひの多く、極り悪くなさる御目つきを、いかにもだるさうにして君を見上げて、ちつ

と見詰めてゐられる中に、涙をこぼして來るのを御覽になると、何うして哀れが淺からうか。女君の餘りにもひどく泣かれるので、君は氣の毒な親達の事を思はれ、又このやうに見られるにつけて、名残惜しく思はれるのであらうかともお思ひになつて、「何事もそのやうに思ひ詰めないやうになさい。こんな有様でも大した事ではないでせう。何のやうな事があらうとも、必ずめぐり逢ふ中なので、改めての對面ができません。大臣や宮などにも、深い縁のある中は、めぐりめぐつて縁の絶えないものだから、逢ふ時があると思つて入らつしやい」とお慰めになると、「いえ、それではありません。身がひどく苦しいので、修法を少し休めていただきたいと申上げようと思つてです。このやうに此所へ參らうとは少しも思つてゐないので、嘆きをすめる人の魂は、いかにも身を離れるものでございます」と懐かしさうにいつて、

嘆きわび空に亂るるわが魂を結びとどめよしたがひの棲

〔歌意〕嘆き侘びて、身を離れて空に浮かれ亂れてゐる私の魂を、結んで、取鎮めて下さい、その下前の棲を。「したがひの棲」は、下前の棲で、それを結ぶと、身を離れた魂を鎮めて、もと

の身に歸すことが出来ると思はれてゐた。「空」は、夢中といふ意と、「宙」といふ意とを掛けたもの。

と云はれる聲も様子も、姫君ではなく變つてゐた。君はひどく不思議な事だと思ひめぐらされると、それはまさにかの御息所なのである。淺ましくも、人がとやかといふのを、君は良くない者どもの云ひ出す事だとして、聞きにくく思つて否定してゐられるのに、目の前にまざまざと見ると、世の中にはかういふ事もあるものだと思はれて、疎ましくなつた。ああ心憂いとだと思はれて、「さう云はれるが、何方かはつきりと知れませんが。はつきりと仰つしやい」と云はれると、唯その方であると思はれる御有様に、淺ましいといふのは世の常の言ひ方である。人々が近く参るのも、君が工合悪く思はれる。少し女君の御聲が鎮まつたので、悩みが薄らぐれたのかと思はれて、母宮が重湯を持つてお寄りになつたので、女君は扶け起されて、間もなくお産があつた。嬉しく思はれることが限りもないに、驅り出して人に憑らせておいた御物の怪どもは、その事のあつたのを口惜しがる様子がひどく物騒がしくて、後産の事もまた何う

かと、ひどく不安である。限りもない願どもを立てさせられた爲でもあらうか、無事に此方の事も濟んだので、叡山の座主、誰彼れと尊い僧どもも得意の様子で、汗を拭ひながら急いで退出をした。多くの人が心を盡した此の日頃の名残として、少し心が休まつて、今はもう何うあらうとも大丈夫と思はれた。御修法などは又々始められはしたけれど、先づ興のある、珍らしい御冊きの方に、すべての人の心が緩んだ。院を御始めとして、親王達、上達部の残らずからの産養ひの禮物の、珍らしく立派なのを、夜毎に見て愛で騒いでゐる。お子は男でさへあつたので、その間の儀式は賑はしく結構である。

かの御息所は、かうした御有様をお聞きになるにつけても、お心が穩やかではない。豫ては命も危いといふ評判であつたのに、安産でまでもあつてとお思ひになつた。不思議な正氣でもないお心持を思ひつづけられると、御衣なども全く、修法の折に焚く芥子の香が、染みぬいてゐる。不思議さに御泔を取寄せて御髪を洗はれ、御衣を著かへなどして試して御覽になつたが、やはり同じやうでばかりあるので、我が身であつてさへも疎ましい氣がするのになつた。

世間の人の思つたり云つたりする事を、人に云ふべきことではないので、心一つで思ひ嘆いてゐられると、一段とお心の變つた態も増して行く。大將殿はお心持を少し緩やかにして、淺ましかつた御息所の間はず語りも心憂くお思ひ出しになりながら、ひどく無沙汰になつてゐるのも心苦しく、又間近くて見上げるのも、何だか厭やな氣がされることだらうと、それも人の御爲にお氣の毒だと、色々にお思ひになつてお手紙だけをお遣りになつた。

ひどくお煩ひになつた方は、御名残も氣味が悪く、油斷のならないやうに誰も思つてゐられるので、君も尤もと思はれて、お出歩きもない。まだひどく惱ましいやうにばかりしてゐられるので、平生の様での御對面もされない。君は若君のひどく氣味悪くまで見える御有様を、今からひどく格別に冊かれる様は一とほりではない。願ふことが叶つた心持がして、大臣も嬉しさの極みと思つてゐられるに、ただ姫君のお心持の快くなりきらないのを不安に思つてゐられるが、あれほどに重かつた惱みの名残りだからとお思ひになつて、何うして、さうひどくお心を惑はす事があらう。君は若君のお眼の美しさの、東宮に甚しく似通つてゐられる

のを御覽になるにつけても、先づそちらが戀しく思ひ出されるので、怵へられなくて參内をしようと思つて、「内裏にも餘り久しく參らなくて、心許ない氣がしますので、今日は初參りをしますが、少し間近い所でお話したいものです。餘りにも覺束ない心隔てを附けられることですが、と恨みを申されると、「ほんとは、一筋に艶にばかりなさるべきではございません」といつて、女君の臥てゐられる所に、君のお座を近く設けたので、君はそこへ入つて物などお話しになる。女君は御返事を時々なさるが、まだひどく弱々しさうである。けれど全く命の無い人と思つた御有様を思ひ出すと、夢のやうな氣がして、大事と思へた頃の事などもお話しするついでにも、あの全く息も絶えたやうであつた時に、打つて變つて、つぶつぶと仰しやつた事どもを思ひ出すと、心憂いので、「さあ、お話ししたいことは澤山あるが、まだひどく懶くお思ひになるやうですから」と云つて、「御湯をお上りなさい」などいふ事までもお扱ひなされるので、いつそんな事をお覚えになつたのだらうと、女房たちは哀れにお思ひ申す。ひどく美しい人の、いかにも弱り痛められて、正氣もないやうな様子で臥てゐられる様は、まことに可愛らしくも

苦しきさうでもある。御髪の亂れた一筋もなく、はらはらと懸つてゐる枕のあたりなど、世にも珍らしいものに見えるので、この年頃どが不足に思つて來たのだらうと、君は不思議なほど見詰めさせられる。院などへ參つて、すぐに退つて來ませう。このやうに覺束なくはお逢ひが出来ると嬉しいだらうに、宮がびつたりとお附添になつてゐるので、不躰にお思ひにならうかと遠慮し通して來たのも苦しいことでしたが、この上とも段々に氣を強くお引立てになつて、例の御座所にゐられるやうになさいます。餘り子供のやうにお扱ひになるので、却つて抄々しく行かない氣味があります」などお云ひ置きになつて、いかにも綺麗に裝束をしてお出懸けになるのを、女君は平生よりは目を留めて見送つて臥てゐられた。

秋の司召のあるべき定めの時なので、大臣も參内されると、君達も功勞を云つて望まれる官などがあつて、大臣の御邊りを離れることができないので、皆續いてお出懸けになつた。殿の内が人少なで靜かな時に、姫君は急に例のやうに御胸を塞ぎあげて來て、殊にひどく御惱みになる。内裏へお便りを申す間もなく息がお絶えになつた。足を空にして誰も誰も退出されたの

で、司召の事はすべて破れてしまつたやうである。ただ騒いでゐるだけで、夜半の事なので、叡山の座主、誰彼れの僧たちも、招かうにも招けない。今はそれでも大丈夫だと油斷をしてゐたので、呆れてしまつて、殿の内の人には物に突き當つてまごつく。所々からのお見舞の使が立て込んでゐるが、取次もできないまでに、殿の内一ぱいの騒ぎで、甚しい御心惑ひのさまは、ひどく恐ろしいまでに見られる。御物の怪の度々取り憑いたことをお思ひになつて、姫君の御枕などもそのままの方角にして、二三日見て入らせられたが、次第に變つてゆかれる相などの事もあるので、今は限りだとお思ひ諦めになるまで、誰も誰もひどく悲しい。大將殿は悲しい事に事が添つて、世の中をひどく憂いものにお思ひ沁みになつたので、ひと通りではない邊りのお見舞などまでも、心憂いものにすべてお思ひになる。院にはお嘆きにならせられ、御見舞ひ下さる様が、却つて面目のやうで、悲しさに嬉しさもまじつて、大臣は御涙の隙もない。人の申すのに隨つて、嚴めしい願などを、生き返ることもあらうかと、色々と残る所もなくされ、一方には姿の變つて行かれるのを見い見いしながらも、盡きずに嘆いてゐられたが、

甲斐もなく幾日にもなるので、今は何うしようと、鳥邊野へお連れ申す程、悲しい事が多くある。此方彼方の御葬送の人々や、寺々の念佛の僧などが多く、廣い野も居所がない。院よりは申すまでもなく、後の宮、春宮の御使、他の所々のお使も参りちがつて、飽かずに懇ろな御弔ひを申される。大臣は立ち上ることも出来ない。「このやうに齡の末になつて、若い盛りの子に残されて、這ひ廻つてゐることです」と恥ぢて泣かれるのを、多くの人が悲しんで見上げる。夜をとほしてひどく騒いだ儀式であつたが、いとも果敢ない骸ばかりを名残として、曉深い頃にお歸りになられる。世の常の事ではあるが、君はこの一人一人の事かと、數多の人の上を見られないせるかして、類ひもなく嘆きつくされた。八月二十日餘りの有明のことであつたので、空の様子も哀れが少くないのに、大臣の子ゆゑの闇も心の昏れまどつてゐられるのを見るにつけても、尤もで悲しいので、空ばかりを眺められて、

のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな

〔歌意〕 立ち昇つて行つた、その人を焼いた煙は、雲とまじつて、何れがそれと差別が附かない

けれども、おしなべての空の身にしみて感じられることではある。

殿に着かれても、少しも微睡むこともお出来にならない、女君の年頃の御有様を思ひ出し思ひ出しして、何だといつて、最後には自然に見直して下さるだらうと呑氣に思つて、良い加減にお扱ひするのが癖になつてしまつた所から、辛い者と思はせて來たことであらう、生涯を氣の置ける極りの悪い者に思つて死なれてしまつたことであると、口惜しい事を思ひつづけられるけれども、甲斐がない。薄い鈍色の喪服を著せられるのも夢のやうな氣がして、自分の方が先に死んだならば、この色を濃く染められるのであらうと思ふと、それまでも悲しくて、

かぎりあればうす墨衣あさけれど涙ぞ袖をふちとなしける

〔歌意〕 定めがあるので、薄墨色の喪服の、その色は浅いけれども、涙の方は袖を淵と變へた。

〔うす墨衣〕は、妻に對しての喪服は、妻の夫に對してのそれより色の薄い定めからのもの、「ふち」は涙の多い意での「淵」と、喪服の藤衣の「藤」を掛けたもの。

と云つて念誦をなされる様は、却つて一段と艶かしさが勝つて、經を忍びやかに讀まれながら

「法界三昧普賢大士」と稱名される様は、行ひ馴れてゐる法師よりも勝つてゐる。君は若君を御覽なるにつけても、『何に忍草の』と思はれて、一層に涙の露が繁くなるけれども、もしかうした形見までもなかつたならばと思つて慰さめてゐる。母宮は嘆きに沈み入つて、そのままに起き上りもされず、命も危いやうに見えるので、又も心配して騒いで、御祈禱などをおさせになる。果敢なく日が過ぎて行くので、後の御業の支度などなさるにつけても、思ひ懸けなかつたことなので、盡きずに悲しみが深い。それ程でもない不十分な子であつてさへ、親の心は何んなであらう、まして此れはと、尤もである。他に並びたまふ姫君の無いのでさへさみしく思つて入らしたのに、袖の上の珠の碎けたのにも勝つて、呆れたことである。大將の君は二條の院にさへも、ちよつともお出でにならず、しみじみと思ひ深く嘆いて、行ひをまめやかに勤めつつ明かし暮らしてゐられる。所々に御文だけをお遣はしになられる。

かの御息所は、齋宮が左衛門の司にお入りになつたので、いよいよ厳しい御潔齋をかこつけて、君との消息もお通はしにならない。君は、憂いものと思ひ染みてゐた世も、總じて厭は

しいものになつて来て、かうした絆の若君さへ添つてゐなかつたならば、世を捨てた様にもならうと思はれるにつけ、先づ對の姫君のさみしさうにしてゐさうな様が、ふと思ひやられる。夜は御几帳の内に獨りでお臥みになられて、宿直の人々は近く取圍んで侍つてゐるけれど、傍らがさびしく、『時しもあれ』と寢覺めがちでゐられるのに、聲の勝れてゐる者ばかりを擇んでおさせになる僧の念佛の、曉方などは怵へ難い。

深い秋の哀れの勝つてゆく風の音が、身に沁みることであると、君は馴れないお獨寝に明かしかねてゐられた朝ぼらけの、霧の立ち渡つてゐる時に、菊の咲きかかつた枝に、濃い青鈍色の紙の文を附けたのを、使がさし置いて行つた。「當世風な」と思へて御覽になると、御息所の御手である。「何も申上げずにゐました間の心持は、御汲取り下さる事でせうか。

人の世をあはれときくも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ

〔歌意〕人の身があはれに終つたと聞くにつけても涙ほくになりますのに、後に残された貴方のお袖は、何んなに濡れることだらうとひたすら思はれます。「人」は葵の上。「きく」に「菊」を掛

け、「露」で涙を暗示して、縁語としたもの。

唯今の空のあはれさに思ひ餘りましたから」とある。常のものよりも、いかにも優いさに書かれたことだと、さすがに下に置き難いものとして御覽になるもの、思ひやりのない御弔ひであると君は心憂い。さうかと云つて、ふつつりと便りを申さないといふのも氣の毒で、その人の評判も悪くなることだと、君はお思ひ亂れになる。死んだ人は、何うあれ、かうあれ、さうなるべき宿世すくせで居られたのであらう、何だつてああした言葉を、ありありと、はつきり聞いたのであらうと思つて口惜くやしいのは、君は御自分の心ながら、まだ思ひ直すことは出来ないのであらう。齋宮の御潔齋も面倒だらうかなど、久しく屈托をされたけれど、態々の御文おんかみに返事のないのは情なさけのない事であらうかと思はれて、紫の、黒ずんで來た紙に、「この上もない御無沙汰をしました、お思ひ申すことは怠つてはるらないながら、遠慮を致すべき間あひだの心持は、それならばお汲取り下さるでせうかと思つてです。

とまる身も消えしも同じ露の世に心置くらむ程ぞ果敢なき

〔歌意〕 後に留まつてある身も、先に消えた者も、同じく露のやうに果敢ない世の中の事であるのに、その世に心を残してゐるといふことは果敢ないことです。「とまる」、「消えし」、「置く」は、すべて「露」の縁語。「心置く」は、我が執着をいふが主で、御息所のそれをも諷したものだ。

一方では、お思ひ捨てを願ひます。御覽にならないかとも思ひまして、此方こちでも言ひ洩らし「ます」と申された。御息所は里の殿にお出でになつた時のことなので、忍んで御覽になつて、ほのめかして云はれた氣分を、心の鬼ではつきりと汲取られて、それであつたとお思ひになるのも、何うにも苦しい。やはりひどくも限りのない身の憂さなのである、かうした評判が立つと、院にも何のやうに思召されることであらう、院は故前坊こぜんぼうの御同腹の御兄弟といふ中でも、深くも思ひ合つて入らせられて、あの齋宮の御身も、前坊の懇ろにお頼みになられたので、その御代りとなつて直ぐにもお世話をしようと常に仰せになつて、自分にも直ぐに内裏住うちぢみをするやうにと度々たびたび仰せになつたのをさへ、有るまじき事と思ひ離れたのに、このやうに思ひの外な若々しい嘆きをして、最後には辛い評判まで立てられるやうになつてしまつたことだと思

ひ亂れになるので、やはりふだんの御様子では入らせられない。しかし御息所は、様々の方面に亘つて、奥ゆかしい、由のある方だといふ評判があつて、昔から名高く入らせられるので、野の宮にお移りになつた頃でも、面白い當世風の事を多くなさつて、殿上人どもの色好みの者は、朝夕の露を分けて歩くのを、此頃の役目にしてゐるとお聞きになつても、大將の君は、それは尤もなことだ、心の故由は飽くまでも附いてゐられるのに、もし世の中に、厭き果てて伊勢へお下りになつたならば、さみしくなることであると、さすがにお思ひになつた。

故女君の御法事は濟んだが、君は四十九日まではやはり籠つてお出でになる。君の馴れない御徒然をお氣の毒に思つて、三位の中將は常に参り参りして、世間話の眞面目なものも、又例の亂りがはしいものもお聞せしいしい慰められるに、彼の内侍が笑ひ草になつてゐるやうである。大將の君は、「かはいさうに、御祖母様のことを、ひどく輕しめなさるな」と制されるもの、常に可笑しく思はれた。常陸の宮のかの十六夜の、はつきりしてゐた秋の事など、その外の様々の好色事どもを、互に隠さず云ひ現はされての果て果てには、哀れである世の中を云ひ

云ひして、打泣きなどもされた。時雨が降つても哀れである暮れ方に、中將の君は鈍色の直衣指貫ではあるが、色の薄いのに衣更へをして、男らしくきつぱりとして、心恥しく感じられる様をして参られた。君は西の妻戸の所の勾欄に凭りかかつて、霜枯れのした前裁を見てゐられる時であつた。風が荒く吹いて、時雨がさつと降るのに、君は涙も争つてこぼれる心持ちがして、『雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず』と獨語をして、頬杖をついてゐられる御様は、女であつたならば、此の人を見残して死んでゆく魂は、必ずここに留まることだらうと、中將は好色の心持から見入り見入り、君の身近に腰をおろすと、君はしどけなく打亂れた様ながら、直衣の紐だけをさし入れて繕はれる。君の方は今少し濃い鈍色の夏の直衣に、紅のつややかな下著を襲ねて、寝れてゐられるのが却つて見ても飽かない心持がする。中將もひどくしみみした眠つきで空を眺められた。

雨となりしぐるる空の浮雲を何れの方に分きて眺めむ

〔歌意〕 雨となつてしぐるる空の浮雲には、妹君の火葬の煙もまじつてゐると思ふが、何れの方

の雲がそれだと區別して眺めようか。(君の「雨となり雲とやなりにけむ」と云はれたのを承けての心。)

たよらない事だ」と、獨語のやうに云ふのに、君は、

見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらす頃

〔歌意〕 契つた人が立ち昇つて雨となつたその雲居までが、今は一段と悲しみが深くなつて、時雨とまでなつて、暗くなつてゐる頃ではある。「雲居」は「雲」と、空の意のそれを掛けたもの。「時雨にかきくらす」は、空の状態によつて、自身の涙と暗い心とを暗示したもの。

と仰せられる御様子にも、女君に對しての君のお心の淺くないのがはつきりと見えるので、中将は怪しく思つて、この年頃は、それ程ではないお心であるが、院などの絶えぬ御注意があり、大臣の御もてなしに對しても氣の毒であり、母宮との御關係もぬきさしのならないものがあるなど、旁さし合ひのあるところから振り捨てることが出來ずに、もの憂げな御様子ながら過してゐられるのだらうと、お氣の毒に見える折もあつたが、まことに大切な重い方には、格別な思ひを持つて入らしたのだらうと見知るにつけても、姫君の事がいよいよ残念にお思ひに

なられる。萬事につけて、光が消えた心持がして、心の結ばれ方は痛いまでである。

前栽の枯れた下草の中に、龍膽、撫子などの咲いてゐるのを君は折らせて、中将の起られた後で、若君の御乳母の宰相の君をして、宮の許に、

草枯れの籬に残る撫子を別れし秋の形見とぞ見る

〔歌意〕 草枯れとなつた籬の中に残つてゐる撫子の花を、別れて行つた秋の形見と思つて見てをります。「撫子」は若君、「秋」は女君の譬。

女君に較べては、匂ひが劣つてゐると御覽になりませう」と申上げられた。いかにも若君は、無心なお笑ひ顔がひどく美しいことだ。母宮は、吹く風につけてさへも、木の葉にも勝つて脆い涙で入らせられるので、まして君のお文は手にお取りにならうにもなれない。

今も見てなかなか袖をくたすかな垣ほ荒れにし大和撫子

〔歌意〕 その時から續けて今も見てゐて、今の方が却つてあはれて、涙に袖を腐らせることではありません、護つて行くべき垣の荒れくづれたこの大和撫子は。「垣ほ」は女君、「大和撫子」は若君の譬。

君はやはり甚しく徒然なので、櫛の宮に、自分の今日の哀れは、さうはあらうとも、見知つて下さるだらうと推し量られるお氣分なので、暗い時刻とはなつてゐたがお文を上げられる。絶間が遠くはなつてゐるけれども、さうした事のあることとなつてゐる御文なので、姫宮は咎めもなく御覽になる。空色をした唐の紙に、

分きてこの暮こそ袖の露けけれ物思ふ秋はあまた經ぬれど

〔歌意〕 取り分けて今日の夕暮は、我が袖は露ほいことす、嘆きをする秋は數多を経て來まし
たけれども。〔物思ふ秋〕に、姫に對する心を暗示したもの。〕

いつも時雨は降つてゐますが」とある。君の御手は、心を留めてお書きになつてゐるので、常のものよりも見どころがあつて、このままには見過し難い程のものだと女房達もいひ、御自分もさう思はれたので、「御邊りをお思ひ申上げながら、お便は申上げられずになりました」とあつて、秋霧に立ちおくれぬと聞きしより時雨るる空もいかがとぞ思ふ

〔歌意〕 秋、女君に後れさせられたと伺つた時からお氣の毒で、この時雨の空につけても、何の

やうであらうかと思ひやつてをりますことす。〔秋霧に〕は、「立ちおくれ」の序であると共に、その時の「秋」も現はしたもの。〕

とあるだけで、ほのかな墨繼ぎで書いてあるのも、君は思ひなしで心憎く感じる。何事につけても、見て見勝りのするといふ事は難い世の中らしいのに、辛い人は取分けあはれに思はれる君のお心様である。情なくはあるものの、然るべき折のあはれに對しては見過ごすといふ事をしない、此れこそ互に情を見せ合ふといふ事である、やはり故由が有り過ぎて、人目にも立つ程なのは、有り過ぎての難も出て來た、對の姫君は、そのやうには躰けまいとお思ひになる。その姫君は、徒然で戀しいと思つてゐることだらうと、忘れる折は無いけれど、ただ女親の無い子を殘して來たやうな心持がして、見ない間は氣懸りで、何んな恨みをしてゐるだらうと思はれないだけが、心易いことではある。

暮れたので、君は燈臺を近くお置かせになつて、然るべき限りの女房達を御前に集めて、物語などをおさせになる。中納言の君といふは、年頃忍んで御寵愛になつてゐたのであつたが、

この御喪の間は却つてさうした方面にはお關はりにならない。あはれ深いお心ではあると女はお見上げ申してゐるに、大方おほかたの事については懐かしくお話があつて、「このやうに此頃中、以前にも増して誰にも誰にも、紛まれることもなく見馴れ見馴れして、この後ごはかうは出来ないかと思ふと、戀しがらずにはゐられない。御不幸の事はいふまでもないが、それにつけての事を考へると、忪とへられない事が澤山にある」と仰せになると、一層にみんな泣いて、「詮せのない御事は、世の中も暗くなつたやうに存じられまして、申すまでもございせんが、名残もないやうにお見捨てになるでございませうと、その事を思ひます」と、申し切れない。君は哀れと思つて皆を見渡して、「名残もないなんて事が何うしてあらう。それは私を心の浅い者に取做していふといふものだ。氣き永ながの人でさへあつたら、終しまひには分つてくれる事だらう。しかし命は果敢ないものだ」と云つて、灯影を眺めてゐられる御眼の濡れてゐられるのが愛めでたい。女君が取分けて可愛がられた小さい童わらわで、兩親ともなく、ひどく心細さうにしてゐるのを、尤もだと御覽になつて、「あてきは、今からは私だけが頼みの人だらう」と仰せになると、ひどく泣く。丈の

短い袖そで、人よりは黒く染めた、黒い汗あせ衫ぎんに、萱草くわそう色の袴はかまを着てゐるのも可愛い姿である。「昔を忘れない人は、徒然つれづれなのを我慢して、若い人を見捨てずゐて下さい。以前の名残もなくみんなまでが散つてしまつたら、私の頼たよりなさも増すことだらう」と、皆が心永くしてゐるやうにと仰せになるが、女房は、何うであらう、一層に待ち遠になる事だらうと思ふと心細い。大殿おほいどのでは、人々に、身分々々、程々に差別を立て立てして、はかない遊び物など、又まことに姫君のお形見となるべき物などを、態まとではないやうに取做し取做しして皆に配くばらせられた。

君は、かうばかりして、何うしてつくづく物思ひばかりしてゐられようと思ひになつて、院へ參られる。お車をさし出して、御前ごぜん驅くなどが參り集まる間を、折を知つてゐるがやうに時雨がふりそそいで、木の葉を誘つて行く風が慌しく吹き拂ふので、君の御前おまへに侍つてゐる人々は心細くて、少しその隙すきのあつた袖がみんな濡れた。夜よるは、そのまま二條の院にお泊りになられるといふので、お付きの人々は、其方そちらでお待ち申さうといふのであらう、各出懸けて行くので、君けが今日けふを限りとされる事ではないが、この上もなく物悲しい。大臣おとぎも母宮も、今日けふの様子で

又悲しさを改めてお思ひになる。母宮の御前には君から御消息を申上げた。院が覺束ながつて仰せになるので、今日参ります。かりそめに出懸けますにつけても、今日まで命がながらへてゐた事だと、亂れ心地が一層でございます。申上げるのは却つてと存じますので、其方には参りません」とあるので、一段と宮は涙に目もお見えにならぬまで悲しみに沈まれて、御返事も申せない。大臣は直ぐにお越しになられる。ひどく怵へられないやうにして、大臣は顔からお袖を離されない。お見上げる人々もひどく悲しい。大將の君は世の中を思ひつづけられる事が様々で、泣かれる様はあはれに心深いものの、いかにも見る目がよく艶いてゐられる。大臣は久しく躊躇らはれて、「齡が積りますと、それ程でない事につけてさへも、涙脆くなるものでございますのに、まして唯今は夜晝となく嘆かれます心を柔らげかねますので、人目がひどく亂りがはしく、心弱く見えることでございますと存じ、院などにも参れずにをります。事の序にさやうの趣を奏して下さいまし。何れ程もあるまいと思ひます齡の末に、捨てられましたのが辛うございます」と、強ひて思ひ鎮めて仰せになる御様子もひどく悲しい。君も度々鼻をか

365

で、「後れ先立つといふ定めなさは、世の習ひだとは見てをりながら、身の上にふり懸つての心惑ひは、類ひもなさうに存じます。院にも有様を奏しましたら、御推量下さいませう」と申される。「それでは、時雨も止みさうにもございせんから、暮れない中に」とそそのかされる。君は見廻されると、御几帳のうしろ、襖の彼方などの、開け通しになつてゐる所に、女房が三十人ほど押合つてゐて、濃い薄い鈍色の衣を著け著けて、何れもひどく心細さうにして、萎れながら集まつてゐるのを、ひどく哀れに御覽になる。大臣は、「御思ひ捨てにはなるまいと思ふ人も留つてゐられますので、それでも、物の序にはお立寄りにならない事はなからうと慰めてをりますのに、一途に、思ひやりのない女房などは、今日を限りにお思ひ捨てになる故郷のやうに思つて萎れまして、永い別れとなりました悲しみよりも、ただ時々には馴れてお仕へ申した年月の、名残のなささうなのを嘆くやうでございますが、尤もに思はれます。打解けてゐられる事はございませんでしたが、それでも何時かはと空頼みをしてをりましたのに、全く心細い夕べでございます」と云つても、また泣かせられた。「ひどく淺はかな人々の

嘆きでございます。ほんに、何のやうであらうとも、呑氣に思つてゐました頃は、自然御目に懸れなかつた時もございましたが、却つて今は何を頼みにして怠りませう。やがて御覽になることとせう」と云つてお出懸けになるのを、大臣はお見送りになつて奥へお入りになると、御裝飾より始めて以前に變ることはないけれども、空蟬の空しい心持がなさる。御帳の前にお硯などを打散らして、字を習ひ捨てられたのを取つて、涙の眼を見開き見開き御覽になるのを、若き女房たちは悲しい中にも微笑む者もあるだらう。哀れな古言などを、唐のものも大和のものをも書き汚しつ、眞字にも假名にも、様々に珍らしい風に書きまぜてゐられる。「長い御手である」といつて空を仰いで嘆いてゐられる。君を餘所人とするのが惜しいのであらう。「古き枕古き衾、誰と共にか」とある所に、

なき魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれ難き心ならひに

〔歌意〕亡き人の魂の方が、自分よりも一層悲しいことだ、寝馴れた床は捨て去り難いものである人間の心ならひで。

又、「霜の華白し」とある所に、

君なくて塵積りぬるとこ夏の露打拂ひ幾夜寝ぬらむ

〔歌意〕君が居なくなつて、塵が積つた床に、涙の露を拂つて幾夜寝たことであらうか。「とこ夏」は「床」の意で用ゐ、露は涙の意であるが、「床夏」の花に關係させてゐる。

いつぞやの撫子の花なのであらう、枯れてその中にまじつてゐた。大臣は宮にお目に懸けて、「いふ甲斐の無い事は、それはそれとして、かうした悲しい類ひが、世間に無いことであらうかと思ひ拵へ思ひ拵へして、親子の縁が長くなって、このやうに心を惑はすやうに生まれて來たのであらうと、却つて辛く思つて、前世の宿縁を思ひやつて心を覺ましてゐますが、ただ日數が立つに連れて戀しさの我慢の出來ないのと、この大將の君が、今は餘所の者になつてしまはれるのが、堪能のできない、何うにも悲しい事に思はれます。一日二日もお見えにならず、と絶えて入らした時でさへ、堪能ができず胸が痛く思ひましたのに、朝夕の光が無くなつては何うして生きてゐられませう」と、お聲の立つのも我慢がし切れずにお泣きになるので、御前に

るる年輩の女房など、ひどく悲しくなつて、どつと泣き立てたのは、そぞろに寒い夕べの様子である。若い女房たちは、所々に集り集りして、めいめいの哀れな事を話し合つて、「殿の仰せのやうに、若君のお世話を申上げるのが、何よりも慰めになることだらうとは思ひますが、いかにも果敢ないお年のお形見で」といつて、めいめい、「ちよつと歸つて、又参ります」といふ者もあれば、互に別れを惜しみ合つてゐるなど、めいめい哀れな事どもが多くある。

院へ参られると、院は、「何うもひどく顔が瘦せたことだ、精進で日を過してゐたせらうか」と、氣の毒に思召して、御前で食事をおさせになつて、何かとお氣に懸けさせられてお扱ひになるのが、身に沁みて忝い。中宮の御方に参られると、人々は珍らしがつてお見上げずる。中宮は命婦の君をして、「思ひの盡きない事でございますに、日の立つにつけても何のやうにか」と御消息を申される。君は、「常の無い世だとは、大方には思ひ知つてをりましたが、眼に近く見ますと、世の厭はしい事も多く、思ひ亂れもいたしました。度々の御消息に慰められました、今日までも」と申して、かうした折でなくても抱いてゐられる悲しみも取添へられ

て、いかにもお氣の毒である。無紋の上の御衣に、鈍色の下襲で、纓を巻いていらせられる御寢姿は、花やかな御装ひをされてゐる時よりも艶かさが勝つてゐる。春宮にも、久しく参らなかつた覺束なさを申上げて、夜更けてお退りになつた。

二條の院では、方々を掃ひ磨いて、男も女もお待ち申してゐた。上臈どもはみんな参つて、我も我もと装束をし、化粧をしてゐるのを御覽になるにつけても、君はかの大殿の居並んで萎れてゐた者の様子を哀れにお思ひ出しになる。御装束をお改めになつて西の對へお越しになつた。衣更への御装束が滞りなく鮮やかに見えて、よい若女房や、童へのなり姿が目やすいやうに整へてあつて、少納言の扱ひに不安な所がなく、心憎いと御覽になる。姫君はいかにも美しく繕ひ立てて入らせられる。久しく見なかつた中に、ひどくよく大人びて入らした」といつて、小さい御几帳の帷を引上げて御覽になると、側へ向いて恥ぢらふ御様は、飽かぬ所がない。灯影に見る御横顔、頭つきなどは、ただ彼の心をお苦しめになつてゐる人の御様に、違ふ所もなくなつて行くことだと御覽になつて、ひどく嬉しい。近くお寄りになつて、覺束なく思つてゐ

られた間の事などをお話しして、「此頃中のお話をゆつくりとしたいけれど、縁起の悪い氣がするから、暫く外で休んでから参りませう。これからはと絶えがなく見ませうから、煩さがられるやうになるかも知れませんが」とお話するのを、少納言は嬉しいと聞くものの、やはり危いものだとお思ひ申す。貴い忍び所の多くに關係されて入らせられるから、又煩はしい所が立ち換つてお出来にならうかと思ふのは、憎い心である。君は我が御方にお越しになられ、中將の君といふに御足など揉ませて御寝になつた。朝は若君の御許にお文を送られる。哀れな御返事を見られるにつけても、盡きない悲しみばかりである。ひどく徒然に眺めがちではられるが、何となき御歩きも懶くお思ひになつて、何處とお思ひ立ちにもならない。姫君の何事もさうありたいと思ふやうに整ひ切つて、ひどく愛でたくばかり見えるので、妹背のことがあつても似氣なくはない程に一方では見做されもするので、懸想めいた事などを折々いつて試みられるが、見も知らないやうな御様子である。君は徒然なままに、唯此方で碁を打ち、扁づきなどをしいしい日を暮してゐられるに、姫君は心持が巧者で、愛敬がついて、はかない遊び事の中に

も、見事な工夫をお見せになるので、女とは見ずにゐられた年月の間こそは、ただ幼い者としての可愛らしさだけであつたが、君は怵へられなくなつて、心苦しい事ではあるが、何んか事があつたのであらう。男女の差別のおありになる御仲とも見上げられないのに、男君の方が先にお起きになつて、女君は決してお起きにならない朝がある。女房たちは、「何う遊ばしたのであらう、お氣分が例のやうでなく入らせられるのだらうか」と案じてゐると、君は彼方へお越しなさうとして、お硯の箱を御帳の中へ差入れてお出になつた。女君は人の居ない間にやうやうの事で頭を擽げられると、引結んだ文がお枕もとにある。何心なく披いて御覽になると、

あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがになれし中の衣を

〔歌意〕 訣もなく貴方は今まで隔てを持って來られたのでした、幾夜さも共寝をして、さうはいふものの姿を來てゐた中の衣であるのに。「隔て」は、共寝しても著てゐる衣を「隔て」とし、それに心の隔てを掛けたもの。「なれ」は、著馴らした衣の姿を意と、心の上での「馴れ」とを掛けたもの。

と徒ら書きのやうな形にされてゐる。女君は、君にさうしたお心があらうとは夢にも思はなかつたので、何だつてさういふ心憂い御心を、打任せて頼もしいものに思つてゐたのだらうと、淺ましくお思ひになる。晝頃君はお越しになつて、「惱ましさうにしてゐられるが、何んな御氣分です。今日は碁も打たなくて、さみしいことだ」といつて覗いて御覽になると、いよいよ御衣を引被つて臥てゐられる。女房たちは引退つてお付きしてゐるので、近寄られて、「何だつてさう、氣のふさがるお扱ひをなさるのです。案外にも辛いお心だつたのですね。女房も何んなにか變に思ふでせう」といつて、お衾を引き退けられると、汗でぐつしよりになつて、額髪もひどく濡れてゐられる。「まあ可けない、これは何うも困つたことだ」と、いろいろに賺して云はれるけれども、女君は本當に辛いとお思ひになつて、一言の御返事もなさらない。「仕方がない、それだと全くお目に懸れなくなります。何うにも恥づかしい」と恨まれて、お硯を開けて御覽になつたけれど、お返しも無いので、まるで子供の御氣分だと思つて、可愛ゆいと御覽になつて、日一日御帳の中に入つてゐられて慰めて上げるけれども、御機嫌の直りさうにもない

のが一層可愛らしい。その夜、定めの子の餅を差上げた。かうした喪中のことなので、仰々しい風ではなく、此方にだけ、面白い檜破籠の入物だけで、色々の餅を參らせたのを御覽になつて、君は南表の方へお出ましになり、惟光を召されて、「あの餅を、ああ色々に澤山ではなくて、明日の暮に差上げてくれ。今日は縁起の悪い日なのだ」と、微笑んで仰せになる御様子に、氣の利いた者なので、その訣をふつと心附いた。惟光は皆までも承らずに、「ほんに、愛敬の始めには、日を擇んで召上がるものです。それはさうと、その子の子は、幾つ差上げたらいのでせう」と眞顔になつて申すので、「三つか、一つかであらう」と仰せになると、すつかり心得て起つた。物馴れた様であると君はお思ひになる。惟光は人にも云はずに、手づくりといふ程にして、里の家で作つてゐた。君は女君を賺し惱んで、今始めて盗んで來た人のやうな氣のするのも可笑しくて、この年頃かはいと思つて來たのは、その片端でもなかつたやうになつた。人の心は變なものである、今は一夜でも隔てることは堪へ難いことのやうにお思ひになる。仰せになつた餅は、忍んでひどく夜を更かして持つて來た。少納言は年輩の人なので、

女君が恥づかしくお思ひにならうかと、惟光は思ひやり深くも心遣ひをして、その娘の辨といふを呼び出して、「これをそつと差上げてくれ」と云つて、香壺の匣を一つ差入れた。「たしかにお枕元に差上げるべき祝ひの物です。氣を付けて、あだにはしないやうに」といふと、辨は不思議なものとは思ふが、「あだなんて事は、まだした事ありませんもの」と云つて受取ると、「全く今は、さうした言葉は嫌つて下さい、よもやそんな事は雜じつてはるますまい」といふ。辨は年をしない者で、事の様子も深くは思ひ附けないので、持つて来て、お枕元の御几帳から差入れたのを、君は例のやうにお教へになることであらう。女房は誰も知り得なかつたが、翌朝、この匣をお下げになつたので、親しい限りの女房たちは、思ひ合せる事などがあつた。お皿などは、いつの間にお拵へになつたのであらう、臺の足の花足などひどく清らかにした物で、餅の様も態との物で、ひどく面白く作つてあつた。少納言は、さうまで改まつての事はなからうと思つてゐたので、しみじみと忝くて、お届けにならない所のないお心に、先づ泣かれた。「それにしても、内々で仰せになればよいのに。あの人も何う思つたことだらう」とさ

さめき合つた。この事のおつた後は、君は内裏に、院に、ちよつと参られた間だけでも、落着き心がなく面影に見えて戀しいので、不思議な心だと自身ながら思はせられる。通つてゐられた所々からは、恨めしさうに物を云つて來られなどとすると、中には可哀さうに思はれる向きもあるけれども、新手枕の程の事とて氣の毒で、一夜も隔てが附けられようかとお思ひ煩ひになつて、ひどく懶く、惱ましい事のやうにばかりお扱ひになり、「世の中の憂く思はれる此頃を過しての上で、お目に懸りませう」とばかり返事をされしてお過しになる。

弘徽殿の新后は、御妹の御匣殿の、今でも此の大將にばかり心を寄せてゐるのを見られて、「いかにも今になつて見ると、あの貴かつた方も亡くなられたので、聲としても何も口惜しいことはなからう」と、父大臣の云はれるにつけて、君をひどく憎くお思ひになつて、宮仕へも懇ろにさへなかつたならば、何で悪いことがあらうと云はれて、内裏に参らせる事を言ひ立てられる。君も亦、御匣殿をおしなべての様には思つてゐられなかつたので、それを残念とは思ふけれども、今は他の女に心を分けようといふ思召もなくて、何だつてこのやうに短かさうに

見える世に、かういふ風で身を定めて行かう、女の恨みは負ふものではないと、大殿のことから一段とそれを危ない事に、お懲りになつてゐられる。

かの御息所は、いかにもお可哀さうではあるが、まことの寄る邊と頼んで行くとしては、必ず氣の置かれることであらう、この年頃のやうで關係して行つたならば、然るべき折節に物をいひ合ふ人としてはよからうなど、さすがに全きり思ひ切つてはしまはれない。此方の姫君を、今まで世間の人も、かういふ人だと知り申さないのは、輕過ぎるやうな氣がする、父宮にお知らせ申さうといふ氣になられて、御裳著の儀式をするにつけて、人に普くお話にはならないけれども、一通りではない様に思ひ設けられる御用意をされるのも、いかにも、鄭重なものであるが、女君はひどく君をお疎みになつて、年頃萬事につけて君を頼みに思ひ、纏はつて來たのは、淺ましい心であつたと口惜しく思はれて、はつきりとは顔を見合せることもなさらず、君の冗談を云はれるのも苦しく思はれて、君を酷い人と堅くお思ひ込みになつて、以前のやうではなくなつて來た御有様を、君は面白くも可哀さうにも思はれて、「何年もお思ひして來た甲斐もな

く、馴れは勝らない御様子が辛いことです」と恨みをいつてゐられる中に、年も改まつた。

元日には、例のやうに院に參つて、内裏、春宮などにも參られる。それから大殿にお越しになられた。大臣は新しい年だともいはず、昔の御事どもを話し出されて、さみしく悲しく思つてゐる所へ、君がこのやうにお渡りになつたにつけても、怵へようとなさるけれど怵へ難くお思ひになる。君はお年の加はつたせいでもあらうか、重々しい風までもお添ひになつて、以前にも勝つて清らかにお見えになる。立ち出て、御自分の屋の方に入らせられると、女房たちも珍らしくお見上げ申して、涙が怵へられない。若君を御覽になると、ひどく御生長になつて、笑ひ勝ちにしてゐられるのもあはれである。眼もと口つきなどまるで春宮に同じやうなので、人が見咎めるであらうと御覽になる。屋の内の御裝飾なども變らず、御衣架の御装束など例のやうに架けられてゐるが、女君の御装束の並んでゐないのが、總じてさみしく引き立たず見える。宮から御消息があつて、「今日は特別に怵へてゐるのに、このやうにお越しになると、却つて」など申されて、「昔に習つて拵へました御装束も、この月頃は益々涙に眼がかすんで、色合ひも

無いものに御覽にならうかと思ひますが、今日だけは、やはり前まへのやうにお褒れ下さい」とい
つて、ひどく心を盡された物どもを、更に重ねて下された。必ず今日お召しになるべき物とお
思ひになつた下襲したぎは、色も織りやうも世の常の物ではなく、格別に出来てゐるので、甲斐なく
思召にならうかと君はお著換へになる。もし來なかつたならば、口惜しくお思ひになつたらう
と心苦しい。御返事には、「春が來ましたしるしに、第一に御覽を願はうと思つて参りましたけ
れども、思ひ出します事が多くて、物を申し上げられません。

あまた年今日改めし色衣いろころも著ては涙ぞふる心地する

〔歌意〕 數多の年を、今日は改めて著た晴衣はれぎでございしますが、今年ことしは著ると、涙が降るやうな氣
がいたします。「ふる」に「舊る」を掛けて、「改めし」と對させてある。

思ひ鎮められませぬ」と申上げた。御返歌かへしには、

新しき年ともいはずふるものは舊りぬる人の涙なりけり

〔歌意〕 新しい年にも拘らず、降るものは年古つた人の涙なのです。「ふる」に「降る」と「古」
を掛けてある。

何れもおろそかな事では無い。

註

院——桐壺帝。

故宮——式部卿の宮。桐壺帝の御弟。六條御息所の夫、權の宮の父。

ささのくま——ささのくま檜の隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む(古今集)
釣する海人のうけなれや——伊勢の海に釣する海人のうけなれや心ひとつをさだめかねつる(古
今集)

山の井の水——くやしくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみ濡るる山の井の水(古今六帖)

何に忍草の——結び置かたみのここになかりせば何にし(後撰集)

時しもあれ——時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを(古今集)

雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず——劉禹錫の詩「庾令樓中初見時、武昌春柳似腰支、相

逢相失兩如夢、爲雨爲雲今不知」の結句。

古き枕古き衾、誰と共にか——白樂天の長恨歌中の「鴛鴦瓦冷霜花重、舊枕故衾誰與共」。